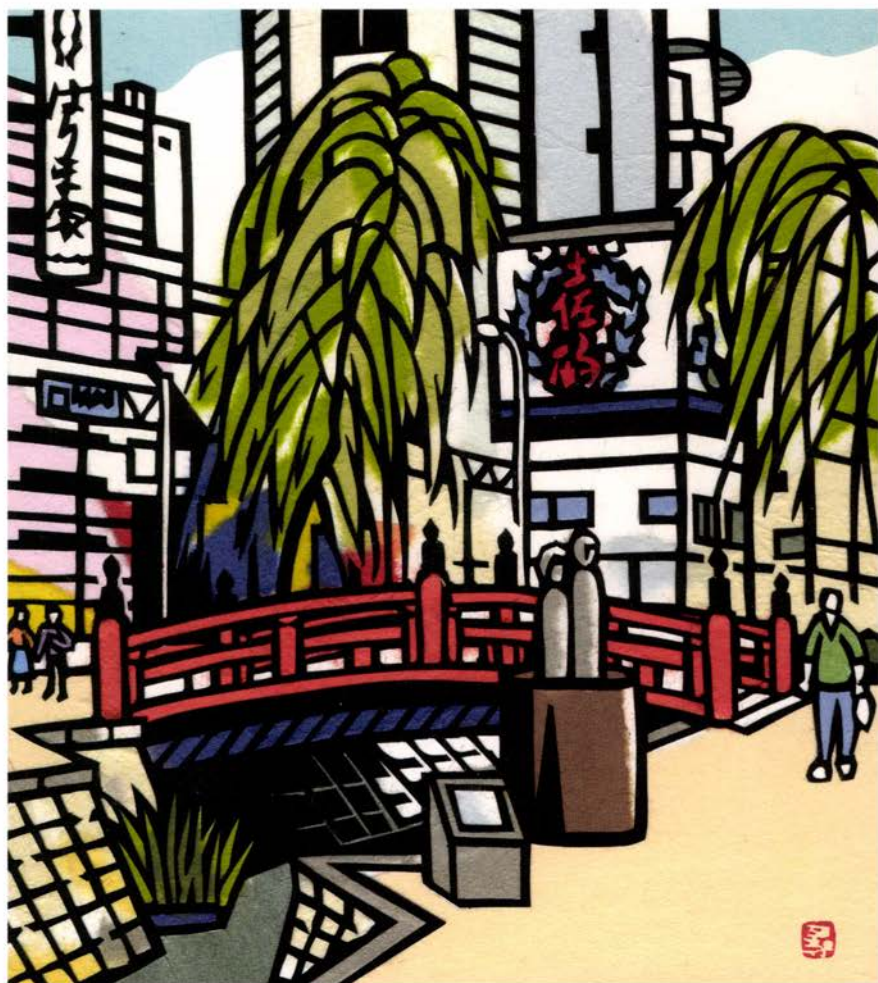


川柳塔

平成二十九年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇八二号



日川協加盟

No.1082

七月号

― 路郎賞・川柳塔賞の応募は

八月号の刷り込み用紙で ―

① 川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成28年9月号から平成29年8月号までの入選句（自分の句を出句する）

③ 8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き8月10日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に
誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いないようにお願いします。

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄 川上大輪

檸檬抄 山口光久

斉尾くにこ 共選

川柳塔社

「檸檬抄」課題

共選

発表	月	課題	締め切り日
29年	9月	あっぱれ	7月15日
	10月	図星	8月15日
	11月	応援	9月15日
	12月	頼る	10月15日
30年	1月	シャープ	11月15日
	2月	一大事	12月15日
	3月	もっと	1月15日
	4月	浮く	2月15日
	5月	魔法	3月15日
	6月	退屈	4月15日
	7月	柔かい	5月15日
	8月	像	6月15日

清水白柳先生

小島 蘭 幸

昭和38年、私達中学三年生五人は、竹原川柳会に入会しました。当時の竹原川柳会は、山内静水会長の家族と、隣近所の会員数名の小さな会でした。月刊誌川柳たけはらは、タイプ印刷でしたが、その中に作句教室というコーナーがありました。担当していたのが清水白柳先生でした。大阪の川柳の先生が課題吟の選をして短評も書いて下さるということとで、私達五人も一生懸命作句しました。白柳先生は、秀吟、入選句だけでなく応募作品一句一句に懇切丁寧に短評を書いて下さっていたのです。ある時は速達で、またある時は電報で入選句を知らせて下さいました。

昭和40年10月、川柳雑誌改題第一号として川柳塔は創刊されました。初代の編集責任者が白柳先生でした。当時の柳界展望を見るとその活躍は目を見張

るものがあります。川柳雑誌から川柳塔へ……。その超多忙の時期に、遠く離れた広島県竹原市の小さな川柳会に目を向けられていた白柳先生の心を思うと涙が溢れてきます。

吾がものにたつた三日のお正月 白柳

昭和46年に発行された「清水白柳遺句集」の序に中島生々庵川柳塔社主幹は次のように書いておられます。：白柳さんの川柳に対する執念とか、情熱とかに就いては、川柳の虫だったとか、川柳の鬼だったとかいう言葉では到底言い尽くせない程にきびしいものがある。川柳のためにこの世に生まれて来た人間だったとまで極言する仁もある位で全く同感である。自分の修めた善事善行の巧徳を他人の為にふりむけるのが菩薩の回向だとすれば、白柳さんは川柳済度の目的でこの世に仮の姿を現した権化だったと、私はうけとりたい。

この6月で川柳塔社の同人になって50年になりましたので、静水会長のお墓にご報告させていただきます。そして川柳を始めて間のない19歳の私を同人に推薦して下さいましたもう一人の推薦者、清水白柳先生の温顔をしみじみと思ひ出しています。

座右の句

イイをしてご覧と齒医者真面目也

(路郎)

私の句

無印がやはり自分に合っている

杉野羅天

川柳塔 七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「高知・はりまや橋」

■巻頭言 清水白柳先生

小林由多香さんとの思い出

小島蘭幸……(1)

川柳塔(同人吟)

森山盛桜……(2)

自選集

小島蘭幸選……(4)

句集の森

澤井敏治……(46)

■ショートエッセイ 親じまい

津井敏治……(47)

温故知新

木津川 計……(48)

川柳塔の川柳讃歌^⑮

麻生路郎……(49)

新川柳鑑賞^{⑥⑤}

西出楓楽選……(50)

水煙抄

橋高薫風句抄……(71)

俳風柳多留一二篇研究

愛染帖……(72)

愛染帖

新家完司選……(74)

小林由多香さんとの思い出

森山盛桜

新聞の計報欄に目を通すのは毎日の事なのだが、二月二十五日の計報欄に、小林由多香さんの名前があった。本当に突然だったので驚いた。容態の悪化とか入院とかの情報が全く無かったからだ。しかも、葬儀は二十四日に近親者で営まれたと書かれていたので、取る物も取り敢えずお悔やみに伺った。八十九歳の天寿であった。

思えば昭和五十二年四月、生まれて初めて作った川柳が新聞に載った。思いのほか嬉しかったのを憶えている。その時の選者が由多香さんであった。翌年三月に、第一回鳥取県川柳大会が倉吉市で開催され、その会場でこちらから名乗って初対面を果たした。

未だ鹿野みか月が出来る前の話で、以来うみなり川柳会に通わせて頂き、森田熊生さん、両川洋々さん、北野天人さん

檸檬抄「あつさり」

北野哲男・安土理恵共選 (79)

一路集「波」

山崎武彦選 (82)

初歩教室「スポーツ」

飛永ふりこ選 (83)

川柳塔鑑賞

居谷真理子 (84)

水煙抄鑑賞

倉益一瑤 (86)

せんりゅう飛行船 ⑦9

佐々木満作 (88)

■「麻生路郎読本」を辿って

新家完司 (89)

「時を越えた出遇い」

淡路放生 (90)

インスピレーション・ナビ

岩崎眞里子 (94)

印象吟

大西泰世 (98)

六月本社句会

岩崎眞里子 (104)

句会燦燦

岩崎眞里子 (104)

各地柳壇(佳句地十選)

岩崎眞里子 (105)

七月各地句会案内

岩崎眞里子 (106)

柳界展望

岩崎眞里子 (107)

■編集後記(ひとこと)

松本 昌 (108)

座右の句

朱夏・まつお (152)

花になり実になり踊り抜く系譜

森山文切 (120)

私の句

森山文切 (120)

等多くの柳人を知る事になった。茗人莊

と茶町公民館での句会には、欠かさず出

席をして、また、茗人忌大会、鳥取市民

大会、きやらほく大会等にご一緒させて

頂いた。蟹目的の豊岡大会も楽しい思い

出になっている。句会のあとで時々、溜

り場になっていた初音通りの飲み屋での

川柳談義も懐かしい。

県川柳協会会長を退かれてから六年、体

調が優れないという事は聞いていた。一

人暮らしをされていたので、年に数回は

お邪魔をして、僅か数分ではあったがお

話をして帰るといふ繰り返しであった。

後年は、ご自分の会にも出席する事が

出来ず、投句を届けてもらって選をし、

軸吟を付けて返すという事をされていた

ようだ。そこから五句を紹介させて頂く。

待ち時間つぶす漫画がおもしろい

私にはわたしの道があり進む

お日様が沈むと酒がほしくなる

見て習い聞いて習った深い味

新しいおもちゃへ機嫌よく遊ぶ

由多香さん、お世話さまになりました。



小島 蘭 幸 選

神戸市 細川花門

川柳の旅の起点は富湖の句

雨の日は酒 晴れの日は人に添う

先人の句碑に野菊とカップ酒

助詞ひとつ推敲をする蝸牛

師の一句真ッ正面にして端座

川柳の旅は来世の夢花火

沖縄県 森山文切

耐え切って鼓動は息になりました

自画像が出口の方を向いている

甲斐性はありませんがという小指

二歳児の手付きで留めているボタン

ウィルスも色恋沙汰は遠慮する

削り尽くされた柱が折れました

枚方市 藤村亜成

テロみんな無人島に閉じ込めん

一糸乱れぬ軍の行進気味悪し

嬉しいといつも脱線する時計

傷心を癒やす眼差しが温い

巨木に耳当てるとめくりだす歴史

おーっととスローモーションで転ぶ

松原市 森松まつお

やせたい妻に太りたいボク

リハビリへせめて杖なとカラフルに

タコ焼きに妻はビールでボクはお茶

ドヤ顔でパラパラの焼きメシを出す

川柳に追われて遊ぶ暇もない

雨ですよお隣さんの声がする

弘前市 高瀬霜石

自慢ではないがこれみな向こう傷

バスに乗る小銭しっかり握りしめ

ロボットのメンテもロボットがこなす

バツイチの2人が合うわけがある

ドクターのちよつと気になるひとりごと

大器晩成まいにち臍に言いきかす

鳥取市 両川無限

いい人ができたかとてもよく笑う

雨音が弾け私の哀を打つ

自画像を外して鏡掛けておく

国会にどろどろ音が鳴り響く

写メールでバラ百本をもらつても

シャガールの青を切り取り遺書とする

篠山市 酒井真由

神々の棲む山夏の霧の中

満目のみどり活断層の上

戦中派懐旧談に夜が更ける

遠い日の記憶みどりの地平線

大変な時代を生きてきたんだね

夕刊がかさりと鳥は巢に帰る

鳥取市 森山盛桜

白墨はとうとう白を貫いた

庇い手が早過ぎ負けになりそうだ

孤独死は未だ他人事と思いたい

なまくらな身の上話なら出来る

捨て犬を惨めにさせた血統書

退職の後にもあつた処世術

河内長野市 山岡富美子

滑り込みセーフに疲れ見えてくる

葱坊主優等生になれぬまま

普通にと難しいこと言うてはる

弱音など吐かない赤いマグカップ

何もせずなにも言うなという刑も

雑念は持たぬおおきな頭陀袋

大阪市 井丸昌紀

日本の重心断層が走る

何事も五分五分友情は続く

いつ見てもにこにこ怖い人らしい

守るものないので鍵は掛けぬ主義

カラオケは点数を出すのをやめろ

芯のない男が好きなおムライス

大阪市 谷口義

私の虫干しに行く墓参り

神さまは見たはれへんと思うけど

あとがきのあたりにホーレン草が生え

とどめ刺すように前歯が欠けました

誰が考えたのかアイウエオ順

八十からは小節を入れて生きてます

大阪市 平井美智子

尽くせなかった悔いを数えて遠年忌

メール打つ手も時代から残される

正誤表の中にまたまた誤字脱字

失ったものを数えている日暮れ

答など無いと微笑む昼の月

愛し合うようにと花が咲いている

鳥取市 岸 本 宏 章

バラレモン漢字で書いたことがない
立ったまま靴下履けと言われても
ぶらり旅総理夫人もままならぬ

三割の支持で当選する市長

大切なことは正面向いて言う
天皇のお氣持痛いほど分かる

鳥取市 岸 本 孝 子

立ち姿しみじみ老いたなと思う
掃除機は二日に一度かけている

難しい話が好きな学者さん

主婦やめてぶらぶら過ごす夢を見た
地震予知進みおちおち寝ておれぬ

大切にされると弱る足や腰

松江市 松 本 文 子

平成を掻き分けながら生きている
笑顔になるのは何時でしょうお月さま

花も散りつまらぬ日々耐えている
哀しみを見つめて香典と書く

少しずつ世間とずれていく時計
バリバリと夢食べている怖くない

鳥取市 夏 目 一 粹

二つ知り一つ忘れるのはまとも

どれほどの嫌味を埋めて来たことか
寝ることが仕事であれば辛かろう

儉約が美德の頃に戻りたい

女性って偉い見知らぬ家に嫁ぐ
長生家は拷問されているようだ

四條畷市 吉 岡 修

お人好しすつとほけても顔に出る
ぐつぐつと辛抱と言うのを煮込む

目配りと気配りぐせの抜けぬまま
ひそひそと次の総理の品定め

大技も小技もいらぬ押せばいい
つるりんこそそんなに気にはしてません

田辺市 岡 本 昇

六十年無事故無違反金字塔
丸投げの家計引き継ぐ者がない

腹八分暮らしのテンポ落とします
さは読んで心淋しくなりました

気配りが過ぎて寛げない坐椅子
過疎進むもふるさとの山動かない

岡山市 丹 下 凱 夫

咲いて散るただそれだけの山桜
鶯やよく食べよく飲みよく歩く

一輛電車いつも陽気に走っている
大根の花が好きです月も出て

息抜きをする窓がある備前富士
旅ごころふくらんでくる桐の花

東かがわ市 川崎 ひかり

孫伸びる私は縮む背くらべ
モノクロと昭和が似合う原節子
美味しいもまずいもひとり飯茶碗
田舎でも監視カメラがあちこちに
昭和とや真白き母の割烹着

松山市 栗田 忠士

慈しみ尽くした母の花魁
ちぐはぐを谷折りにして生きている
三角も四角もやがて丸くなる
身のうちのマグマ時々目を覚ます
棚ぼたの運命論は捨てました

松山市 宮尾 みのり

世の移り変わり価値観まで揺らぎ
せせらぎも海鳴りもある胸の底
安定剤今日一日を頼みます
何としても生きねばならぬ訳がある
落し蓋なりの気概を持って祖母

大洲市 中居 善信

ありがたいことだ八十年生きた
八十年産まれ育った里に居る
自給自足の中で育った少年期
外の空気はまだ吸ってない里育ち
次の世は少しあか抜けた町で

西予市 黒田 茂代

一期一会円空仏に飛驒で会う
さくらツアー予期せぬ飛驒の夢火花
さくらのトンネル続く参道華厳寺へ
しなやかに優雅に宇野千代のさくら
宇野千代のさくら心のネガに焼き付けて

高知県 小澤 幸泉

神の国へ古い上着を脱ぎ捨てる
古くさい話黙って聞いてくれ
用意なくいのちの終りやってくる
人間が野性に戻る日の恐さ
四十五年妻の妻さを見つけたり

唐津市 坂本 蜂朗

今日も又あなたあなたと当てにされ
あなたこそ出ておゆきよと妻傘寿
女房の気儘な波にただ耐える
よちよちを任され祖母が光り出す
優しさに引き摺り込まれ五十年

唐津市 山口 高明

どう読むか苗字の由来尋ねられ
暴走の君主へお灸据えとかな
路地裏の番台将棋夕涼み
平凡な我が家に事件姉が嫁く
館長も理事も役所の天下り

熊本市 杉野羅天

ステップを踏んで涙を弾ませる
シクラメン水やるだけの僕に咲き
子を抱いて今日はしっかり母の顔
二週間の予定が帰らぬ人となり
心閉じてても開いても君のこと

熊本県 岩切康子

薬二種とテレビ体操八十路坂
端切れのアートに心引かれてる
繰返し検査するだけ癌安堵
お互いに行先伝え分かれてる
身の丈に合う生き方はわたし流

札幌市 小沢淳

アンティーク鋸を飾って気分よし
命延び介護ベッドの幸不幸
開けゴマ中東に春まだ来ない
マナ板は乾き女はペンを持つ
第九は歓喜九条は平和

札幌市 三浦強一

老夫婦ガラケーという糸電話
アナログ派万年筆を走らせる
モジリアニの首伸びてくる待ち惚け
泥んこの顔が微笑むボランティア
ボブ・ディランそんなにいいか聴いてみる

弘前市 浅田隆樹

みどりの日残雪いまだ奥羽線
山あいの家屋似通う仲の良さ
山村の春まだ浅い風の音
過疎路線つり革ズラリ揺れている
各駅の地名に残る滋味深さ

弘前市 稲見則彦

鉄腕も鉄人もいました昭和
ぺたぺたと塗り絵のようにする化粧
包丁を研いで男は厨立つ
ライバルが視野にあるから明日がある
鈍色の海が好きだと赤い靴

弘前市 岡本花匠

車窓から市街の花見味なこと
陸自二陣も帰還してみな笑顔
りんご開花授粉大事に人手借り
五月風体調整の気持良さ
迷彩の油断付けこむ熊がいる

弘前市 今愁女

桜からバトンタッチのりんご咲く
岩木山裾野満開りんご畑
マメコバチ 働き蜂が愛運ぶ
早熟なタンポポが黄の絨毯を
甘いマスクのアラン・ドロンも引退と

弘前市 須郷井蛙

顔色で解る生徒の健康度
下世話で終った嫁にアリガトウ
世話をした分しっかり実をつける
初運転父が必死で助言する
孫からの頼りネクタイ締めたまま

弘前市 高橋洋子

年なりに夢もリフォーム古い知らず
エプロンを着けて夫は主婦気取り
はい、いいえだけでは迷う問診票
ママチャリでバランス研ぐ土踏まず
過去のこときのうのようにふと思う

弘前市 福士慕情

サクラ咲く春を優しくしてくれる
日本一古い櫻も花盛り
桜闇あなたは遠く見るばかり
風吹けば風に任せる花筏
咲いて散る桜も人も地に還る

青森県 松山芳生

さくらに乾杯津軽の万華鏡
泣けないヒマワリだつてある筈だ
手探りで空の蒼さを読んでいる
生前葬済ませて生きるおぼろ月
おくりびと何とやさしい手のリズム

さいたま市 星野育子

連休明けやる気ボタンを探す日々
そもそもと過去の話が幅利かす
とりあえずか仕方が無いのか不明
多数決これが一番の曲者
和式トイレ使えない小学生

東京都 川本真理子

介護ホーム遅れて響く春太鼓
生きているのは超絶技巧爪を切る
思い出の片隅亡父のはんだごて
夢の亡父 父らしいこと言い置いて
骨壺に風鈴のおと響かせる

八王子市 川名洋子

眠ければ眠ればいいと春の風
巢立つ子の羽音は聞かぬふりをする
遠慮なく記憶を食べに来る加齢
いつからか嬉しくはない誕生日
ハンバーグ小さくしてる恋心

横浜市 菊地政勝

凝り出した趣味へストレスつきまとう
相槌を打って主流へぶら下る
慇懃な挨拶状の寄付が来る
家計簿の扮飾だから許される
裏わざを見せず堂々負けてやる

富山市 島 ひかる

五百羅漢ひとり一人にあるロマン
新緑へ心の雨も晴れ上がる
今が花いまが華だと思ふべし
臍の緒の箱書きにある出生地
後期高齢清き一票当てにされ

可児市 板山 まみ子

サブリ一錠で元気にする魔法
食事より薬の方が気にかかり
買い過ぎておいまくれる期限切れ
才能は結果が示す若い棋士
連休は敢えて出掛けぬ草むしり

大山市 金子 美千代

ダイレクトメールが祝う誕生日
良いところに住むうぐいすにわらび採り
客の目で見れば埃が浮いてくる
助走期間ないリーダーの綱渡り
坊様も残業手当ある世相

大山市 関本 かつ子

都会には敗けない里の鯉のぼり
連休がとても寂しい人もいる
乾杯もビール焼酎日本酒と
百均の傘で晴れ間を待つボタン
笛吹けど孫や子供に届かない

愛知県 早川 遯行

犬のいる家族はいつも楽しそう
ネコのいる家は静かで慎ましい
犬とネコ飼ってる家は賑やかだ
銅像になった名誉な犬もいる
ネコだって駅長にまでなれるのに

京都市 清水 英旺

ガンバレといわれて傷が深くなる
きょうもまた拾う憂き世の癪の種
起承転 なかなか結がみつからぬ
心の隅 押し殺してる小さき罪
不意打ちに値上げするとは卑怯なり

京都市 榊本 宏子

あばら骨目立つ祭りの豆相撲
飛行機雲やがて夕陽に食べられる
送迎バス客は静かな高齢者
老春中昼の公園缶コーヒー
子の苦勞過去形にしていとおしむ

京都市 三宅 満子

酔っぱらった時だけ電話くれる友
順調に爪が伸びてる生きている
風邪引いてちよっとくびれが出来た腰
夫のことあなたと呼んだことがない
待ち時間スマホがあれば苦にならない

長岡京市 山田 葉子

歳を経て繋ぐ絆はゆるくする
いつもいつもキチンと胸にストライク
富士山に会うと敬礼したくなる
家計簿をつけない暮らした赤字
もつともつと褒めて育てたらよかった

八幡市 今井 万紗子

環状線三周回り旅終える
無人駅今年も桜咲き誇る
ドタドタと来てバタバタ帰る五連休
縄電車最後の客は母だろか
悲しいねいつもごそごそさがし物

大阪市 池上 清治

宿題で残された日々懐かしい
いたずらで括られたひも解けない
残り物の黒飴に祖母手をたたき
残りくじひけば思わぬ祝い酒
軽傷ですんだ名残の注射跡

大阪市 内田 志津子

愚痴ひとつ旅の終りに捨ててくる
傷心の肩を抱かれる手が温い
デイの道母は逝くとも桜咲く
一呼吸おいて憤怒の川渡る
自画像の汚点を一つ減らす筆

大阪市 宇都 満知子

うちの実も仲間に入れて漬ける梅
悪口を聞く忍耐が痩せてきた
喜びは言いふらさずに独り占め
ミシン仕事指紋がすこし消えている
抹茶ソフト宇治の河原に腰かけて

大阪市 江島谷 勝弘

ライバルと年齢だけは互角です
二歳児が強要しますハイタツチ
ヘソ曲がり好きなスポーツはラグビー
おおむかし有馬稲子が好きだった
年金がなければとうに死んでいる

大阪市 榎本 日の出

川柳に強く生きよと励まされ
本読んでわたしの心変えてゆく
夏の風優しく笑う爽やかさ
この歳まで元気に暮らしあとおまけ
負けること覚えてからは楽になり

大阪市 榎本 舞夢

雨上り枝垂れ桜の美しさ
ゴールデンウィーク予定無しで待つ
日曜日掃除洗濯ランランラ
本社句会何で休んだデンワ来た
連休呆け遊び過ぎたかポカしてる

大阪市 大川 桃花

見栄はつてやりくりしたの子に内緒

私より先に住んでた貧乏神

沙羅ちゃんの美貌どどん磨かれる

先輩に教わりました惚け方

ごめんねを使いこなして生き上手

大阪市 大治 重信

純情の槍で男の胸を突き

お下げ髪苛めて泣かせ好きだった

無垢なまま川を見ていた戎橋

橋立の股から覗く若葉かな

太陽の輝く下に原子力

大阪市 奥村 五月

卒業后会えば優しい鬼コーチ

優しさに惚れた男に金は無い

連休は医者は休みで酒ハシゴ

腹立つが妻の意見は御尤も

あの世では使えぬ金を何故貯める

大阪市 笠嶋 恵美

氷室の桜素通り出来ず途中下車

妹二人にぎやかすぎてくたびれる

ゆっくりと休みなさいと雨続く

ヘレンド展しばし時代の中に入る

探検と遠いデパート無駄も買い

大阪市 川端 一步

しあわせか問われてハイと手を上げる

若いなあ言われ鏡を見てしまう

悪政を笑ってやろう大声で

勝者より敗者にきつとあるドラマ

反省のうたに挑戦しています

大阪市 熊代 菜月

陽がしずむ明日も逢おうと手を合わす

白酒にほほ赤らめる孫の春

聞く人も無い一人ぼっちがグチを言う

口先きの世辞などいらぬ友と旅

連休を後期高齢もてあまし

大阪市 古今堂 蕉子

パトカーがピッピ私流れに乗っただけ

ヤバイマジ私の口から出る嘆き

着物着て帯締め女取り戻す

寡黙というペール私に似合わない

意のままになる足腰とならぬ脳

大阪市 小谷 集一

振り向けば迷った跡がある轍

夢描く賞味期限の来ぬうちに

アデランス着けて働く顔になる

都合よく忘れた振りが上手くなる

よく耐えてくれたね妻の丸い背な

大阪市 坂 裕之

完全を求めすぎると窮屈に
風受けて五月の森を二人行く
休むこと知らないようだお母さん
入学の知らせ信じて待っている
間違っていないと信じて手を挙げる

大阪市 田 浦 實

満月の化粧が上手生駒山
修羅場こそ人を育てる大舞台
メランコリー繁昌亭で吹き飛ばす
口爆弾めつきり効果落ちて来た
子を思う親のまなざし阿修羅像

大阪市 寺 井 弘 子

バスの旅今日の喜劇の中にいる
トップの座譲って消えた不眠症
生き上手まわりの空気とらげる
残り火が記憶持ち寄るクラス会
家族から優しくされている不安

大阪市 寺 本 実

とんがった男も影は丸く見え
薄命と言われた君と今も居る
掛軸はわからないけどほめておく
挨拶をすると子供が避けていく
鵜呑みする事を許さぬ長良川

大阪市 津 村 志華子

上げ膳据え膳二泊三日のパラダイス
こだわりはしない素直なところてん
ああしんど誰の所為でもないものを
脇役も主役もこなし恙無い
枝振りは植木屋さんの御意のまま

大阪市 栃 尾 奏 子

てのひらを返して今宵小悪魔に
検索は不粋綺麗になりました
意地悪な噂が小指から小指
笹舟の指切り守れそうにない
夕焼けに思い出す人あり棚田

大阪市 中 井 萌

ほらここに心配性の母が居る
愛すればこそその誤解が横たわる
迫力に欠ける見上げて説教は
勝てぬから嫁と競わず争わず
年を取る筈だ隣家にお嫁さん

大阪市 原 田 すみ子

三句四句わたしが見えるこぼれ出る
歩いて来た道をもう少し延ばす
千羽鶴思いは飛ばず束ねられ
痛点と気付かぬ傲慢なわたし
かけた手間うまさきつちり味わえる

大阪市 平賀国和

古稀祝う僕と憲法同じ歳

九条と共に百寿を目指したい

こころの窓開けて楽しむ趣味の会

田子の浦赤人思い富士仰ぐ

薫風に僕の五感も芽を伸ばす

大阪市 藤田武人

席譲る気持ちはすでにマナーです

クーラーを効かしネクタイ締める僕

粉もんがおかず肴になるなにわ

人間と同じ病になるベット

シルエット見ればあなたと判ります

大阪市 藤原千恵子

父さんは水を買って飲む準備

やばいからポルシェの車先どうぞ

微笑めばたいいていのこと流れ雲

すごい事平和な顔でささり言う

それなりに役目済ませてアイスティー

大阪市 升成好

終電車働き過ぎと遊びすぎ

月だって人に見せない影がある

愛というエキスも詰めたお弁当

伸びるため何でもつかむ豆の蔓

お互いに我慢した気のお金婚譜

大阪市 山本加お里

何げない仕草が様になっている

ありがとうお天道様は見てました

もろもろのお蔭身にしむ昨日今日

白い蛇色の違いで拝まれる

よく伸びるゴーヤの蔓に勇気わく

大阪市 吉内タカ子

鯉のぼり町には見ない子供の日

生かされる無駄にはしない好奇心

余生にも甘え上手を教えられ

青空に笑ってる好きな花水木

花水木咲けば嬉しい夫に逢える

大阪市 若本安代

独り身が骨身に沁みる五連休

少子化で川で泳がす鯉のぼり

花育て皆穏やかな顔になる

お参りも忘れて寺のバラ見蕩れ

亡き母の声が聞きたい五月です

堺市 柿花和夫

妻の出す波浪警報外れない

深い訳聞かずに友は注いでくれ

古里の味を求めて合わせ味噌

古書店で見つけた本とわが齢

転んでも丸くなれない老いの意地

堺市加島由一

花を抱き母の日の妻ハイチーズ
「サソリ座の女」歌えば座がなごむ
ヘルパーが来るからトイレ掃除する
老人がひとり消えまたひとり消え
父の日よ瓶に一輪庭の花

堺市源田八千代

日脚伸び夕食時間遅くなる
連休に単身赴任癒やされる
墓参り済ませ二家族やつて来る
父の日はふるさとの味供えます
ビール腹気にする夏の到来だ

堺市齋藤さくら

妻の愚痴知らん顔して聞いている
この頃は子供の意見先に聞く
居るだけでほっとするのも夫婦なり
腹立てぬことが長生きだと言われ
早いなあもう紫陽花が咲きそうだ

堺市坂上淳司

年金に暮し合わせと言う政府
見え見えの疑似餌を付けた改憲論
井戸端会議も盗聴されるやも知れぬ
文句あるなら自民越えろと言う総理
公明も維新も自民党のボチ

堺市澤井敏治

一週間世俗に飽きて散るさくら
薔薇窓の朝日まぶしい聖五月
生きてますよと毎朝定時窓開ける
図書館で爺も読んでるマンガ本
持て余す時間に遊ばれるわたし

堺市遠山唯教

切磋琢磨したライバルが減っていく
核禁止に白いたてがみふるわせて
探しもの増えてひきずりまわされる
めつきりと老いた五感を研ぎ直す
青春を吹奏楽が駆け抜けた

堺市内藤憲彦

くずかごへ薬飲んだか聞きに行く
フレッシュがニコニコ並ぶ道の駅
耳打ちをした噂話はよく走る
箱入りのままの娘に世話になる
ついさつき控えたメモが見当たらん

堺市矢倉五月

いいわよと笑って済まし大人ぶる
風邪十日心繕う二、三冊
娘に電話するにも選ぶ時間帯
朗らかで無邪気なだけを好きになる
花みんな落として若葉威勢よし

和泉市 横山捷也

追い風を待つて大きな夢を追う

初盆が来る前虫歯抜いて置く

防犯カメラにVサインした子が映る

ちぐはぐな暮らし遺伝のセイらしい

ラーメン屋でざるそば食いたくなってきた

茨木市 島田誠一

帰省ラッシュ車地獄という流れ

キラキラネームルビが頼りの迷子札

独裁の風になびいたマスゲーム

枯れ葉にも若葉にも愛そんな齢

どなたですか互いに聞けず只笑う

茨木市 藤井正雄

派手な過去誰も知らない車椅子

湯冷め気になるが切れない長電話

ふるりの灯はあたたかい母の酌

勇気ある本音を課長買ってくれ

扇子はたばた気乗りのしない話聞く

貝塚市 石田ひろ子

聞き流す術も覚えた輪の中で

母の日も平穩無事の米を磨ぐ

諸行無常牡丹の花に見る未練

登り坂あるから自信湧いて来る

ゆっくりと生きる自分の縄を綯う

河内長野市 植村崑代

戦中はすべての色を消して来る

寂しいね夫と娘が逝ってから

いろいろあっても一日は暮れる

ケータイへ孫の写真を残して逝き

どうなるかわからぬ事態が起こつて

河内長野市 大島ともこ

やんわりとされた説教身に響く

優しさと背中合わせの意気地無し

新しもん好きでワクワクすぐ飽きる

リーダーになつて本音を飲み込む日

冗談に本音チクリと混ざる技

河内長野市 梶原弘光

齢を食う程にちっちゃくなる手帳

イントロを省くと上手く唄えない

ありがたいツツコミ入れる友が居て

トンネルは続く本物までの道

爆弾を抱えて「ひとりカラオケ」へ

河内長野市 木見谷孝代

コンビニの弁当持つて花の下

連休もいいな子が酌ぐうまい酒

春爛漫浮かれ出してる筆の先

卓球を教え爺じの株上がる

里帰りする金だけは惜しまない

河内長野市 黒岩靖博

河内長野市 村上直樹

古稀祝い息子よき嫁至福の日

古稀祝い天下人です有馬の湯

家族風呂久しく妻と向かい合い

久しぶりラッシュアワーに後ずさり

蝶とんぼ蛙も減ってきた不安

河内長野市 谷久美子

弁当にエールを詰めて送り出す

お互いが年だ呆けたと笑い合い

噂話乗らず喋らず首振らず

夫婦茶碗無傷で今も使ってる

今生きる為に体調自己管理

河内長野市 辻村ヒロ

分捕りたいほどのお方にまだ会えず

好奇心老いを忘れてまた走る

ときめいた古稀の乙女は不整脈

久し振りライバル心が顔を出す

初恋のときめきくれた人と居る

河内長野市 藤塚克三

岩盤浴悩みプチプチ消えていく

休肝日さわやかな朝辛い夜

金の無心ころを鬼に突き離す

後悔の節目節目に亡母浮かぶ

気を遣う妻の言葉に立ち上がる

五分五分なら一歩下がって負けて勝つ

五輪万博全部観るぞとスクワット

ポイントは節酒ですよと健診書

つい触れた素顔の妻の白い指

本音ならこころの襷の奥の裏

河内長野市 山室光弘

格安に潜む危険な落とし穴

駅弁が食べたくなつて旅に出る

野良猫の愛を知らない孤独な目

鯉のぼり減って売り家の目立つ旗

口紅をドキリとさせる色で描く

岸和田市 岩佐ダン吉

右左あなたの位置が見えません

不足などないじゃないかと言ひ聞かす

突き放し時どき僕と対話する

本当の敵は私だ そうつ思う

かすかだが祭太鼓の無人駅

岸和田市 宮野みつ江

大木を覆い山藤したり顔

五月モクモクと山の木々湧く

掘りたてと筍木の芽添え届く

亡父さんに初物ですと木の芽和え

蕨買う今更悔しまヒの足

岸和田市 雪 本 珠 子

冷めた愛背でうすうす感じてた
ロボットが今にこの椅子取るかもね
輪の中に川柳の花咲かせてる
リラックスし過ぎて脳が空回り
波の音微かに夏の気配する

吹田市 太 田 昭

自画自賛みずから落ちる穴を掘り
プライドを捨てて荒地に墓地を買う
記憶の底に浮き沈みするロゼワイン
人間という肩書きもいつか消え
命日を間違えました惚けました

吹田市 木 下 敏 子

尺貫法忘れ昭和は遠くなり
踏まれてもタンポポ丸くまるく咲き
ウォーキング朝食までに四千歩
指折って今日も感謝の句を作る
何事も笑って過ごす梅の花

吹田市 須 磨 活 恵

来年も桜に逢えるかと信じてる
青葉若葉五感擦る甘い風
美しい五月嬉しい青い空
肉魚命の糧となる微罪
神さまの許す微罪で今日も生き

吹田市 野 下 之 男

本心が判らぬ武器の展示会
どうしたの口と大臣軽すぎる
坊さんに残業代は知りません
じいじいと駆け寄る孫の愛らしさ
タケノコもこの世きらいか出て来ない

高石市 浅 野 房 子

もうみんな故人だ過去は忘れよう
阪神が勝ったやっぱり気分良し
ただくと先ずお返しが気にかかる
さくら散り今満開の花みずき
気が向かぬと出来ない家事もあるので

高槻市 井 上 照 子

一步退く勝負は別だ譲れない
国と国戦う用意聞きたくない
娘の炊いた筍ご飯いい季節
きのうまで桜さくらふと消える
人生の幕が気になる年になる

高槻市 指 宿 千 枝 子

懐かしい亡母の笑顔よその声よ
温もりを残し夫逝き子は巣立ち
勝ち負けを自分と競う独り者
新聞の笑いの種に声出して
旅リユック上野浅草ぶらぶらり

高槻市 片山 かずお

言い過ぎて嘘っぽくなる誉め言葉
びったりと寄り添われても邪魔になる
おキレイと言って反応たしかめる
生きるためですとへつらうこともする
きつと曲者だ笑顔を絶やさない

高槻市 島田 千鶴子

メディア向け赤いたすきに茶摘み唄
ジャズフェスタ街に若者溢れ出る
道の駅旬の野菜をどんと買う
再配達頼む電話は丁寧語
電子辞書言葉の森も近代化

高槻市 初代 正彦

余生にも花の小路がある きつと
ジャズ音も洩れて皐月の萌える街
忙しなく老躯の啜る駅うどん
少年のもやもや傍の無関心
ど忘れを手帳のメモに叱られる

高槻市 杉本 義昭

星空にすぐ手が届く露天風呂
飄々と騒がれもせず愛妻家
かきかっこ付けて存在強くする
今度こそ昼寝しないと云ううさぎ
迷う事一杯あって人生だ

高槻市 富田 美義

ゆっくりの時間がニンゲン鈍らせる
台本にゃ書いて無かった認知症
病氣して医療の進化に目がくらむ
低血かストレスなのか立ち眩み
互角でも採用通知美人宛

高槻市 富田 保子

婆ちゃんにメル友増えて日々多忙
宿題も今じゃスマホが答えます
ハイチーズこれがまさかの遺影とは
痛い目にあって世間が少し見え
重なった行事安価な方に決め

高槻市 原 洋志

カルテまだ余白があつて一安心
充電をしたが転倒ばかりする
先読めぬ風に迷っている帽子
シャワー浴びゆっくり元に戻るオレ
吉本で包む笑いのアラカルト

高槻市 松岡 篤

電車降りスマホ済んだらイヤホンへ
くしゃみして落ちないですか付けまつげ
三猿で行ける余生が理想だが
各論に入ればエゴが沸沸と
自販機に僕の年齢チェックされ

高槻市 安田 忠子

雨上がり新緑映える露天風呂
疲れたら新緑眺めぼーっとする
しんどくても意欲湧き出る趣味の会
声掛けてきよんとされた人違い
意味分からず笑って済ます時がある

豊中市 池田 純子

文字追えば睡魔が後ろ追ってくる
アラームに待ったかけたい春の朝
一年生今日はスキップして帰る
お帰りと一番星が顔を出す
母の日に小さな手から花一輪

豊中市 上出 修

まだ急ぐ日本縮めるリニアカー
第六感老いた五感をカバーする
感謝の心喜怒哀楽を包み込む
青春を謳歌し過ぎてまだ独り
凄いや年俸でも黒字です大リーグ

豊中市 藤井 則彦

努力する前に努力の習慣化
めまいにも医者は加齢と素っ気ない
妖しげなボースに籠める片想い
いい加減にして暮らしが生むゆとり
うぐいすも寄り添う母の墓参り

豊中市 松尾 美智代

庭の草取り無心になっている私
山椒摘んで春を頂く木の芽和え
具をいっぱい入れてやさしいおから炊く
主婦の仕事手を加えれば限りなし
古稀すぎて楽な姿勢で暮らしてる

豊中市 水野 黒兎

三叉路の風にまかせる右左
官と民いつもどこかで不整脈
息抜きの上手な人の丸い声
希望退職惜しい人から辞めていく
朝露のひとしずくから初夏の風

富田林市 片岡 智恵子

散るさくら新緑へバトン託して
花生けて自分ひとりの香をたく
坂道が登れなくなり仰ぐ空
今はもう護身の杖に頼り切り
五月雨で在す露座仏美男です

富田林市 関 よしみ

赦すこと知った花びらひらひらり
竹籠の隙間に見えた夏の空
補聴器で天と地の声聞き分ける
よこしまな心を論す澄んだ空
見逃した闇に螢は朱に染める

富田林市 中井アキ

踏んできた砂の月日が今光る
ふっ切った胸に大きな真珠貝
ゆつたりと珈琲わたしだけの刻
どうしても認めたくない物忘れ
妻と云う免許昔は持っていた

富田林市 中村 恵

スイッチはさあこれからの腕捲り
砂塵巻き上げ昔が通り抜けてゆく
私がわたしを生きた時は今
血の通う言葉を生んだのは心
囁きに答えるあいまいな微笑

富田林市 肥山一文

細い首横に振れずにお世話役
子育てに時には鬼の心持つ
鍋囲み孫も陽気にはしゃいでる
孫が来てあふれかえった笑い声
わが思い思案ばかりですすまない

富田林市 山野寿之

取説に老眼鏡が大苦戦
文楽の喜怒哀楽は眉の所作
欲も無く策も無いので日向ぼこ
悪友の名で刎頸の温い友
シナリオは妻より先に僕が行く

寝屋川市 伊達郁夫

カードでは私の愛は売りません
やるだけはやつたと脱いだヘルメット
沸点の一步手前で深呼吸
蹶いた小石宝にして帰る
叶うならメザシ一匹酒二合

寝屋川市 富山ルイ子

白亜の城何時までも何時までも見る
友と逢う癌の手術をしたらしい
握手した手を何時までも離さない
駅員に聞けば何処でも行けそうだ
次は何時逢えるだろうか皆八十路

寝屋川市 平松かすみ

ご先祖に貰った命宝物
握手して何も伝言ないらしい
建て替えて馴染まぬ里の台所
バランスボール掃除の度に転がされ
ベアルック ライトアップへ手を繋ぎ

寝屋川市 森

茜

白髪をベリーショートに一輪車
ジーンズの穴すり抜ける青い風
上目遣いにごめんなさいをくちごもる
ベランダをすれすれ烏よこぎった
花びらはらり大笑いしたチューリップ

羽曳野市 安芸田 泰 子

空元氣見せて帰省の子を帰す
法話聞くうつらうつらと春の午後
幸せに溺れて少し呆け気味
狼藉の落花を責める術もなく
菜の花にぞっこんらしい紋白蝶

羽曳野市 宇都宮 ちづる

廃校の門扉閉ざされ桜咲く
長旅に蕾がワツと咲いて待つ
機内食済ませ映画を五本観る
リニアカーそこまで急ぐ用はない
前世では名人棋士の中学生

羽曳野市 徳 山 みつこ

くちなしの香にふと喉元が熱くなる
たんぼの綿毛にフツとのせる鬱
選挙があるので奨学金給付金
せせらぎが愚痴を流してくれました
豪雨よせめてブルーシートを除けて降れ

羽曳野市 中 川 ひろ介

春日朱殿ゆれる藤波釣灯籠
黄砂ふる歌に詠まれた鞘の浦
塩むすび野良の合間の缶ビール
名水豆腐いわれた途端うまみ増す
趣味多忙ふりまわされて生きている

羽曳野市 永 田 章 司

還暦はまだまだヤング長寿国
夕食に黙って食べた夫が居ず
レイアウト老妻に委せた台所
おもてなし構われ過ぎも窮屈だ
閻魔様懐の金チェックせず

羽曳野市 仲 谷 真

薫風師しのばれつつも天国へ
薫風を我が師匠と拝んでる
薫風に寄りそい歩く影二つ
風みどり庶民の声に泣きました
初節句五月人形よみがえり

羽曳野市 藤 原 大 子

クラスにも無視されているやえない日
精一杯した筈なのに悔いばかり
百均でも念入りにする品定め
ただいまと帰る家あり旅楽し
野党よりメディア恐れる自民党

羽曳野市 三 好 専 平

力むはど力がぬけてゆく齢
一事が万事ミサイルと核と
福寿草一鉢だけの幸に生き
なにもかも記憶のせいにしてしまい
困ったら有識者に放り投げ

羽曳野市 吉村 久仁雄

幅広に生きて衝撃やわらげる
長いものに巻かれた昔よく眠れ
開いては閉じて心が揺れる古稀
料理好きの妻ですほかは目をつむる
文句はあるがいつも年金心待ち

東大阪市 北村 賢子

まあいいか乙女それなり老いました
貴重品子の臍の緒と母子手帳
避難袋孫子の写真先ず入れる
娘来るメール頬紅うすくさす
例に違わず私の脳も日日おぼろ

東大阪市 佐々木 満作

ほろ苦いまたもりベンジ仕損じる
人気者天狗になると墓穴掘る
じわじわと寄る年波に逆らわず
好奇心まだ旺盛な古希半ば
謝罪文本心からは詫びてない

枚方市 海老池 洋

日本に生まれよかつた新玉露
新茶一服供える母のご命日
やたらに増えるペット病院整骨院
甘藍の芯のあたりにある本音
向日葵のいつも笑うと限らない

不用物捨て部屋の明るさ取りもどす

枚方市 小林 わこ

秘密基地今や女も持つている
これだけは譲れないわと妻の意地
乱れっぱなし何かあったか脳回路
痛いのはみんな同じと動じない

枚方市 丹後屋 肇

紫陽花が妻の命日告げにくる
老朽の耳を擽る童唄
青雲の大志窓辺で散り果てる
嘘八百威厳を保つクラス会
故郷に錦を飾る夢の夢

枚方市 寺川 弘一

数え歌十で終わらせてはならぬ
覗いたら幸せそうに見えるだけ
聞こえるよ平和の音だ笛太鼓
防犯カメラ見えて安心して歩く
幾つまで生きたらいいか教えてよ

枚方市 二宮 山久

里帰り想い出つまる古時計
定年後ワイドに生きる趣味多忙
何もかも飛び散らかっている昼寝
食べて寝てバランス保ち健康体
看護師にハートドキドキ脈上がる

枚方市 二宮 紫鳳

古い二人静かに過ぎた五連休

温もりの心を紡ぐボランテア

花冷えに友とおしゃべり元氣出る

春風にストレス流すツーリング

新緑に今日の一步をもう朝

枚方市 山口 弘委智

桜散り言いようもない春終る

竹林の陽のさざなみは葉を沁る

ポケットに夢と仕掛けをかくしもつ

一言が禍福の綾を紡ぎ出す

清濁をあわせ呑むにはまだ若い

藤井寺市 伊藤 アヤ子

色褪せた亡父の椅子がここにある

便利です背もたれ付きの押し車

借金の苦しみわたしだけでいい

庭園につつじの花があるお寺

頑張つて生きているには訳がある

藤井寺市 太田 扶美代

少し泣いてわたしらしさを取り戻す

花の好みガラリと変わり老いてきた

ライラック会いたかったと言うて咲く

大笑いした事はない自尊心

別れ訣れ別離乾かないハンカチ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

吹く風の音色も入れてこいのほり

ハンカチに包んで隠す負の部分

聞きもらした言葉は神の優しさか

真つ白に咲いてわたしを拒絶する

さみしいと思つた日から急な坂

藤井寺市 鈴木 いさお

メルヘンの花野ロマンが発芽する

早咲きの花はやつぱり早く散る

女子力も老人力も備えてる

知らないうちにフライングしたらしい

子に甘いまして孫には尚甘い

藤井寺市 高田 美代子

急に夏扇子サンダルサングラス

廃校の庭に寂しく金次郎

アランドロンも引退と言う齡告げる

るるぶするウフフ女神も遊び好き

川柳がともだち胆に残さない

藤井寺市 田付 絹枝

旅枕オーシャンビューを抱きしめる

海底で県境越えた日記帳

大海に憂さを流して明日に立つ

ロボットの上手い相槌大笑い

免許返納青春キップ如何です

藤井寺市 増井 ヨシ枝

花の手入れ朝一番の気をもらう
芍薬牡丹百合も咲いてる庭美人
元氣かと声かけ嬉し車椅子
花の名がだんだん減っていく恐さ
追伸に？マーク三ツある

藤井寺市 吉田 喜代子

耕した畑砂遊びする雀
鯉のぼり無いけど好きな柏餅
古い独り楽しい電話今日は晴れ
八十歳何故か忙し日々である
来客が有って家中綺麗です

藤井寺市 若松 雅枝

一人居で電話の相手放さない
生い茂る青葉が怖い一人の夜
言ってから後悔何度した事か
菖蒲湯や友は何時でも機転利く
歯が疼く又一本が抜かれそう

箕面市 大浦 初音

小心者思案ばかりが先にたち
自由を得ると責任がついてくる
やれば出来る言われつづけた子も三十路
気をつけて残りものには理由がある
親孝行三歳までにする子供

箕面市 酒井 紀華

跳び箱を一段上げて着地点
追憶の雨をふらせる昼の雨
雨上がりみどり生き生き深呼吸
逢う朝の雨はやさしいさくら色
平凡な日々に時だけ走りさる

箕面市 出口 セツ子

記念日を覚えたことの無い夫
惚け始めか不安頑固になる夫
誕生日に主人は別の酒の宴
薄味に慣れて外食からすぎる
美味しいと感じまだまだ元氣です

箕面市 広島 巴子

カーネーション子と話すよに水を遣る
爺婆もかかっています五月病
どっぷりと孫と菖蒲湯邪氣払う
茶番劇見せられ払う受信料
卯の花の匂い懐かし回り道

八尾市 内海 幸生

戸を開けて浴びる朝日が今日の糧
昔なら走って渡った黄信号
聞こえない耳でテレビの字幕読む
炊飯器目盛通りのできあがり
どの星に行くか想いが定まらぬ

八尾市 高杉千歩

美しい日本語メール長くなる
歳ですと自分戒め耐えている
句読点しつかり打って繋がらぬ
老いのリズム止まったり留まったり
価値観についていけない程に呆け

八尾市 寺川はじむ

北の国騒ぎで稼ぐ評論家
望まぬがちよつとは覗きたい地獄
悠ゆうと余生のはずの青テント
晩酌へ今日一日の灰汁溶かす
元旦の計未だ床の間に貼ったまま

八尾市 宮崎シマ子

日焼けした父一段と男らし
九十歳娘に負けぬ食べつぶり
海の子は海開き前から海に入る
初生りの茄子宝物の如く持ち
たまに來た男ばかりの孫曾孫

八尾市 村上ミツ子

花水木バスの窓から届きそう
連休終わるどこへも行かず誰も来ず
快進撃ヘトラの優勝期待する
ただ買ってきただけエンディングノート
手の内をあかし仲良くなりました

八尾市 山根妙子

吹流し鯉に負けじと深呼吸
フィナーレのラインダンスにどよめきが
ネットから遠い珍味がやつてくる
性能がもれた音までキヤツチする
アンケート迷い普通にレ点入れ

大阪府 桑田ゆきの

天神の撫で牛の背に露光る
断捨離に夫の物から袋詰め
木ノ芽摘むしばらく香り付き纏う
草笛に下校の列を離れおり
茄子トマト植えて慈雨を待っている

大阪府 米澤俣子

体力に勝てなくなった好奇心
ちまき解く思い出ほどここものの日
遅れ咲く花に喝采してやろう
孔雀の羽根裏から見ても美しい
五感を緩めスローライフを楽しまん

神戸市 上田和宏

毎日が午前の冴えと午後の呆け
バイク音これは郵便宅急便
バス電車耳を立てれば中国語
木漏れ日を日毎小さくして若葉
ままごとにビールがあつて客となる

神戸市 奥澤 洋次郎

入院は五月の青い空の下

腹を立て気まずい飯を食っている
まだ張れる意地があるかや影法師
登り坂後ろにベンツついている
話すことなにもいらない友座る

神戸市 富永 恭子

咲きはこる亡父が残した君子蘭
食べ切れぬ程の青菜が採れ自賛
子を増やしアイリス庭の主になる
数々の失敗もあり土肥える
棘の無いモッコウバラにある品位

神戸市 能勢 利子

方向音痴いつも早めに家を出る
亡夫植えたレモンにやつと花が咲く
家庭訪問玄関だけはピッカピカ
古稀なのに若いネと言われる句会
コンビニがあれば安心お年寄り

神戸市 松井 文香

童話からやんわり学ぶ処世術
はじめてのふり四度目の自慢聞く
リセットの命無駄には使えない
好きですと告げられぬまま不整脈
返信のメール待ちわび片思い

神戸市 山口 光久

平行線角度を変えてみませんか
新緑の庭で明日の絵を描く
生き残るための秘策の変化球
升目からはみ出す文字に子の未来
傘寿までどうにか辿り着けそうだ

神戸市 山口 美穂

言い訳はききませんよと万歩計
杖さん杖さん今日もありがとありがとう
木洩れ日の中は素的な万華鏡
仏壇のマッチを買いに百均へ
鉛筆の友七十年の肥後守

神戸市 山崎 武彦

転んだら起きられますか喜寿の坂
五十年決め手となったのは笑顔
臥す母をガラス細工のように抱く
一生の大方見えてきた傘寿
束にした診察券のある至福

明石市 糀谷 和郎

12色だけでは描けぬ風の色
美食家も最後は水で締めくくる
身の丈が分からぬうちは無我夢中
這うように探す明日へつなぐ道
遊ぶ子の頭等しく風は撫で

芦屋市 黒田 能子

若い二人さらさらと砂時計
大胆なスタート自信あるらしい
せつかくの料理せかせか食べないで
新しい言葉の森に迷いこむ
おいしい天間こえてますか民の声

芦屋市 竹山 千賀子

掌のスピーチ汗で消えていた
五七五添えたスピーチ格を上げ
立ち読みでいつも手にする健康誌
横向いて咲いてる花に声かける
森林浴五感すっぱりみどり色

尼崎市 市坪 武臣

終電に今日の疲れを置いて来る
好きなこといくらやっても疲れな
健診で疲れた喉に生ビール
春が来た目にも鼻にも義理堅く
悲しいこと月とだつたら話せそう

尼崎市 加川 靖鬼

梅さくらボタン自然の四季愛でる
目を瞑り山の風聴く檜風呂
石庭の渦に巻き込まれた坐禅
分水嶺選ぶ私の未来地図
腹はくくったけど許せないところ

尼崎市 長浜 美籠

待ち兼ねた春浅漬けの舌ざわり
いい目覚めまず手始めにスクワット
懐かしい電話に声も若返る
探しもの増えて一日多忙なり
メールではこころ淋しいお礼状

尼崎市 藤井 宏造

花粉症と縁はなさそう象の鼻
マイナンバー仕舞ったまんまそのまんま
立ち飲み屋女性客増え楽しいな
クラス会しあわせそうな顔で行く
再稼働町は再び活気づく

尼崎市 山田 耕治

今日あたり竹の子御飯きつと来る
後ろ前着た母さんと泣き笑い
四万人みんな見ている球ひとつ
ゴールデンウィークにじいちゃんが洩れている
白いままで紙は捨てたりできません

加西市 金川 宣子

うれしいな母は私のビタミン剤
娘の家に行くだけなのに眠れない
父の日は来月ですよ念押され
夫の愚痴聞いてもらえるイヌ欲しい
母の日のフラワーギフト花盛り

川西市 大坪 一 徳

子供の日静まり返る老いた街
非正規とパートじゃ子供作れない
戦争は懲り懲り世代あと僅か
平成元禄列車に檜風呂がある
地球号その船室にある格差

川西市 山口 不 動

寝ころんで落花を浴びるこの命
新芽出て人も桜も消えにけり
公園の子等の声消え雨となる
叫んでるダイナミックな山の色
連休は気配を消して籠もります

篠山市 酒 井 健 二

会長と呼ばれ地元に縛られる
ようやと世間と溝の深さ知る
コップ酒ラベルをはがし昼の駅
身に及ぶ戦仕度にうろたえる
戦争を知らぬ世代で済むやろか

篠山市 北 澤 稔 民

飲んでから今日の休肝気がついて
上みたらあかん目線を下げて生き
苦勞した過去は話さぬ庭の花
お互いがプライドだけで生きている
凡人の凡たるゆえん酒に酔う

三田市 足 立 つ な 子

花開く切ないころ開かない
曲がるたび一皮むけて垢ぬける
居乍らにバソコン開き世がみえる
事故多発旗日をさけて行楽地
お誘いにプラス思考は疲れ果て

三田市 石 原 歳 子

時季なのに燕が来ない餌もない
老人という言葉にも慣れてきた
花の水かえて長持ちさせている
老人の体操をしに会議室
体操でみんなの顔が若返る

三田市 上 垣 キ ヨ ミ

菖蒲湯の香りに老いの邪氣払う
でで虫のリズムのんびり生きている
子育ての手間は孫らの背に光る
幸せに気付く三度の美味い飯
志望校クリアの孫を仰ぎ見る

三田市 上 田 ひ と み

雨やどりさせて下さい君の側
もしも母さんですか会いたいです
なにもかもほんやりのまま終わりたい
しっかりと洗いましたよ恋の傷
花を愛であなたを愛しそれだけで

三田市 尾崎 一子

兄弟会親の齡越え親に似る

手を重ね兄弟姉妹また会おう

入院で嫁が娘になる絆

連休の予定キャンセル親に添う

病むたびに子供になつていく気配

三田市 北野 哲男

何曜日生まれか母は覚えてた

気付かれぬ様に独りの誕生日

風船も私も実は人嫌い

なる様になるよと雑木山の花

柏餅何故か眼鏡を外し食う

三田市 多田 雅尚

初孫と聞いてミシンが再稼働

家の風呂スイッチONでよく喋る

新緑に浸る間も無くもう夏日

お見舞を終えて普段の顔となる

歴史から学んだ知恵が生かされず

三田市 谷口 修平

そうなんだぎっくり腰の無い宇宙

密室で百万円が宙に浮く

体調もリズムも狂う休肝日

手間かけた地図でますます分からない

胎内で母の鼓動と合うリズム

三田市 野口 晶子

反抗期扉を少し開けて母

未来図をひらけば扉また扉

鍵かけぬ扉の向こうに母が待つ

体制が定まるまでは眠るふり

後はもう神頼みしかない私

三田市 福田 好文

三面鏡どこから見ても若くない

野菜高借農園が活気付く

老人会親子揃ってご出席

筆筒預金してから寝てるタンス前

時を皆スマホが食べて忙しい

三田市 堀 正和

予報士にお出掛けの日を決められる

金丸座ちゃんと組み込む遍路旅

株上がる今日は本物ビール呑む

僕と孫揃ってスマホ一年生

砂被り今日も着物の美女がいる

三田市 村田 博

帰ってこいと手招きをする本籍地

坊ちゃん列車煙モクモクいい湯だな

道草で前に進まぬ好奇心

あとひとつ隠し扉にある内緒

柏餅買えば家にも柏餅

高砂市 松尾柳右子

買い物に頭を使う八十路過ぎ
週二回デイサービスを楽しみに
着替える手助けうけて感謝する
俳句会月一回の脳活性
三食にこだわりはない健康に

宝塚市 田中章子

起き抜けに何を食べてもおいしくて
体を鍛えて心を鍛えよう
初物を食べて長生き目指します
夫よりちよと長生きにと絵馬に
休耕田撮さぬように千枚田

西宮市 秋元てる

個々の木の思いで八甲田山萌える
段差など楽しんでたとお婆言
どっこいしょ声はでかいがスローモ
大人だなー嘘っぽい話聞いて
褒めそやす後ろめたさか眼が泳ぐ

西宮市 緒方美津子

望郷や母の絵手紙まつり寿司
おやじの咳払い効き目うすくなり
バスツアー夫婦で行くと妻静か
化粧まわしをラオウ自らに喝
コンビニのあって嬉しい夜盗虫

西宮市 亀岡哲子

一過性不整脈です恋ごころ
チチンブイに勝る呪文のあり内緒
出不精になってつくづく坂の町
ボンと背を押され嫁いだ若かった
焦らずに怒らず空気抜けていく

西宮市 福島弘子

被災者にそつと寄り添う黄水仙
もう六年もがきながらも五七五
熱帯魚ヘシユノーケリング夢心地
流された瓦礫にも早や魚群れ
風と行くタンポポ後ろ振り向かぬ

西脇市 七反田順子

優しさは老老介護共白髪
みっちり汗かいた日は心地よい
懐かしい人と出合った待合室
長話犬も付き合う散歩道
逆立ちでトントン歩く孫がいる

姫路市 古川奮水

入院で治療かカレーライス食う
つまずいて転んだ石に責は無い
雑踏にトイレをさがす一人旅
車座の花見へ犬も座を決める
腓返り気儘報いか神に問う

南あわじ市 萩原狸月

やれば出来るコーチわたしを買い被り

出張の夜のぶらりは内緒です

車窓から見えた伽藍へ途中下車

実現がしたらいいねへ票を入れ

師の域へ修業の道はまだ遠い

奈良市 阿部紀子

朝顔が三色巻いて良い日除け

孫の挙式羽織袴を着たい爺

ルオー作キリストの目に慈悲を見る

天神さん奉納花火伝統美

天井にのたうつ龍に怖気立つ

奈良市 大久保眞澄

牛から亀今やカタツムリの歩み

すいている病院複雑な気持ち

無謀運転十八歳か八十か

回転寿司乾いたネタがまた通過

昨日今日のウグイスよりもなお音痴

奈良市 加門萌子

しかしです人間世界荒れている

内には内の外は一触即発か

寄せ植えもおとなしいのは枯れていく

新聞も意見が違ふこんなにも

マスコミに騙されまいぞ学ばねば

奈良市 辻内げんえい

しぶしぶに受けた役だが生き甲斐に

トップより次席が性に合っている

慣れ過ぎて雑になつてゐる我に喝

妻と僕傍から見れば喜劇かな

同窓会ひさびさの友古稀の顔

奈良市 山本昌代

にこにこ夢を語っているジュニア

老犬へ優しい声をかけている

颯爽と座敷ほうきで掃いてます

時どきに鬼にならるお母ちゃん

どっこいしょ気合い入れなきや立てません

奈良市 米田恭昌

苦労人のトップに立った低い腰

終戦を待たずに逝つた母だった

趣味多彩妻の傘寿の記念展(第二回個展)

十石舟で巡る伏見の酒処(高津会で伏見へ二句)

寺田屋に来れば維新の風に逢う

生駒市 飛永ふりこ

あほやねんどジもするけどわたし好き

もたもたが晴れぬ背中におーホケキョ

今朝の野菜ジュースでさあ闊歩

うかつさをここぞとばかり突いてくる

寝言でも父に言つてゐる助けてと

香芝市 大内朝子

新しい老いによつたり出会う日日
ありがとうをいっぱい積んでいい余生
もう一度戻りたかつた分岐点
世の移り義理人情は捨てがたし
介護保険ずつと掛け捨て御蔭様

榎原市 居谷真理子

北の国春感嘆符感嘆符
自転車の子リンと蝶にご挨拶
木洩れ日の真新しさもまた五月
さて立夏空気のトゲにご用心
両横に亡父母川の字に眠る

桜井市 安土理恵

浅学非才恥だと思ふ暇がない
逆風へもう向かうしかない覚悟
試すのが怖いんごの丸鬻り
想い出ひとつ山吹きどつと咲く頃の
八十路の恋あじさいの葉のしづくほど

奈良県 安福和夫

アバウトを信条にして生きてみる
歳のこと会話に入れぬ試みを
フィナーレを今は白寿と決めている
戦争を中途半端に知るわが身
草花のフェアを気持が荒む地で

奈良県 谷川 憲

風に乗り海渡る蝶驚異のみ
町老いて介護の車鉢合わせ
しがらみを断捨離ノートに加える
アルバムの剥がされた跡ドラマ告げ
なり手なく町の世話役籤で決め

奈良県 中原比呂志

故郷の面影は無しタワー建つ
一億のスローガンには暗い過去
ぬるま湯の底からぼつぼつ値上げ泡
前後左右目利きが落ちたマンホール
黒く塗る文字はどこにも無い日誌

奈良県 渡辺富子

春日の藤くぐる二人へ鹿が寄る
散る定め知って人間今を咲く
越えてきた修羅をふんわり卵とし
価値観が似てきてあくび移し合う
美しいまま初恋が胸にすむ

和歌山市 磯部義雄

失業のパパはいそいそ家事育児
生き生きと五七五を詠む傘寿
蜘蛛の巣にかかり不運を嘆く蝶
風の吹くままに我が道運任せ
鍵などはかけぬやっぱり過疎がよい

和歌山市 上田 紀子

和歌山市 坂部 紀久子

イメージの通りに咲かぬ花のエゴ
耳塞ぎ小言を聴いている余裕

要領は多少悪いが強い芯

角も取れ弱さそろそろ見せておく

結論に躓き酸素薄くなる

和歌山市 柏原 夕胡

軌道修正あなたとはぐれないように

むずかしい事は嫌いでひらがなで

筍を食べられぬまま初夏になる

マドンナも還暦祝いしたらしい

真つすくな心に持っている誇り

和歌山市 喜田 准一

歌声が朝から弾む通学路

生き様に確とけじめのあるお方

憲法が分からなくとも明日のめし

町工場消えて煙突淋しがり

ここからが勝負どころの宮仕え

和歌山市 楠見 章子

風向きはどちらでもいいマイペース

色褪せた記憶と遊ぶてまり歌

ラストチャンス先ずは帽子を変えてみる

目の端に病院がある現在地

原発は要らぬソーラー性に合い

三億円事件思い出させるニュースみる
ミサイルが飛んできそうな青い空
高血圧になる程ご馳走食べてない
タクシー代節約疲れ満足度
誇らしく飾る子からの花の束

和歌山市 武本 碧

サシスセソ目分量です母ゆずり

よかったら君の器になりましよう

人気者なんだな笑顔弾けてる

葉桜になったのんびり木も人も

友情が少し深まる共犯者

和歌山市 玉置 当代

卓袱台へ見事に春をてんこ盛り

あの孫がこんな大きな靴を履く

地下足袋より他は知らない父の足

若葉萌える奈良の都を娘と歩く

古を偲ぶ大極殿の庭

和歌山市 土屋 起世子

夕やけに輝く疲れ知らぬ子等

還暦の子から届いたカーネーション

泣かないと決めたが泣いた嬉しい日

力抜くコツを覚えて独り住む

終焉に咲かせる種を蒔いている

和歌山市 福井 菜摘

心地よい酔いにある里走馬灯
割り勘で飲むさやかな酔い心地
まだまだと明日に夢追う丸い背な
晩学に目覚めて夢がジャンプする
自我ひとつたむと読める風の彩

和歌山市 古久保 和子

若者の側で聞き耳立てている
あちこちのネジが弛んできたらしい
地下足袋を父は尺貫法で買う
哲学がある手回しのエンピツ削り
アンダーラインここが私の始発駅

和歌山市 堀 富美子

まだ脈があるのか忙し傘寿坂
郷愁を呼ぶ神社の大銀杏
見送った介護の日日が生きている
緩めると元のトーンへ戻れない
素のままの笑顔私の取得かも

和歌山市 松尾 和香

ガン知った現実逃避愚か者
前を向く個々の命にある寿命
友からのエール頑張るファイト湧く
人見知り泣いた一歳ジツと見る
間平さん古座川巡る旅のギャグ

和歌山市 松原 寿子

ありがとうを言い切れぬまま空回り
鈍感力あってもいいと生き延びる
反論する相手もなく独り居る
油断など出来ぬ人生なかば過ぎ
雑草の根性ほしい気の弱さ

岩出市 藤原 ほか

父母の国生まれてくれてありがとう
イヤリング ブラブラ揺らし風に乗る
欠伸して今日の私を解き放つ
あのねのね自分の想い書き留める
あのねのね そつとつぶやき炙り出す

海南市 小谷 小雪

まだまだね元氣出しなと山の夏
ふがいなく少しは吠えてみたくなる
主婦十年免許皆伝には遠し
葉桜の下哲学を語る酒
かたわらのペン一本が出す答

海南市 堂上 泰女

定年後もやっぱりかかる五月病
初夏の空へ燕が生んでいくリズム
野は緑一足漬すスニーカー
兄野辺に送れば鶯が見舞う
故郷に父母の匂いの八重桜

紀の川市 宇野幹子

里は過疎ほこらを飾る花も無い

頑張れと右脳左脳に水をやる

さわやかなエールを贈るボランティア

外人と仲良くなれた仁王像

頂点の椅子で大事な荷を落とす

紀の川市 北山絹子

汗かいて一リットルの水を飲む

愛犬と絆結んでいる平和

釘付けにされた女のサスペンス

草に寝て故郷の空を夢にみる

長老の昔話に花が咲く

紀の川市 楠原富香

修正液の中でごたごた未だ揉める

残り火を抱いて別れを告げました

産声に待合室が揺れている

ふる里の水はすんなり喉通る

アイディアが浮かんでこない曲り角

紀の川市 山東日出男

息つぎの秘訣を亀に聞いてみる

立ち居にもよいしょこらしよの声を借り

当面は5割ラインをキープする

道徳を熱く語った不道徳

運転手みな前を向くハイウエイ

紀の川市 辻内次根

蹟いたあるかないかという段差

貧しさは大きい方に手が伸びる

こんな日もあると呼吸を整える

懐かしさ胸は高鳴るものと知る

老いていく 天気予報は正確に

橋本市 石田隆彦

最近ではひらがな書きが性に合う

野良犬よ私も首輪とれました

簡単に自分を許すから弱い

被災地に希望湧かせる設計図

巣立ちの日無口な父が涙ぐむ

鳥取市 池澤大鯨

義歯ながらかつての癖で噛み砕き

歯磨きに三分かけるこれキツイ

よく噛んで三十回とはまどろくさ

少々の魚の小骨噛んで吞み

虫歯などできる飽食縁がない

鳥取市 奥田由美

マドンナも我らと同じ歳重ね

ここだけの話の尾ヒレ風にのる

ミサイルの恐怖が近い日本海

食卓の匂いに染まるワンルーム

二十軒の村に三匹コイノボリ

鳥取市 加藤 茶 人

鼻歌が無気味な不発弾抱え
七難を隠す化粧の塗り心地
良い歳の取り方似合う皺 白髪
なかなかの強者 脂肪 酒煙草
真実を寄つてたかつて嘘にする

鳥取市 倉 益 一 瑤

開けゴマ私のドアはすぐ開く
四コマ目どんでん返しあるゲーム
わたくしの都合でマスク外せない
携帯はオフふわりふわりと浮く海月
ちちははから呼び出しかかる星月夜

鳥取市 坂 本 とも湖

増税へ日本中の息づかい
厚化粧しても余罪は隠せない
壁ドンにいま鳥肌が立ってます
入試合格口笛までが春に溶け
恋かしら悶えています春の蝶

鳥取市 田 中 天 翔

額縁のない美術館ジオパーク
砂像みてアメリカ旅行した気分
まあいいか時々言つて楽に生き
補佐が好きなんて言いつつ旗をふる
月一回浄心会で消す濁り

鳥取市 棚 田 大

オツケイの返事はいいが従わず
眠らずにマラソン終わるまで見てね
美の国を目ざしていくも汚れてく
わめく子に喘ぐふりしておさまらず
世のいじめバイキンマンも怒り出す

鳥取市 谷 口 回 春 子

来る春を今か今かと孫の靴
聴いた振りしてますいつも蚊帳の外
若武者がここにも居ると幟旗
無駄のない動きでわかるプロの技
口車うっかり乗って大火傷

鳥取市 永 原 昌 鼓

山陰に新幹線は夢の夢
血糖値怖くて出来ぬ盗み食い
重たいと耳が泣いてるイヤリング
喘ぎつつ今日も昇るよ八十路坂
シャッター街錆びた自転車ギシギシと

鳥取市 中 村 金 祥

アレンジが過ぎた人間嫌われる
新緑が映えて散歩が長くなり
花見済み次は花火を待つばあ婆
天然の博物館を壊す愚挙
晩餐のショーカミサイル打つてみせ

鳥取市 福西 茶子

見栄張った自分が許せないでいる

ダイヤ婚見えてるようで遠い

父母は短命姉妹みな長寿

蛇の皮入れて年中空財布

二重跳び昔できたと言っておく

鳥取市 前田 楓花

バーゲンにどれ程お金使ったか

心には夕陽の沈む海をもつ

付度じゃなく私には神の声

ソヨソヨと若葉の歌を聴いている

楽そうに見える他人の暮らしぶり

鳥取市 山下 凱柳

亡母偲ぶ川柳詠んで涙ぐむ

今日のこと思いだしたが直ぐ忘れ

認知テスト毎日受ける老いの坂

予定外早くも来たか認知症

なあ妻よ同じ目線で話そうよ

鳥取市 吉田 弘子

渋滞が途切れて緑多くなる

渋滞を遅刻のせいにする卑怯

慣れるまで夫の世話はハブニング

言葉では言えぬ態度でハツ当たり

ウォーキング句題のヒント落ちていた

倉吉市 猪川 由美子

北朝鮮悪さするに余念が無い

不都合は切って延命安倍総理

過去の栄光や誇りを胸に生きている

忘れた方が幸せな時あるわよな

安倍強し郷土の石破ガンバレよ

倉吉市 牧野 芳光

雑草と呼ぶな名前はついている

臆病な花がなかなか芽を出さぬ

タンポポを残していった草刈り機

登記簿を汚し続ける別荘地

夢でしたずっと温めておりました

倉吉市 山中 康子

退院へ窓の景色も笑いこけ

病棟の団結あたま下がります

あの頃は強かった老々介護

川柳の凄さ病もぶつ倒す

久し振りひ孫歩いてにっこりと

米子市 後藤 宏之

挑戦をするいつまでも若いです

偽物は偽物のまま無理しない

花見客寒いといって例のどこ

代返も代筆もするまかせとけ

出来不出来字の善し悪しは筆まかせ

米子市 後藤 美恵子

クラス会お澄ましポーズ一 二分
残り火を消えないうちに吹いておく
厭なこと消して記憶に余白でき
ざらざらの心良書になめされる
住みやすい街に生受け骨埋める

米子市 竹村 紀の治

自己弁護ぎつしり詰めて日記帳
譲られてお爺さんの顔をする
神さまの言われるとおり二日酔い
見たものと出逢った人が財もの
痛いところ無ければ無いで心配だ

米子市 中原 章子

寝付かれず思い巡らす世の変化
名曲は古びないのに身は古び
失言と詫び閣僚の気のゆるみ
よそゆきの声に金属音交じる
守りから攻めに転じて運びかけ

米子市 成田 雨奇

朝鮮語だいぶ聞いたがまだ出きぬ
妻病気今日は静かな朝だなあ
香典を預かる役目新班長
留守だった足の運動にはなった
目を覚ますばくの日課の第一だ

米子市 吉田 陽子

五月晴れ私の鈴もリズムカル
ブナ林のきらきらあれは水の精
パン生地が膨らむ連休の初日
矢車草のピンクへそつとおかあさん
母百句無理はするなと亡母の声

鳥取県 石谷 美恵子

しばらくは胸へ抱きたいいい内緒
明日があるあしたもきつと言うだろう
奥の手も出さずじまいの負け戦
へんてこな体操をして老妻元氣
美しく魚を食べる浜のひと

鳥取県 斉尾 くにこ

エプロンのやる気お陽さま加勢する
無防備のいい人達という時間
戸惑いの時間たばんという時間
投げつけたボール投げ返してきてよ
星空の布団で眠るキャンプ場

鳥取県 竹信 照彦

息子から古稀に貰った腕時計
声が出ぬ喉の修理はアメ舐めて
歩いたら足の修理になつて
修理済み脳梗塞も軽かった
老化度を修理で持たせ使つて

鳥取県 西谷悦子

向かい風追い風抜けて生きて来た
物忘れ神がわたしに試練させ
あちこちのネジ順番に外れだす
仏壇へ願えばかりの掌を合わす
何年も着ないスーツがこれからも

鳥取県 細田裕花

長丁場ゲーム見ながら家事もする
友だちの言葉程良い塩こしょう
聞き役に徹する友の介護論
乗り越えて一ミリ太くなりました
幸せの扉は呪文あるのです

鳥取県 松川行男

春でした貴方が側に居る限り
歯がきれい最後に決めた妻ぢやもの
連れ出され脳の検査に嫁と行く
やれ乗るな免許返納尻叩く
寂しいな どこにも行けぬ八十路かな

鳥取県 山下節子

内緒だと言うからしゃべりたくなるの
内緒には出来ぬあまりのうれしさで
折紙の勲章孫から贈られる
何気なく吐いた冗談会が採め
褒め言葉過ぎると腹の立つことも

松江市 石橋芳山

乾杯のたびに味方が増えてくる
手首まで濡れてる罪を重ねてる
自販機の取り出し口に青い海
針の穴通る糸こんにやくになる
スエズ運河やつぱり傷は治らない

松江市 小川注湖

なんとなく空気流れて会終る
背を鏡見て育った子後を継ぐ
都会の波地方創生流れない
波立たぬようにしている隠居部屋
ハイヒールタンクトップに妻の夏

松江市 川本 畔

生きのびた五月の爪の長さかな
気にかかる言葉ゆつくり囁んでいる
衣ひとえ言葉の底を見せぬ蝶
懷に悔やみの言葉選っている
遍歴の果ての硝子がすき透る

松江市 藤井寿代

オーガンジーで包む五月の私
これからが正念場よの草いきれ
カーナビまでも指図するエトセトラ
絶好調踏んでいたのは導火線
真央ちゃんがいなくて気の抜けたサイダー

出雲市 伊藤 玲子

頼られてつなぐこの手が離せない
恵まれて今朝もいたたく蜆汁

二三才若さもらったジャズの宵

雑踏の懐かしい声逃さない

美術館いのちのお洒落して帰る

出雲市 岸 桂子

一灯になればと貯める五円玉

散水の蛇口小さな虹を産む

筋書きのない一日が始動する

朝夕の献茶仏の目と語る

今は只夫に感謝の数珠を繰る

出雲市 小白金 房子

天地の恵み野辺一面に光満つ

俺お前呑んだ同期の花が逝く

突然の雷鳴畳む花見莫塵

いい事もあつて此の世に生かされる

借景を望む病窓風みどり

雲南市 菅 田 かつ子

キッチンの日日確信の割烹着

エプロンのままでお出でとくる電話

アルバムの友を見付けた虫眼鏡

シヨルダーバッグ提げて気になる背な姿

生き生きと夫婦げんかも若さなり

雲南市 松本 昌

捨て台詞悲しき人に雨が降る
しあわせな音が響いて朝となる

自民党おごるな不倫と失言と

力の差領土は帰らぬ七十年

虫干しに時代の流れ人を恋う

島根県 伊藤 寿美

銀河から亡夫の梯子がまだ下りぬ

倅より年金杖にする老後

長生きもほどほどがいい八十五歳

少しづつ昔を拾う頭陀袋

古日記捲るあの日の君が居る

岡山市 工藤 千代子

薄い履歴母として妻として

亡父の謎が未だに解けません

カラオケは苦手鼻歌なら得意

気をはっていいないと背中すぐ曲がる

七十歳ゆつくり散っていくつもり

岡山市 永見 心咲

ほどほどの通気性なら持つワタシ

告白をしてから遠い岸になる

分別のある愛なんて絵空事

履き潰すつもり夫婦で対の靴

チューリップ一茎一花だけの粹

岡山市 藤 成 操 江

安心がほしくて多い方に付く
どこよりも厨の椅子が心地よい
まね芸の本人知らぬまま笑う
おしゃれだな案山子が衣裳替えている
推考をするたび重くなる言葉

岡山市 前 田 恵美子

主婦歴は長いが初心忘れない
心配は氏神様に預けてる
心配は多忙の中に消えてゆく
猫たちは網戸を開ける名人だ
猫のギンあんたは男らしかった

笠岡市 藤 井 智 史

いらっしやい開けっ放しの嫁の枠
イッヒリーベディッヒじゃ堅い好きと言う
備蓄食あ平和です期限切れ
大人買い止めて少年取り戻す
目覚ましの効いたわたくしの披露

岡山市 池 田 たか子

同窓会逢いたいこわい二十年
庭の花見廻りうまい朝御飯
褒められて花もきれいに咲くらしい
猪に墓の移転を急かされる
行楽の予定が墓の展示会

岡山市 田 中 恵

割烹着のパワーで今日も乗り越える
適当に塩ふりかける一夜漬
五七五習わぬ経を読んでみる
茄子の馬未来を駆ける夢がある
雷鳥を追えば余韻の霧が降る

岡山市 山 縣 のぶ子

助手席のほどよい睨み効いていた
ニンマリの遺影そろそろ跳べと言う
珍しく花柄着れば蝶になる
年中が休日なんだ尻叩く
苦も楽も歌って心遊ばせる

広島市 岸 本 清

貴方しか出来ぬと言われ担がれる
今日の傷癒やす源泉掛流し
躓いて足下見ても何もない
都合よく使い分けする記憶なし
北鮮に不安拭えぬ被爆国

竹原市 石 原 淑 子

頑張ったおたがいの手を包み合う
母の日に母の法事をする知らせ
いたわりの中で肩肘はついている
高齢者講習受ける誕生日
ここそこの監視カメラのプライバシー

第161回 大阪川柳の会

日時 8月2日(水) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「浴びる」佐野 博美 △「空 気」雄水 祥昭
△「変人」藤村 亜成 △「スタイル」森中恵美子
会費 1000円 欠席投句 8月1日まで 会員に限る
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦宛

凡人は暴れ太鼓にあこがれる
道連れに自由に生きる友がいい
平等にこだわりすぎて芽が伸びぬ
店先にゆっくりしてと椅子がある
前例にしばり付けられ動けない

防府市 坂本加代

歩けるという仕合せを考えず
年輪と思えば皺も勲章だ
あちこちが痛い生きてる証かも
ヤジロベーも金に傾き再稼動
受付の態度約変さす名刺

宇部市 平田実男

鯉のぼり一生懸命泳ぐなり
待っただけの妻で五十で白髪です
体重が増えぬ他人事ながら
朝食をゆっくり夫はゴルフ場
この足をこの手を薬あきらめず

竹原市 岩本笑子

第35回 夜市川柳大会

と き 平成29年7月31日(月)
開 場 12時 出句締切 1時
セレモニー 1時30分
(表彰・記念写真など)

披 講 2時～4時
句会終了 4時(予定)

ところ 堺市総合福祉会館5F 大研修室

会 費 2000円(お茶・記念品)

昼食はお済ませの上お越しください

事前投句「笑」 堺 河内 天笑 選
締め切り 7月25日 ハガキに2句

堺市西区堀上緑町2-16-3 河内 天笑 宛

課題と選者(各題2句) 欠席投句拝辞

「歌」 静岡 米山明日歌 選
「のぞみ」 吹田 山本希久子 選
「ピンチ」 海南 三宅 保州 選
「長」 河内長野 山岡富美子 選
「新」 鳥取 新家 完司 選
「和」 和歌山 古久保和子 選

今回は最後の夜市川柳大会となりますので、是非皆さまお誘いあわせの上多数ご出席を頂きますようお願い申し上げます。

富田林市民文化祭

富柳会第67回川柳大会

と き 9月16日(土) 正午開場
(昼食は済ませてお越し下さい)

ところ 富田林すばるホール

(電話 0721-25-0222)

(近鉄長野線 川西駅下車 徒歩8分)

課題と選者 各題2句 席題なし

「まじない」 古久保和子 選
「線」 松本 柊子 選
「文 句」 大堀 正明 選
「息」 村上 氷筆 選
「そして」 土田 欣之 選
「夜明け」 池 森子 選

出句締切 午後1時

会 費 1500円(お茶・発表誌呈)

お問合せ 池 森子(電話 0721-25-0603)

主 催 富柳会・富田林市 他

自選集

小島蘭幸

走らねばならぬバトンをいただいた
そうですかでんぐり返りひとつする
ある決意スカイツリーを見上げて
誰も私を知らない東京を歩く
ひとりいる雨の東京雨のカフェ

斉藤 焔

かすみ草ゆつくり咲いていてごらん
いつ来ても苺の香りする村だ
桃缶が好きだったなあ一周忌
少年に分けてもらった穂木を接ぐ
梢みな未来指してるりんご樹だ

新家完司

休日ばだらだとすると決めている
前世でも酒に溺れていたような
ヒビ割れた壺だが酒はまだ入る
脳味噌がぐじぐじになる昼の酒
ぼろぼろとこぼしてどうもすみません

津守柳伸

花筏いまごろ義弟どのあたり
義理欠いて欠いて元氣な自己欺瞞
好事魔を避ける五感を研ぎすます
両手首縛る点滴誓約書
手入れせぬ花満開を知る至福

都倉求芽

今夜見る夢の序文におぼろ月
はつきりと言う医師が言う歳だから
怖いことばかり薬の説明書
毎月の血液検査が見張りする
五七の下五をくれた窓の風

土橋 螢

生涯学習川柳と書を習う
仏から預かっている妻ひとり
花より団子愉快ではないか
この世の地獄浮かんだり沈んだり
たっぷりと墨つけて書く芸もある

西出楓楽

陛下の背丸く平成あと僅か
老いるとはこんなことかと思う日々
首縦に振って苦勞を背負い込む
四季島に乗る積み立てをはじめよう
後期まだ朦朧体で居られない

仁部四郎

村上玄也

七月や今年もすでに折り返し
七月は文月織女へ文を書き
七月は指折つて待つ梅雨のあけ
七月やそれ夏休みと待った頃
七月やうな重梅が身の丈だ

前 たもつ

八木千代

自分では自分の罪は消せません
今日もまた小さな夢を追って生き
虎快調サブリメントを飲み忘れ
昭和も遠く八十八夜茶摘み歌
地球の軸神傾けて四季巡る

三宅保州

山本希久子

遊びにも最初はグーというけじめ
近道に頼る心が負けている
聴く耳を持たない耳がよく喋る
禁猟区と読めるのですか鳥群れる
濁点もあつて人間臭い父

宮西弥生

両川洋々

やり直すきっかけにする若葉風
河内野の空洗濯が好きらしい
よい夫婦悪い夫婦もよく続く
押入れの奥で虫たち肥り出す
夢探す日傘てくてく日焼けする

偏見が視界を狭くしてしまふ
世界中蔓延りだした不寛容
声高が世間をまかり通つてゐる
フェイクニュースSNSが撒き散らす
右傾化の波が世界を駆け巡る
いつものとおり
たいした事でないけどパンの焼け具合
茄子浅く漬けて至福の夏ごはん
ちよつと気取つてアールグレイのティータイム
灯としても木の食卓を拭きながら
足りてはいる 今のことだけ思うなら
残り火やもうぐずぐずはしておれぬ
姿勢正して天命を待つ八十路
羨とは別に電気の消し忘れ
踏まれる位置にも雑草花をつけ
まず花に水やってから朝ごはん
首を吊る勇気があればする再起
愛想尽かすと僕の影武者まで叛く
都庁にもボスと言う名の鬼が住む
年金の範囲で恋も晩酌も
北を向けてゆうべも妻が不貞腐れ



いつも笑っている訳でない始発
大漁旗見てみぬ振りをするメダカ
カマキリよ一度めしでも食べようか
佛さまと今朝は芋粥食べました
真夏日の怒り西瓜が冷えている

板尾岳人

蹠いたところから伸びてきた新芽
昨日のことはきのうで終る舞台裏
レシートに個人情報でんこ盛り
人間らしくたまには歩く獣道
願に咀嚼できないままの春

川上大輪

来し方を映して揺れる水鏡
春の雲口バのパン屋を追ってゆく
紙芝居のおじさん何処へ消えたのか
秋までに五臓六腑を洗わねば
晩年の水平線が視えてきた

木本朱夏

丸く住むのには男に在る我慢
火の息は見せず隣とお付き合い
順番を待つ露天風呂寒かった
戦争の話へ孫の眼が光り
山陰の新幹線へ夢を持つ

小西雄々

森の句集



いさり火

小林 由多香^{ゆたか}

一歩先行かせて射程距離におく
盛大な拍手 嫉妬の音がある
共稼ぎ夫婦のレール錆びさせぬ
過去捨ててのひとりの旅は雨がいい
いさり火を抱いて砂丘の夜が深む
緊張感ほぐすジョークが出てこない
立たされた記憶廊下は寒かった
表彰へ妻控えめな位置に居る
山陰の旅の鞆に傘を入れ
虫が来て鳴く雑草を刈り残し
境界を争うた垣バラが咲き
新しい名簿わが名を確かめる
雲低くたれて決断まだつかず
控えめな無欲へ神が味方する
生きている証しに噴火して見せる

(昭和63年5月10日 発行)



茨城県出身の友人のからの「親じまい」を読んだことがあった。親の葬式を出すことだそうだ。初めて聞いた言葉だったので、映画の「楳山節考」を連想してしまった。大阪弁で考えると、しまう、なおす・かたづけろ、は、雛人形を丁寧にしまう、玩具をなおす・ごみをかたづける、となる。「親じまい」親を片付ける」と思ったからである。

父母を若いころ亡くしていた私には、父母が長生きされている方々が羨ましい限りであった。ただ一人の長寿の親である岳母も昇天して早十年。葬儀以降、一連のいわゆる法事が済んだとき、私なりに「親仕舞い」の意味を感じた。若いころに経験した野辺送りのころには、思いも感じもしなかった疲労感というか、虚脱感が残った。「臨終を告げるモニター画面から消える波形」、その残像がいまだに焼きつき、思い出は消えることがない。

「それが親のありがたさなのだ」「親を送って始めて人生が分かる」。こういった「きつちりと仕上げる、感謝・思い出を胸に仕舞い込む」という気持を込めた言葉が「親仕舞い」であろうと納得できた。

川柳を始めて十年、この間ご指導を受けた方や句集を頂戴した先輩との別れもあった。その方々の顔が浮かぶし声も聞こえる。私たちが思う心よりも、もっと先輩たちは「頑張っているね」と私たちへより強い思いを持って見守ってくださいているのである。

間もなく路郎忌、胸を張れる自分でありたい。

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

黒門で河豚いつびきをはからせる
妻のもつ紐の長さで遊ぶなり

流灯のゆきつく先に母の岸

父の目に赤提灯は赤信号

赤い表紙の本を兄貴が読んでいる

事故のないように見送る霊柩車

勲章が重くていつもそりかえり

カッ井をご馳走になる調べ室

考えてなお考えているふりこ

お茶の味わかつてくれる人が来る

いつからかお金に顔を忘れられ

電話から酒が匂うてくる仲間

王様を泣かすカレーを辛くする

流れ矢と言えばことすむ罪ひとつ

赤紙でないが辞令と書いてある

凡聖一如釈迦もわたしも天を指す

納得のいくまで登るかたつむり

一政のバラ人生はゆたかなり

川柳塔の

川柳讃歌^⑤

上方芸能評論家 木津川 計

ひと一人見送り菜種梅雨になる

山岡 富美子

大切な方を野辺送りすると菜種梅雨に入つた。説明は無くても気持ちを感じられる。川柳もまた一行詩だ。詩人・杉山平一は「天女」をこう描いた「その日 ほんやり広場を横切っていた／そのとき とつぜん／ドサツと女の子が落ちてきた／すべり台から／女の子は恥ずかしそうに私を見上げて／微笑んでみせた／きょうは何かよいことが／ありそうだ」。うれしい気持ちが伝わる。富美子さん、梅雨が明けて天女に出会われますように。

騒音とは云わぬ園児の遊ぶ声

杉本 義昭

杉山平一さんは天女が落ちてきて幸せを予感したのだ。園児の遊ぶ声がどうして騒音であるものか。「サツちゃん」の詩人・阪田寛夫はほんとに子供が好きだった。おとなになつても童心を失わず、「おなかのへるうた」

「夕陽が背中を押してくる」他童謡をいっばいつくった。騒音を嫌って保育所建設反対運動が起こったりする。阪田寛夫には理解できない動きだったろう。僕もそうで、義昭さん、一緒に誘置運動を始めたいと思うのですが。

ドレミのド ペギー葉山はもういない

谷口 義

このところ有名人が次々と逝く。野坂昭如85、船山徹84、永六輔83、大橋巨泉82、菅原文太81、愛川欽也80、藤本義一79と数えているとペギー葉山も83で亡くなった。今秋僕は82になる。気がつけばこの人たちの真ん中に僕はいる。そうか、死亡適齢期に入っているのか。すると、ヘラはラッパのラ、シは幸せよ、さあ歌いましよ、そういう気分にはなれないが、義さん、「南国土佐」なら一緒に歌えそう。山口美穂さんも今号で彼女を悼む。

点滅をするが何とかが生きてます

海老池 洋

なににせよ点滅したり、まばたいたりすると終末は近い。阿川弘之の以前も紹介した「春の城」である。「汽車がホームを離れ、彼がデッキに立っていると、有楽町を過ぎて行く時、新聞社の黄色い電光ニュースがまばたきながら、左へ左へと、第三次近衛内閣の総辞職を告げて廻っているのが見えた」。ついで

東条英機が開戦内閣を組閣、壊滅への坂を転がり落ちてゆく。洋さん、僕も共に点滅の年齢ですが転がる坂で踏んばりましょう。

わけへだてなくびかびかのランドセル

山野 寿之

「わけへだてなく」びかびかの一年生になったのだが、一人親世帯の子どもの貧困率は54.6%。大学にも進学しにくい。上方落語「鴻池の犬」は鴻池家にもらわれ、贅沢に大事に育てられた犬が、捨てられて病気の汚い犬と出合つて驚く。産まれたばかりで別れた弟の犬とわかつたのだ。桂枝雀は捨てられた頼みを切々と語って聴き手を涙させた。犬にもある運不運である。寿之さん、びかびかのランドセルの平等な成長を共に願いまししょう。

僕の名を忘れた母に読む童話

柿花 和夫

「見回して祖父、父、母と名を呼ぶが祖母はわたしを思い出せない」（6月11日、朝日歌壇、小山田理紗）。理紗ちゃんはお嬢さんだったのだ。年をとるとはこういうことかと彼女は学んだ筈だ。それでも理紗ちゃん、お嬢ちゃんをこの子のように大切に。「これあげる孫に長生き券もらう（古今堂蕉子）。和夫さん、お母さんへの幼い頃の恩返しです。

新川柳鑑賞 (65)

麻生 路郎

べんちゃらやないでと念を押してほめ

(日 満)

ほめるといふことはむずかしいことである。むやみにほめるとべんちゃらにうけ取られる。この句はほめていいうちに、自分でもべんちゃらと気づくほどにほめているので気がとがめたのである。しかし、そこには幾らかべんちゃらが含まれていることも想像にかたくない。

生れ變りますと便利なことをいう

(見)

悪事をした場合に、その悪事を認めて、

「すみません」

と云つてあやまる。

「今後、こんなことをしなければ、ゆるしてやるが……」

「決していたしません」

「さつとか」

「へい。生まれ変わります」

と云うのである。そんなにうまく生まれ変

わるものとは思えないがと云うのがこの句の真意である。

働きもせずに社会の罪にする

(一 鶴)

食うだけ呉れないから働けないのだと云つて、ブラブラ遊んでいる。「それではなお更食えないことになるのではないか」と云えば「そうだ。だから詐欺でも、押し

売りでもなんでもすることになっている」「それは正當な生き方ではない」「知り過ぎるほど知つてゐるよ。しかしそうしなければ生きられないのだ。それが悪事だとすれば、それは私が悪いのではない。働きたくても働けないのは社会の罪だよ」

作者がこの論法を是認してはいないところに、この句が生れたのである。

次々と阿呆ばかりの来る日なり

(見)

どんな阿呆が来るのか判らぬが、なるほどそんな気がする日である。自分もその阿呆の一人であることは云うまでもないのである。そんな日が続くことが、その人にとっては意外に幸福なのかも知れない。こんな句は句のウラに味があるので噛みしめて見ぬと味は出て来ない。

寒けたつものに机のわが入齒

(堰 子)

机の上に、自分の入齒が置かれてある。自分のからだの一部には違いないが、見れば見るほど変な感じがして寒けがするというのである。

この句、感じの句であるが感じよりも穿ち味の方がより強くひびく。

看護婦につかませといてやと病人

気を使い

(幽 王)

いつの世にも賄賂は絶えない。大きな汚職問題に対してはどんな理由があろうともゆるせないが、ものによつてはみのがしてやつてもいいのではないかと思う。それは看護婦への心づけである。これも一つの汚職だとは云えるが、そこまで追求する必要はあるまい。多少の心づけは病院によつては公然の秘密なので病院までがその点に気を使うのである。この句は「気を使い」の文字は調子の点から云つて無い方がいいと思う。

胸病めば科もつ如く人をさけ

(七面山)

胸を病むと一応は同情されるが、伝染をおそれなるべく近寄らないようにされるので、つい人を避けるようになるものである。それが罪でも侵した人のように思えるというのである。病人心理を詠んだ淋しい句である。



西出楓楽選

松戸市 山下明子

白昼夢花のベッドに横たわる
役目終え早や雨と散る糸桜

一張羅の帽子さらって春の風

休日の木漏れ日の下ボール蹴る

五月晴れ元気に走るランドセル

認知予防麻雀クラブ大流行

羽曳野市 安本美喜

延命治療辞退宣言致します

急須でのお茶飲む文化減ってゆき

もてたくて紺のブレザー白ズボン

夏蜜柑苦いとほやきみんな食べ

スリッパの蒸れて嫌だよ素足好き

自転車の手運転止めなはれ

鈴鹿市 小河柳女

八十歳余熱があつて生きている

少し狂って生きてみようと思う

領海線夫婦も守るようになる

衣食住母のセンスはすばらしい

季は巡り置いてけぼりの淋しさよ

変身願望お化粧をしてみよう

三田市 九村義徳

しがらみを絶って自由へ大ジャンプ

アルバムが二人のドラマ呼び起こす

AIに支配されてる未来地図

古傷に触らないでと貼っておく

達磨にもやがて手が出る足も出る

縄電車息子信じて乗ってます

富田林市 小出修三

跳ぶように歩けた頃のスニーカー

ど忘れの度に振り出しまで戻る

リハビリの犬を励ましてる家族

医の進歩信じ積極的に生き

孫からのメールは猫の写真のみ

遅れても完走したい老いの坂

宝塚市 岸 田 万 彩

乾いたら飛んでやろうと濡れ落葉

柔らかい尺を当てれば世は丸い

西日射す部屋で羽化する夜の蝶

ぬるい風嫌って無理に異論吐く

下流には能力主義という非情

補聴器が夫婦喧嘩を大袈裟に

米子市 永 井 三津子

玄関で魔法が解けた酔っ払い

母が逝き愚痴も零せぬ義母の下

ナツメロに脳と楽しい散歩する

ゴミシュート嫁にしつかり見られてた

春うらら主婦を忘れて舟を漕ぐ

足よりも口が達者で一苦勞

米子市 川 本 美津子

春らしく花の切手で便り出す

脳トレで鍛えた頭老いる足

シャッターを閉める私の内緒事

お帰りと夫は言わず猫に言う

咲く花は化粧上手で競い合う

愛の無い言葉で会話倦怠期

神戸市 田 本 古 鈴

青空よ私の灰汁を吸ってくれ

片側のあなたばかりに陽があたる

そやねん黙っていると口腐る

五月雨に濡れてしまったボキヤブラリー

神様も酔わせてしまえ春祭り

酒タバコ運転やめて古稀ひとり

米子市 見 山 温 子

草刈りを癒やす桜にありがとう

春ですね庭の花にも命湧く

一雨ごとに名残り惜しみつはなが散る

冬眠から目ざめぬ海馬持てあます

帰省の子へ山菜料理不評なり

きな臭いにおい静まれ神だのみ

竹原市 土 井 輝 恵

幾ら要る死ぬるお金と介護の値

団塊に尻を押されてまだ死ぬぬ

主人公の味方になって読み進む

身の丈をはみ出して行く生活費

LサイズXLに昇級す

主婦それが私の現在地

河内長野市 渡 邊 修

森友にくすぶり続く不発弾

エスカレーター何故か大阪人は右

ひよっとして今年のトラは化けるかも

枕元でメモった意味が分からない

高額の入れ歯に余命思案する

飲み過ぎのパパが帰ると自主避難

豊橋市 藤田千休

大阪市 高杉力

でかすぎる期待に小さくなる結果

チャルメラの誘いに弱い腹の虫

花びらははらはら落とす風無情

責任をとらぬ政治も予言者も

愛憎が綱引きしてる倦怠期

大阪市 磯島福貴子

西之島どんどん太り自己主張

四季島のスイートほども無い我が家

連休明け園児にもある五月病

来し方も行く末もまたマイペース

何で何で真顔で迫る三歳児

大阪市 小野雅美

日本語を忘れぬように書く手紙

デパートへ買わず涼みに行っただけ

手の込んだ料理五分で食べられる

指先が触れて誤作動する予感

口説き方熱心なのに響かない

大阪市 柴本ばっは

梅雨晴れにきらめき揺れる千枚田

樹々たちの笑い声する山は夏

風鐸の響きよろしき斑鳩路

馬鈴薯の花真つ白へ昼の月

ドッコイシヨ亡夫の分も言うてます

故郷に昔泳いだ川がある

母の日に届くはビール詰め合わせ

大丈夫ではない方の大丈夫

元気でねせて東京五輪まで

十七時忍者のようにいなくなり

大阪市 田中ゆみ子

淋しいも辛いも言えず大ジョッキ

呑みこんだ台詞醺酔して喋る

新鮮な噂を配る回覧板

失敗の数は挑戦した証

寄る年波そんな言い訳したくない

大阪市 宮村満寿恵

やっと来た夫婦二人の自由な日

友もいる終の住処はここが良い

我が町は句会も楽し住んで良し

後悔は夫を責めてた若い日を

手の平の長寿の線が見あたらぬ

大阪市 森廣子

不利になりずっと沈黙カタツムリ

時々欠伸している山椒魚

思い込み一人の長い夜が更ける

四捨五入捨てられた四捨入

春風は桜について北へ行く

大阪市 横山里子

冷奴今日の鬱憤ぐちゃぐちゃに
百合根食む鬼百合の子と知らぬまま
静かなる父の日そんなもんだろう
捨てられぬねんき入った馴れた靴
飽食の世にいて飢える子が悲し

池田市 上山堅坊

明日もまたいい日であれと見る夕陽
父の日も句会のほかはない予定
心の糧求めて通う趣味の会
無欲という悟りあの世でするつもり
災害現場先ずはドローンという時代

貝塚市 吉道あかね

Tシャツが似合わなくなり老いと知る
母の日に母を想っている五月
乾涸びぬように多目に水を飲む
ATMのカメラに笑顔見せておく
短針の動き見ている不眠症

河内長野市 中島一彌

春風ジョウロ塵取り蹴散らかす
割り切れぬ気持引き摺り床に就く
干し布団顔うずめれば陽の匂い
検査値に一喜一憂する暮し
箱の底地方紙敷かれ荷が届く

河内長野市 原熊知津子

君の見る世界みたくて背伸びする
わだかまり方程式で解いていく
不機嫌な林檎はジャムにして食べる
こぼした涙集め明日へ橋架ける
沙羅双樹ゆらりと夜へ消えてゆく

河内長野市 穂口正子

ほめられて孫が有るだけ卵割る
ジムにサプリアがいています老い盛り
よくしゃべる口が私を支えてる
桜吹雪さらさらさら春仕舞
生を受け自爆で閉じるやるせなさ

堺市 梅木澄空

失恋の傷ケーキ頬張る程で消え
せからしい夫と買物行けば揉め
一杯の酒でうだうだ暇つぶす
好物のみやげに角が引つ込んだ
いよいよかサイフ無い言う老母

堺市 小林若芽

すんなりと嘘が言えないこと悔やみ
散り際の花はやさしい風を待つ
立ち入ったことには触れぬ茄子の花
欲捨てた余生にしては多事多忙
強い国よりも平和な島の国

堺市 松永庄三

漕ぐでもなくブランコに老い坐りおり

ご香典拝辞と聞いてほっとする

夫逝き喪が明け妻の弾む声

かかりつけ医おしゃべりだけで診立て済み

端株だが日々目を通す相場欄

高槻市 三谷白黒

迷惑をかけた人程覚えられ

車内では自信ある娘は化粧せず

私より昔は妻が早く起き

何事も齢のせいで納得し

動物のつがいはいつも仲良しだ

豊中市 荒木郁子

年一度歌舞伎ムードに身をゆだね

バイキング元を取れない胃の弱さ

手術前食事制限泣くおなか

退院を庭の花達待ち望む

痛む膝お誘いあればすぐ治る

豊中市 荒巻夢

ここに立つこれがわたしの集大成

とんとんと段登りしはいつのこと

破れ障子花びら貼っておらが春

春愁や命と金の駆けくらべ

八十歳地球の行く方憂いてる

豊中市 源田啓生

散るもよし葉桜も良し腕まくり

菜の花が散って重ね衣脱いで見る

あの雲に虎が居そうな五月風

表道に夏が裏戸は名残り寒む

身の内に深く食い込む牙がある

寝屋川市 岡本 勲

老人会花見の前にますぐすり

怒ること忘れた父の背な淋し

年金で赤字出さない妻の技

女房と出かけるというバツゲーム

人づてに聞いてうれしいほめ言葉

羽曳野市 磯本洋一

電気代冷夏を期待年金マン

半世紀朝粥梅と塩昆布

知己来たり走り竹の子コップ酒

懐かしい朝市の声母忍ぶ

定年後妻の手にあるレッドカード

八尾市 前田紀雄

家事分担サボり晩酌減らされる

浮気して政党助成金貰う

全没で無口になって帰宅する

戦前派共謀罪が恐ろしい

九条は世界平和の道標

大阪府 小 栢 こずえ

尼崎市 永 田 紀 恵

老いたなと体の声が多くなる

波立たぬ今日の一日ありがたさ

天気予報聞いてその日の予定立て

漬け物の漬かり具合を石に聞く

世相との段差に言葉ひっこめる

大阪府 神 野 千恵子

華やかな造花薄っぺらな愛

見栄張った今日一日を脱ぎ捨てる

体力もロマンも乗せた夜行列車

ベランダで今日も心が旅をする

何もかもスマホで済ますあほらしさ

神戸市 近 藤 勝 正

喜寿の春傘寿に師事し野良仕事

暮れて行くビール片手に里の山

老残を癒やしてくれる我が故郷

喜寿の春故郷の山は深緑

風呂に入り自分の老いを目でも見る

尼崎市 清 水 久美子

しみじみが染み入る古稀のバースデー

毒舌に混じる確かなアドバイス

ことごとく裏目を掴む大安日

気位の高さで壁を厚くする

さよならも言わずに逝った好きな人

死後離婚嫁のおどしが効く制度

雑草の意地雑草のままで逝く

ウインクを付度できずまだ独り

カラオケで君が代歌い座が白け

失敗を珍味ですよと出す女房

伊丹市 延寿庵 野 鶴

八起きして人間らしくなる器

幸せを見つけたように咲く五月

ひらがなの世界くるくる蝶が飛び

風車くるりと風の置き手紙

ひらめいた一手が開く明日の夢

篠山市 長谷川 善 輔

子の悩み何ともできぬ年となり

この歳でやって来るなよ貧乏神

親不幸子の不幸とは裏表

一人居て「何食べよう」と猫にきく

安らぎは猫を頼りの夕間暮れ

三田市 松 本 ゆかり

真央ちゃんの引退寝付き良くなった

花散って存在感のもどる月

ひと通り旬を食べ終え春が逝く

さ緑のこの一瞬の山が好き

つかの間の冷暖房のいらぬ居間

宝塚市 太田 としお

鳥取市 田賀 八千代

甲子園テレビを壊したい時も

なんとかなるこれが夫婦の合言葉

まじめ人間出世するとは限らない

味が出る夫婦生活五十年

成るように成ってゆくからおもしろい

和歌山市 北原 昭枝

ピカピカに靴を磨いて逢いに行く

ひと時の楽しみがあるツーリング

待ちぼうけ雨にカバンが濡れている

平凡な暮しの中にあるランク

丸いものあればニコニコ暮らせませす

和歌山市 鍋嶋 澄子

しだれ桜開花の遅き春の雨

花冷えに鳥もわたしも静かです

ポリシーを後生大事にぶれもせず

土手のばり蓬さがして野に遊ぶ

暑さなどものもしない若き日よ

岩出市 村中 悦男

孫の手でかゆい背中を掻き回す

背中から腹に移ったおんぶ紐

大空の散歩を誘う虹の橋

散歩道野菜作りの立ち話

ランドセル親の嫉もつめてある

ほとほどの位置で平和な絵が描ける

シャッターを下ろし昭和史また消える

丁寧な言葉使って怪しいぞ

許すこと教えてくれた手の温み

三猿になって平和な糸紡ぐ

倉吉市 宮田 風露

新緑に浮かれブヨからキスされた

譲葉が別れ惜しんで若葉萌ゆ

夕餉の膳両隣でも木の芽和え

五月空鯉もあんぐり口開けて

中国が無料配布をする黄砂

米子市 戸田 真理子

変化球投げて夫の出方見る

母の背が迷う私の道標

熱燗で縫れた糸がほどけ出す

淋しさをお酒で割って流し込む

いびきで不眠聞こえない日はなお不眠

米子市 野川 宣子

がん告知あつさり父は飲み込んだ

五月の風と一緒に父は旅立った

はつらつと声が弾ける新学期

蟠り解かすやさしい物忘れ

みんな許すとやさしい顔になっている

鳥取県 門村 幸子

雲南市 永見 安子

昨日夏今日は冬日で春揺れる
役立たず自認のんびり春の雲
いかんせん指輪似合わぬ太い指
それぞれの立場もあろうそつといふ
パンツ党になって戻れぬスカート派

鳥取県 橋谷 静江

夫の背を後ろから見て寂しすぎ
欲を捨て前だけ見つめ老いの道
子孫ひ孫四代揃い幸せよ
長生きへネジがだんだん緩くなる
聞こえない時は笑顔ですり抜ける

鳥取県 橋本 整

泣き言は言わぬと九〇歳の頑固者
百歳を目指しやんわりしなやかに
無駄足を踏むから人生面白い
九〇路の海馬鍛える電子辞書
定年の息子と囲むバーベキュー

松江市 山根 邦代

山菜のえぐみ苦味が春の味
宅配に出雲訛も詰めておく
句集からありし日の声聞いたよな
夏衣軽やかになり散歩道
三食を手作りにして恙無し

目で合図できなくなった老い二人
次々と背負う心配これもよし
出雲弁あげだこげだと盛り上がり
枯れたよな枝にほっこり花一輪
好きな本あって一人のお茶嬉し

瀬戸内市 片島 秀月

大好きな漢字二文字父と母
揺れたつてびくともしない妻がいる
便り読む辞書などいらぬ母の愛
百歳に貫つた知恵に無駄がない
魂の授戒を抜けて来た僕だ

瀬戸内市 東 槇 ますみ

厨から鼻歌今日の空は晴れ
通販でこと足りてます衣食住
失敗を重ね根っこが太くなる
ポケットの夢が私を眠らせぬ
自分にも還る覚悟で矢を放つ

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

ありがとう一言もらい蘇る
叱るにも愛がこもっていた昭和
格差ある街で人情枯れてゆく
夏帽子しゃれてはみたが背が笑う
味のある返事の残る嬉しい日

玉野市 片岡 富子

ジャズ聞けば体勝手にスイングす

演歌聞きヒロイン気取り涙出る

エンディングノート開いてまた閉じる

夏野菜植えて今年も夏を待つ

夏野菜流した汗の報いあり

岡山県 大杉 敏夫

裏の有る話になってから主役

裏表あるから人は面白い

隠し事大概裏へ浸みて出る

底無しの裏を反して見てみたい

偏屈の裏にも臍が有るらしい

尾道市 小畑 宣之

ありあまる知識あれども知恵は無し

年毎に輝きの増す人もあり

命より大事なものは無いものを

ままごとで分かる日頃の夫婦仲

黄砂にも負けず若葉は凜として

三原市 鴨田 昭紀

口裏を合わせて咲いている造花

晴耕雨読余生は亀の歩に合わす

ほどほどに生きて欲しいという福祉

遠くから見ているだけの正義感

また一人黄泉で下車する縄電車

三原市 笹重 耕三

字足らずの暮らしと字余りの余白

包み隠さず喋りだすペンネーム

重箱の隅から漏れてくる些細

善人の振りもそろそろ飽きてきた

金魚鉢で泳ぐメダカのリフレッシュ

三次市 伊藤 寿子

もうどこを押しても出ない恋ごころ

気力では体力作れないものと知る

97・5歳生きた姑へはかなわな

賢い人でしたと誰も姑を誉め

盾となり我が家守った姑でした

広島県 日谷 寛

さりげないことばについてくる気安

あじけないことばについてくる嫌み

うつくしいことばについてくる気品

かるすぎることにばについてくる不安

しんちようなことばについてくる翳り

山口市 中前 幸子

年号を考えているロダン像

埋み火ぶすぶすまだ捨て切れぬ愛を抱く

サバイバルゲーム不揃いのリングたち

行方知れずの主語を探しているのです

進軍ラッパ吹けども踊らない思考

宇部市 高山清子

鈍感も世に逆らつて生きる知恵

歳が皆違つて見えるクラス会

ボケ防止世間話の輪に入る

ひな祭りにかこつけ孫に逢いに行く

年号が名前負けしている乱世

松山市 近藤修二

春爛漫ころうきさす予感

無条件瀬戸の夕日は日本一

慣れすぎて一線こえるお節介

澄んだ瞳に見詰められ嘘つけぬ

感動のキャッチの幅も広くなる

今治市 渡邊伊津志

風鈴はだんまり人は寡黙なり

新涼の長さへ鼻毛切り揃え

種のある方の葡萄の甘いこと

遠心力つてお金が飛んでゆく

廃校の机を離れない夕陽

西予市 西田美恵子

過疎ですが星降る里へおいでませ

心しておこう老いとは独りとは

手の平を転げて運が逃げてゆく

余り笑うので泣きたくなって来るのです

じわりじわり効いて来ました父の杭

佐賀県 真島久美子

しっかりと錆びる主役として錆びる

逆光の中で現実逃避する

聞いていて飽きる成功者の話

落ちるとこ落ちて私のドキュメント

百均で探検隊の顔になる

那覇市 前川真

面接をしてる眼鏡は度が強い

涙腺の緩さに気付き苦笑い

ライバルは自分自身と見得を切る

輪に入り笑い袋を詰め直す

仕付け糸少し残して子が巣立つ

沖縄県 あらさくら

パパ抜きを孫と楽しみ燃えた夜

さわやかに出会い頭に会釈する

ファッションも気ままな着かた自己主張

デイゴ散るアスファルト染め雨上がる

愚痴よりも自慢話に花が咲く

沖縄県 島尻卓

満天の星に飲まれる五尺の身

うとうとと床屋の椅子はすぐ眠る

スマホにはノーベル賞を与えたい

初めてと予防線張り歌い出す

シンバルもオーケストラで自己主張

シドニー 坂上 のり子

イエスマンだけ集めたい大統領
くよくよと悔いるところを振り捨て
サブリまた買い足し冬に立ち向かう
温度差に戸惑う夏と秋の服
花愛でる心の奥に住むいけず

札幌市 斉藤 宏子

木漏れ日に桜になって会いに行く
春の雨傘も歌うよ子守唄
たんぼの群れに送られ母は逝く
シャガールの青といたたく喫茶店
長い冬ためたパワーで桜咲く

塩竈市 木田 比呂朗

絵手紙も10円切手貼って着き
露出度へ警鐘鳴らすクールビズ
カラオケへスマホ気安く呼びに来る
仕舞湯を演歌で締めていい寝付き
付度の犯人捜し永田町

男鹿市 伊藤 のぶよし

ほどほどを喜ぶ癖が肌に合う
消えかかる虹をかき足し橋渡る
青雲を描いて画布を夏にする
生き上手思い出だつて食べてます
Uターン望みを繋ぐソバの花

白河市 鈴木 たけし

帰還許可まず猪の先回り
フクシマへ学童疎開したじゃない
雑草の不出来な種はないらしい
肩書を脱いで胡坐の国言葉
一泊と聞いてリユックへまず薬

横浜市 巖田 かず枝

一日の至福ベッドに潜る時
念入りに鏡磨いてみたけれど
老犬をおいては逝けぬスクワット
便利さが免許返上迷わせる
子や孫に元気と幸をもらつて

横浜市 長島 亜希子

ブランド品よわたし作った物だから
土筆煮てジジとバーバに春が来る
優先席の若者どこかお悪いの
平和ボケしてる場合じゃないらしい
選挙制度日米これでもいいのかな

福井市 伊藤 良一

後悔は自分に負けた負け戦
孫だけが知ってる孫をあやす顔
晩酌が今日の挫折をやわらげる
再雇用元の部下から貰う印
わたくしの弱気を待っている寿命

奈良市 宇賀史郎

横文字が読めずトイレを探す旅
生返事ぐずを装い風見鶏
札深く言葉少ない人が好き
何迷い何にこだわり何求め

奈良市 尾畑 なを江

母の日にもらうばかりになりけり
褒められて笑顔素敵と褒め返す
スイッチオン朝より夜がヤル気出る
世のみだれ地球に人が住む限り

奈良市 高橋 敬子

簡単とレベル自分にあわせ言う
しがらみがつれ友情揺れている
しがらみを篩にかけて残せたら
秘めた仲ふと挨拶で見抜かれる

和歌山市 倉橋 悦子

もういいと思ういのちを慈しむ
湧き出づるいのちの泉みる大樹
若葉萌え山肥りだす風みどり
車ならとうにボンコッだと自覚

和歌山市 平田 元三

産院の窓に小さな鯉のぼり
同じ垂れ鰻鯉の味微妙
ベスト無理今はベターでチャンス待つ
巢作りの燕夫婦に嫉妬する

和歌山県 森 下よりこ

一人ぐらしに彩添える知恵出している
評判のラーメン店を見て通る
もやもやを晴らす買物一つして
適当が日常になる老いの日々

鳥取市 上山 一平

出雲路の真孤神事で衣替え
かしましい順にひ孫を抱いている
くつきりと陽焼け残した運動会
一張羅アロハが勇む万歩計

鳥取市 大前 安子

燗の底上げて真心注ぎ込む
ふらつきの心地覚えてついお酒
木魚を叩き詫び言お供えす
花囲みお喋りしたは昨日です

鳥取市 津村 律子

陽を背負い這いつくばって草筆る
早散りに今年の桜見ずじまい
豪快に釣って串焼きが醍醐味
しつかりと抱かれています阿弥陀さま

鳥取市 山野 すみれ

ネジ一つ緩めて話すいりり端
温かさ知ってこの手を離せない
残り物福と思って腹に入れ
折れそうで支えた棒が先に折れ

倉吉市 大羽雄大

指切りげんまんの指を持て余す
しばらくは妄想夜のワンコール
良く笑う明日を楽にしてくれる
お世話さまご苦労さまが絆生む

倉吉市 堀かずこ

世も変わり年金暮らしはなし
人生はいつも笑顔が福を呼ぶ
庭先に愛を込めての花造り
風はこぶ花の香りをそよそよと

倉吉市 岡崎美知江

境港市 中井虎尾

苦労した汗は女を強くする
めざすまで夢は握って離さない
土に生き土を支えた母の腕
自分史に流れる涙書ききれず

倉吉市 田中紀美恵

米子市 生田和之

泥んこの孫の靴下勲章だ
三朝の湯温泉湧いて富掴む
はつらつと朗らかな義母憎めない
はつらつと命を繋ぐ散歩道

倉吉市 田中けいこ

米子市 池岡たけし

中国の汚れた空気押し寄せる
土踏んで歩くところが減ってきた
閃けばきらいがないがよしとする
仲間はずれされたくないしくない

倉吉市 中村毅

米子市 池田美穂

高齢化僕もひと役買ってます
うっかりが増えて認知が気にかかる
上からの目線でいつも鬼瓦
ミサイルを気にして泳ぐこいのぼり

切り詰めた食費産地に目を瞑る
試着室私にだけはいじわるだ
グランドゴルフ何故か足より口疲れ
ひと月を待てず律儀に白髪出る

米子市 伊 塚 美枝子
老いたかな朝の目覚めが早くなる
気分だけ若いつもりで膝痛め

膝痛に罪を負わせて草に負け
悪口は聞こえぬふりで聞き流す

米子市 田 村 周 子

人並みの幸せな日々感謝する
趣味もって老いの坂道楽しもう
あっさりとした漬物の味母の味
年寄りも気分だけでもはつらつと

鳥取県 飯 野 菖 子

故里に父母の匂いがまだ残る
客のない臨時気分のバスの中
いい朝だ生きる匂いの一万歩
温かい家族の匂いする夕餉

鳥取県 児 玉 規 雄

長生きをすれば記念日増えて行く
心がけ良くとも落ちる落し穴
母逝きて兄弟の溝深くなる
天国の母から届く応援歌

松江市 相 見 柳 歩

魂の親は仏陀だ目標だ
誰々が言えはみんなになるのかな
この世での愛が育って卒業す
前世でもまた来世でも親と子で

松江市 中 筋 弘 充
子が逝った納得できぬ順不同
神さまがミスすることもあるようだ

入棺師にすべてを託す生存者
骨揚げの合図あるまで飲んでいる

松江市 福 間 芳 枝

谷川の流れ思い出湧き上がる
若葉の香思い出させる若き日を
休耕田空へほほえむ花畑
百までは鍬を握ると眼をすえる

出雲市 黒 目 ひでお
(英男改め)

病気には時間もくすりよくなった
シンブルがいいむずかしく考えず
マクロンが勝ちEUしばし救われる
思い出が胸に溢れてふつつつと

安来市 原 煩悩児

米寿祝コップ半分缶ビール
コップ半分のビールでふうふういう米寿
嫁さんは追加欲しそう缶ビール
米寿祝いさあもう一息頑張ろう

広島市 松 尾 信 彦

半世紀夫婦の振り子微調整
杖手すり自活自立を説き伏せる
オブションは緑と風の一人旅
少子化に小さくならぬ村みこし

竹原市 若年幸子

下松市 有海静枝

森林浴気の合う友とスニーカー
夏日冬日悲鳴をあげるクローゼット
脳トレよ娘に渡されるレシビ本
この青天洗濯しよか出かけよか

竹原市 六田半徳

あれこれと二の足踏んで未解決
羽根付けて適地求める花の種
シャクナゲが見事に咲いて入梅か
西空へ沈む夕陽に手を合わす

府中市 岸田武

百貨店妻を捜してばかりいる
寝違えた首のまんまで出迎えた
一人居の窓が開くのを待っている
ワンマンの死角を僕は知っている

府中市 田辺和子

老いてなお女はおんな忘れまい
母よりもスマホ頼みのクッキング
噂とは蜜の匂か頭寄る
腰痛に油を注ぐ手がほしい

山口市 青木隆子

体調の乱れ私を惑わせる
病癒え働く母にまた戻る
どこまでも子ども本位の母である
ちらほらと届く計報に老い感ず

人工の着色甘味おせっかい
空気など読まない猫とする会話
苛立ちにボーカーフェイス着せておく
許せないこだわり風にくれてやる

松山市 郷田みや

聞き役が最後に置いていった笑み
今回も何とかなった手巻ずし
新緑に包まれ石段を登る
木漏れ日を抱いて素直になれそうで

松山市 柳田かおる

続編は色鉛筆で描いている
口笛を鳴らすと過去が解けだす
雨足をじっと見つめてもの思い
万歩計足を伸ばしてランチする

大洲市 花岡順子

出会うのは野生動物過疎に住む
約束を破った傷が疼きだす
負けは負けじわり涙が湧いてくる
バラの魅力はしっかりと棘を持つ

高知市 三谷松太郎

口角をちよい上げアンチエイジング
B面がヒットしたよない気分
口ヒゲを生やしてみてもいいだろか
そりゃ知らん何と気楽な呆け役者

北九州市 小松 紀子

犬看取るいとおしくて切なくて
あちこちにきしみが出てる年の壁
気が合わぬでもまあいいか人と人
幸せはあの時の苦があったから

福岡県 本田 さくら

桜散るそして百花が勢揃い
難民の子を抱えたくなる夕べ
傷だらけいつかこの星倒れそう
子の全集もつたいなくて捨てられぬ

唐津市 岩崎 實

扁額の鬼の十訓差し替える
恋しくて訪ねた部屋に女性客
ひげじいさんそつたがいと口々に
玄関の隅に三足亡妻の靴

唐津市 吉富 節子

友の居る幸せ感ず眠れぬ夜
三歳の子までスマホに夢中です
友が来て元気な声に励まされ
初夏なのにまだ病院にたてこもり

山鹿市 前田 幸子

今が旬竹の子一本おすそわけ
ブルーインパルス熊本は明日も晴れ行く
デイスーパービス葛蒲浮かんだ湯の香り
認知症母の愚痴に思いやり

山鹿市 柳田 白沙

普通だね普通が一番今気づく
雨が好きあなたと行った紫陽花寺
チヨイス便私を私を選んでね
池の鯉やはり赤黄人気者

沖縄県 禰 ももと

赤札の服が私を呼び止める
天高くすいすい泳ぐ鯉のほり
センス良く紅型を着て師の披露
愛犬はマニュアル無しの子育てを

沖縄県 島村 つばき

老いの花アクシデントで日々咲かす
老いらくの恋で結ばれ二〇年
グチ吐露し美味で満ちた女子の会
夕食を飾る一品コンビニで

沖縄県 高良 秀光

断捨離で残ったものは青い鳥
ちぎれ雲何処まで届くついて行く
フルスイング球に行く先聞いてみる
パーティーへ入れ歯忘れてUターン

沖縄県 宮 すみれ

かたつむり新芽こっそり盗み食い
ふろしきの4つ角結び七変化
幸せは泉のようにシュワーシュワ
絵文字いれべんりメールに文字ばなれ

札幌市 富永恵子

雑草をほめて散歩の雨の傘
ゲーテの詩五月称えて読み深く
感動詞春の言葉をととのえて
往き帰り楽しみだつた花木園

弘前市 高森一吞

二千余本さくら満開津軽春
絶景のお城とさくら津軽富士
風に舞う短い命花筏
もののふも愛でたであろう古木咲く

上尾市 中村伸子

祖母に侘ぶあの日優しく出来なくて
満月とクラシックと珈琲と
その昔メーデーの日の初デート
母の忌をメールですます親不孝

東京都 高岡弥生

独り立ちしてみて分かる有り難さ
年の功何より勝る経験が
写真見て再認識の我が年齢
泣き顔もシャボン玉見て微笑んで

横浜市 川島良子

老いてゆくわたしと若返るわたし
夢語るオトコ現実語るオンナ
子育ても介護も基本愛である
たつぷりとオンナを磨くロスタイム

佐渡市 高野不二

女房に叱られなんだ日が暮れる
腹へらぬまま一日が暮れてゆく
人事の様に思っていた米寿
通販にいらぬ物を買わされる

静岡市 渡辺芳子

健康一番とつくづく思うこの年に
今しかないそうよあるのは今ばかり
私は私今の自分のままでいい
サウラ散る出陣学徒目に浮ぶ

江南市 脇田雅美

列島をクルーズ列車ひた走り
夕方にデパ地下行くと買い過ぎる
喧嘩するほど夫婦仲とても良い
果物にラベルを貼れば美味しそう

豊橋市 小松くみ子

それぞれの酒飲み比べ女子の会
次の世は違う世界も見てみたい
骨董市新品選び買ってくる
骨董品交渉次第客を見る

豊橋市 西郷紀美代

何度でも息確認のうつ伏せ寝
壊れてる人からもう温かさ
煮て揚げて干菓子にもするつくしんぼ
優しさは辛さを包むオブラート

大阪市 田 中 廣 子

青い空萌える若葉に目が休む

大怪我にあまえる自分ここにいる

怪我なおり杖を忘れる二度三度

さがしもの見つけた時の嬉しさや

大阪市 中 島 栄 子

夫亡くし胸にぽっかり穴があく

川柳不思議悩み悲しみ風とする

夕方散歩淋しさ飛ばす万歩計

セール肉ちよつとアイデア松坂よ

大阪市 前 川 善 之

僧侶も残業手当請求書

生れたら幸求める人の性

童話から人の優しさ暖かさ

民主主義右か左か別れ道

大阪市 松 田 聰

爽やかな空のあなたのきなくささ

血圧が上がるニュースが多すぎる

国民は龍馬出現待っている

ふざけるなスマホ運転殺人や

大阪市 吉 田 知 之

人の事にしすぎると動けない

政治家は金と女に力入れ

高野山開いた大師奥の院

野心家は先ずお流れと席移す

池田市 太 田 省 三

桂浜おれは龍馬だ海を向く

旅に出て子供の頃の空に会う

方言にスルメの味もうまさ増し

病院でウトウトすると名を呼ばれ

泉大津市 助 川 和 美

燕来る平穏な日の日記書く

時計見て仕方無く待つ次のバス

いくつもの遅刻の理由用意する

路のとう笥揚げて客を呼ぶ

交野市 田 岡 九 好

自治会のお花見花がまだつぼみ

さまざまなこと思い出すワンカップ

花ヲワリ夜来風雨の声が言う

わが歩く姿はもはやチンパンジー

河内長野市 森 田 旅 人

水道橋古代の技術二千年

車窓越し暖かそうな家灯り

ウインドウに映る自分の老いあらわ

暑い寒い疲れたなどと言わぬボチ

堺市 近 藤 治 子

里帰り子供の私顔を出す

後何度帰れるだろう古里へ

婆ちゃんがまだ主婦の座を粘りぬく

墓参り墓碑の行年たしかめる

堺市 羽田野 洋介

箕面市 寺井 柳童

もう今さら急ぐことなしはつと

適当にやっておけとは無責任

思案するふりで相手の腹探る

居眠りも思案中だと負け惜しみ

堺市 大和 峯二

五七五学びの道の奥深さ

老いまいと散歩に力つい入る

完成度低い人が人のおもしろみ

苦勞人話し上手と聞き上手

吹田市 岩口 のぞみ

産んだ時は健康のみを感謝した

良かったよ飛んできたのが黄砂なら

新入生満員電車の仲間入り

日焼けした奴はちゃっかり九連休

豊中市 貝塚 正子

捨てようときめていたけど残す夢

花吹雪受けて私は有頂天

墓じまいほっとしながら皆無口

心配で増える薬のコレクション

豊中市 木藤 こみつ

本当に死んではならぬ死んだ役

福島の子というだけであういじめ

年ごとにどこか似てくる良い夫婦

A K B見分けのつかぬ女の子

老老介護愛と忍耐資金力

玉筋魚漁海から春を連れてくる

沖からの波を捕らえて波に乗り

デパートの早やお中元飾り付け

箕面市 中山 春代

うつの日のわたし小さな繭になる

ただいまゝの声が投げだすランドセル

十円玉うっかり切らず神社巡り

趣味の輪の七十代は青年期

八尾市 田邊 浩三

場所取りのトラブルに泣く八重桜

押入れの底で寝ている旅鞆

一番に酔って割り勘まぬがれる

じいちゃんが一番風呂は避けてます

八尾市 山川 寧

彫刻の森カンガルとダンスする

ガラス降る箱根の滝を通り抜け

特急で遠足気分発泡酒

臭いよで初めて気付く昨夜の餃子

大阪府 高木 道子

早苗田の大パノラマに飛ぶ燕

ナチュラルに古民家に住む異国人

流暢な大阪弁の外人さん

臍を吊り上げ今日も捜しもの

大阪府 畑 中 節 子

加西市 山 端 なつみ

支え合う頼られる日も良し湧くパワー
無住寺の桜淋しく風に舞う
好みやや派手になりゆく衣替え
朝掘りの筍夕餉の顔となり

神戸市 興 水 弘

川西市 日野岡 和 之

歲月は恨みも愚痴もいい肴
金だけじゃない心から言ってみたいもの
ボケ具合競って笑い元氣出す
暑がりの亡父よそちらは涼しいか

神戸市 山 根 弘 華

篠山市 岩 下 さゆ子

疲れたら帰っておいで母の膝
傘寿でも枯木に花がきつと咲く
夫が逝き川柳杖に老いを生き
五十年夫婦茶碗が欠けました

尼崎市 藤 田 雪 菜

篠山市 藤 井 美智子

好奇心明日の夢につながれる
星空に明日の天気予約する
踏まれても覚悟を変えぬ草の意地
スランプから救い出すのは本である

伊丹市 平 井 富 夫

三田市 幸 田 厚 子

野良仕事美味しくなれと苗植える
まだピンと目と耳立てる欲の皮
妻は巴里俺は鍼しに鍼灸へ
碁と将棋スマホ相談先を読む

高齢でも金はいるいるあて外れ
桜ウオーク柳句がなびく武庫堤
水漏れもメトロノームと波長あう
ペンチャーズエレキ真似てる粹な喜寿

喜寿越えてまじめ不まじめ老い気まま
朝祈りお昼も祈り夕祈る
丸い地球ちょこつとつつまし我が国土
人々が一番好きな平和の字

政治費やはり本音は生活費
花よりも団子猫よりも虎打線
人生はジグザグ道も一筋に
花よりも実の成る道を一歩ずつ

がっかりはうぬぼれなんだ自己愛だ
若い頃わたくしだって恋ばかり
さくら咲く土日めがけて皆見てね
神望む信仰なしに愛に生く

三田市 宗 福 清 司

難問も裏から見ればやさしそう

付合い前に人情味有無要チエツク

口八丁手八丁あ何不足

笛吹いて踊って欲しい人少し

三田市 辻 開 子

指ネイルばあばの足が軽やかに

ドイツ旅一リットルの初ビール

古希迎え次は健康喜寿までと

日帰りの旅が出来てる元気です

三田市 東 内 美智子

試験会場見回る教師今日は鬼

ポンと肩叩いた人と共に老い

他国語の地図並べたて町興し

同意書は走り読みしてあとくやむ

三田市 馬 場 貴美江

藪失せて心閉ざしたホーホケキョ

笑みこぼれ合わせ鏡の母娘

病名は歳相応と耳にたこ

此処よここ頭上のメガネ大欠伸

宝塚市 丸 山 孔 一

反対も批判も良いが対策を

引き金を引けるか今の自衛隊

起きないと今日一日が始まらぬ

吹き抜ける風に行き先聞いてみる

西宮市 福 田 正 彦

煽動でおこす風には乱におう

一言の言葉が生きるありがとう

アクセルは常にブレーキ意識して

聞く耳は持つてはいるがたまに留守

姫路市 中 野 忠

旅先でつまんだ味が病みつきに

此処はこれ旅の思いで地図にマル

買う素振り見せつつ値切る植木市

呼んでない迷惑黄砂とんでくる

三木市 山 口 久 子

宿題がひとつきかかり出来上がり

ボケ防止ひ孫相手に将棋さす

これ大事あれも大事とゴミの部屋

立ち上がり用を忘れてまた座る

(前月分) 岩国市 上 村 夢 香

母の部屋独り占めして声を聴く

先客がいたか筈残る皮

知らぬ間に防犯カメラ追ってくる

正確な体内時計維持したい

小島蘭幸川柳句集『再会Ⅱ』

頒価 千円 (送料共)

ご希望の方は川柳塔事務所

電話 06-6779-3490まで

橘高薫風句抄

(橘高薫風川柳句集) 平成十三年発刊

立ったまま眠る。ペンギン迷亭忌

獐猛な熊が歩けり内股で

元旦やわけて四十という齢は

除夜過ぎて机上湧きくる泉あり

木の実彫りおりと見てあれば鶉

おとがいへマスクをずらす赤電話

灯を消せば彌勒女菩薩毛糸編む

一茶忌の赤林檎より青林檎

栄光の日も一日は二十四時

出産日父看護婦へ少し媚び

虹消えぬ嬰兒の笑みに似たりけり

みぞおち匂う人妻の恋

恋人の膝は檸檬のまるさかな

わが子男子旭のごときまる裸

産声のはっしはっしと聞えける

長男充誕生 二句

東京オリンピック

ひた走るアベベ仏陀の相に似る

吉本菁風君結婚

千万の睫の中の睫かな

本城弦月君結婚

新妻を何と呼ぼうぞ秋の天

へっせ詩集の活字整然鱗雲

銀杏散る風の祭りを見るごとし

潮岬 二句

灯台の在り風浪の中なる繭

灯台は見返る時に惜別す

串本海岸

ボディービル橋杭岩のカミよう

熊野権現 二句

神澄めり鳥の羽音さえひびき

山蒼し幻の中金鷄飛ぶ

鬼灯よわが七才に恋ありき

河相す、む氏還暦

還暦の人若々し五輪の年

浜田久米雄氏勇退

いざ孫と麦藁帽に親しまん

阿波踊 二句

鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ

われもひとつも千手観音阿波踊

俳風柳多留一二篇研究 49

伊吹和男・山田昭夫
石川道子・小栗清吾
細井龍夫

清 博 美

404 まつすぐな柳みて居るあつい事

伊吹 まつすぐな柳で、風のない状態をあらわしている。気温が高いうえに無風状態では、暑いこと限らない。

柳さへたれたまゝ、いるあつい事 一八二八
清 賛。そのまま夜になると、「恨めしや」と幽霊が出そうな雰囲気である。

405 出合茶やあばたつらが金を出し

伊吹 十七文字に一字足りないが、アバタツツラと読むには抵抗がある。ふつう出合茶屋の料金は男が出すものであるが、あばた面の引け目から女が支払っている。

気のしれたあばたをつれて出合茶や

山田 礎解は面白いが、この「あばた面」はやはり男ではないでしょうか。 一八二四

石川 同右。このアバタ面は男では。

小栗 どちらかに決める必要がありますか。引け目の方が金を払うということでのよいのでは。

清 同右。どちらでもいいじゃないですか。

406 花やちるらんで女中をこわからせ

山田 謡曲『熊野』。「いかに熊野。一さし舞ひ候へ。深き情を。人や知る。なうく俄に村雨のして花の散り候ふは如何に。げにく村雨の降り来つて花の散らし候ふよ。あら心

なの村雨やな春雨の。降るは涙か。降るは涙か桜花。散るを惜まぬ。人やある。由ありげなる言葉の種取上げ見れば。いかにせん。都の春も惜しけれど。なれし東の花や散るらん」。主題句はその文句取で、折角花見を楽しむにしている女中たちに、熊野の文句のように、俄雨が降ってくるぞと、怖がらせている図。

花やちるらんのあたりが大しやちく

安四智2

石川 文句取賛ですが、こんな長いのもっと短いのはありませんか。覚えられない。小栗 賛。石川さんのご意見ごもっとも。文句取の部分は熊野が短冊に書いた和歌、

いかにせん都の春も惜しけれど

馴れし東の花や散るらん

を示すだけで可ならん。しかし、その時の様子を説明しないと、「怖がらせ」がわからない。

清 賛。

407 あこへひつはさんていまたゝむなり

山田 外出先から帰って、羽織を「頸へ引つ挟んで亭主畳むなり」と解するむきもあるが、家の中では畳の上で畳むのが普通だろう。だ

からこの句は、

ろをあごにはさんてた、む雨やとり

天四條一

と同様、雨宿りの光景とすべきであろう。

小栗 「外出から帰って」と思う。女性なら
畳の上でキチンと畳むのに、「亭主」はこんな行動をするよという句。

清 同。

408 一チ打を剃刀でけすおしい事

山田 一打は「②眉をいう」(日国)。

女性の元服。鉄漿をつけるのが半元服で、
眉を落とすのが本元服。眉は三日月にも例え
られる女性の美の象徴。それを「剃刀で消す
惜しいこと」。

惜しい事月にたとへる物を取り 傍一24

清 賛。

一ちうちをニタあつけつるはつかしき

安八條一

という類句もある。

409 是命とりめと下女ハなぐさまれ

山田 「この命取りめ」と下女はからかわれ
た。「命取りめ」は、

命とりめと甚兵衛が名言

傍三43

という句のように、荒淫の果て、「腎虚になつ
て死んでしまふよ」というほどの意。相模か
ら来た下女でもあろうか。

清 相模下女賛。まさに「この命とりめ!」。

410 へめぐつていずやとぞそつ浅黄裏

山田 吉原の中を「経巡つて来ずや」と連れ
を誘う浅黄裏。恐らくは素見であらうが、仮
に登楼しても持てぬは必定。

ひるがいにゆかまいかやと浅黄同士

二〇19

清 賛。

411 ぬす人かは入りやすよと火をもらい

山田 「盗人が入りやすよ」と冗談を言いが
ら「火を貰い」。「火を貰い」は煙草の火を貰
うという句が殆どだから、この句もそうであ
らう。場面は色々考えられるが、野掛けで、
田舎の家に煙草の火を貰いに入っていく場面
あたりでないか。

へつついの角へこい取火を貰ひ

三37

小栗 賛。全く見知らぬ他人の家へ「盗人が
入りやすよ」など冗談を言いがら入るもの

か、少し不安ではある。隣家など気安い間柄
の方がびつたり来るのだが……。

清 礎稿の野掛で可ならん。「盗人が入りや
すよ」は、挨拶の言葉で、家人がいる。

412 西瓜うり冬瓜をつつて寄りつかず

山田 西瓜売りが冬瓜の果肉のように白い西
瓜を売ったので、以後は寄り付かず。下手に
寄ろうものなら、

はき溜へ召連られる西瓜売

五〇17

となること必定。

清 賛。

413 引合す姫何とやらいひはひ

山田 嫁入りの後、隣近所へ挨拶廻りをする。
いわゆる嫁の礼と称されるものだが、大概是
姑が、時には仲人や親類の内儀に付き添われ
て、町内を戸別に挨拶して廻る。しかし花嫁
は恥ずかしい上に、初対面の人達ばかりなの
だから、

お初にと斗姑メたてにとり

初3

という次第になる。

伊吹 賛。口の中でモゴモゴと。
清 賛。

愛染帖

新家 完司選

(投句) 292名

東京都 川本真理子

目の下のたるみ具合の程よい日

(評) ということとは「たるみ過ぎ」という日もあるのだ。熟睡したおかげだろうか「本日は程よし」と鏡にガッツポーズ。

奈良市 大久保真澄

くされ縁微妙に愛のある言葉

(評) 照れながら自嘲気味に言う「腐れ縁」。要するに「別れられない」ということだから、微妙に愛を覗かせた「のろけ」ではないか。

札幌市 三浦 強一

お花見は造花満開縄のれん

(評) 人ごみに出かけなくても花見はできる。いつまでも鮮やかに咲いているのは巧妙な造花。おまけにママさんは艶やかな姥桜。

宝塚市 田中 章子

黄緑の服の出番がやってきた

(評) 少し派手か? と仕舞い込んでいた服。新緑の風と光で街が明るくなってくると、違和感なく溶け込み、歳まで隠してくれる。

高槻市 松岡 篤

終活の仕上げは清く生きることに

(評) 悪事を働いてきた罪滅ぼし、というわけでもないが、閻魔さまからお叱りを受けない程度には帳尻を合わせておきたい。

倉吉市 牧野 芳光

悪いことしない程度の正義感

(評) スーパーマンのように華々しく人助けが出来たらいいのだが…。取り敢えずは「悪いことをしない」程度で上出来ではないか。

河内長野市 大島ともこ

本物はいつも妬まず自慢せず

(評) 逆に言えば、自慢が多くて鼻持ちならないのがニセモノ。本物は自信があるので自慢することも妬むこともないのだ。

岡山市 丹下 凱夫

春愁の元を質せば銭がない

(評) 銭がないと侘しいのは春夏秋冬いつでも同じだが、「春だー花見だー」と巷がウキウキ賑わってくると余計に身に沁みてくる。

大阪市 榎本日の出

タコ焼を食べて聴いてるクラシック

(評) クラシックと相性が良いのはイタリア料理らしい。だが、何を食べて聴こうが個人の自由。大阪やったらタコヤキやろ!

弘前市 福士 慕情

一緒に聴けないのか妻の聞

(評) 長年連れ添った夫婦といえども共有で

きない心の闇。重たく苦しい心情の一端を吐露できるのも底知れぬ「川柳」のパワー。

京都市 都倉 求芽

目に青葉言いたいけれど黄砂降る

三田市 北野 哲男

霧の文字を教えに来る黄砂

米子市 後藤美恵子

黄砂飛来洗濯予定狂わされ

沖縄県 宮 すみれ

春芽吹き愛す畑は二畳半

富田林市 中井 アキ

母の日を祝ってくれた鯛と蕎麦

三原市 鴨田 昭紀

ゲームオーバー進む地球の温暖化

堺市 遠山 唯教

新幹線を北朝鮮に止められる

箕面市 出口セツ子

嬉しいことだけを覚えている海馬

和歌山市 古久保和子

米五キロぐらいへっちゃらミニバイク

豊中市 藤井 則彦

することが無いと時計も進まない

佐賀県 真島久美子

怪我せずに良かったねえと負け試合

宝塚市 岸田 万彩

デジタルにアレンジをして家業継ぐ

八尾市 宮崎シマ子

美味なもの食べたらずも動きだす

鳥取市 岸本 宏章
時計屋も今は電池を換えるだけ

海南市 小谷 小雪
よろしくと書き安心をしてみましょう

熊本市 杉野 羅天
体力不十分 気力十二分

榎原市 居谷真理子
ひっそりとした人ひっそりと人氣

紀の川市 辻内 次根
外見は中古で中身はボンコッ

八尾市 高杉 千歩
ひとさし指震える九十一歳スマホ

三田市 上垣キヨミ
つい指を舐めてスマホに叱られる

堺市 村上 玄也
差し出された手は何となく握つとく

岡山市 藤成 操江
酉年です何回目かは秘密です

神戸市 細川 花門
村にいてイヤとは言えぬ奉加帳

おじいちゃん外で遊べと孫が言う
家内には内緒の金が少しある

鳥取県 齊尾くにこ
メルアドのドット老眼から逃げる

勝者より敗者の弁に救われる
大阪府 榑尾 奏子

幽霊にも人氣のデイトスポットだ
割り込んだお尻の居心地が悪い

下松市 有海 静枝
協調をし過ぎてズレた首の位置

消費税なしの山菜摘みに行く
倉吉市 中村 毅

息子見てこんなところにもDNA
夕焼けを見ながら帰る子はいない

八十の遊び盛りが止まらない
河内長野市 山岡富美子

花散つてからの素顔で勝負する
鳥取県 竹信 照彦

カタカナは読めるがみんな外国語
友という宝が消える喜寿傘寿

母の日の役目を終えて枯れた花
人間は暑い寒いと愚痴ばかり

いまひとつなのだ発泡酒もほくも
小太りのおんなになぜか騙される

そばが増えて美味しくなるバナナ
その名らしくもない童宮の使い

古女房あくびの仕方指南する
三角にしとく困ったアンケート

皮つきと茹でたタケノコ見比べる
三田市 上田ひとみ

教育勸語懐かしがっている化石
枚方市 海老池 洋

那覇市 前川 真
涙腺と笑い袋で二刀流

女にも六人ほどの敵がいる
藤井寺市 鴨谷瑠美子

暗算を避けては溜まる小銭入れ
奈良県 谷川 憲

小腹空いたら時々食べるはったい粉
和歌山県 森下よりこ

父母は多分口下手オレがそう
倉吉市 大羽 雄大

受け売りの言葉ブカブカ浮いている
河内長野市 原熊知津子

揉めるのが嫌で言葉数を減らす
高槻市 片山かずお

盆栽がボンサイになり共通語
豊中市 木藤こみつ

ユーカーから石油産みだすエコ技術
高槻市 初代 正彦

鏡みるときはやさしい顔になる
松山市 柳田かおる

デバ地下のこのうろちよろが堪らない
寝屋川市 伊達 郁夫

悪口の相槌なんて気が重い
大阪市 宇都満知子

お医者さん僕の大事なパートナ
藤井寺市 肥山 一文

どんな人か見たことのない母の母
鳥取市 前田 楓花

高槻市 富田 美義
呆け防止これが本命五七五

海口市 堂上 泰女

五七五今日の風紋刻み込む

神戸市 山根 弘華

五欲すてただひたすらに川柳を

大阪市 古今堂蕉子

認知症の護符になります川柳は

沖繩県 あらさくら

ひとひねりひねりひねってねむりこけ

松江市 石橋 芳山

繰り返すたびに言葉が薄くなる

堺市 近藤 治子

連休の渋滞に耐え五七五

神戸市 奥澤洋次郎

宿題に追われ暇する自由吟

米子市 生田 和之

茶も水も出ない句会でしごかれる

大阪市 藤田 武人

題は「酒」下戸が指折り悩んでる

大阪市 井丸 昌紀

タイガース連勝したら句にならぬ

神戸市 能勢 利子

没と思つてたら出してなかった愛染帖

和歌山市 平田 元三

発表誌大きな文字が正夢に

鳥取県 門村 幸子

もう少し長生きをして本を読む

三田市 東内美智子
あらイケメン私一人よバスの中

松江市 相見 柳歩

口開けてボーッとしてた惚れている

鳥取市 大前 安子

好きだから好きだと言っているだけよ

福井県 伊藤 良一

クラス会恋した人ののりけ聞く

河内長野市 藤塚 克三

クラス会賊で隠れたやんちゃ顔

京都市 榎本 宏子

海へ出たまま帰らぬ流しびな

豊橋市 西郷紀美代

青空とそよ風好きなのいはり

大阪市 江島谷勝弘

こんちくしょういまだ青いと言われている

桜井市 安土 理恵

グラスの曇り叱られながら誕生日

京都市 三宅 満子

艶っぽい話もなくて長電話

三田市 福田 好文

出世払いと貢ぐが孫の頼り無さ

八尾市 村上ミツ子

メモ持つて行つても何か買忘れ

大阪市 大川 桃花

値引きシール追っかけ溜まる皮下脂肪

松山市 栗田 忠士

ポケモンGO三日麻疹のように消え

堺市 梅木 澄空
老犬をバギーに乗せて老い散歩

鳥取市 田中 天翔

愛犬が誰に似たのかおとなしい

高槻市 島田千鶴子

連休はアップテンポで時が過ぎ

河内長野市 黒岩 靖博

連休は一家総出の草むしり

塩竈市 木田比呂朗

まだ痛むいま連休の後始末

池田市 上山 堅坊

手を抜いた花はいじけた顔で咲く

芦屋市 竹山千賀子

病床で五月の空を独り占め

大阪市 高杉 力

断捨離を唱えながらの大掃除

八尾市 前田 紀雄

断捨離を心に決めてまたサボる

和歌山市 上田 紀子

太陽の匂い野球の子が帰る

神戸市 近藤 勝正

片親で育てる燕を声援す

和歌山市 楠見 章子

予約日は明日の三時歯が痛い

枚方市 寺川 弘一

免許返納卒業証書くれますか

奈良県 渡辺 富子

口笛を吹いて若さを確かめる

香南市 桑名 孝雄

付度が欲しいもう一本の酒

鳥取県 山下 節子

付度と耳なれぬ語に辞書を引く

沖繩県 高良 秀光

行かねばならぬ酒が僕呼んでいる

堺市 澤井 敏治

郷に入れば郷の風あり地酒あり

香芝市 大内 朝子

ほろ酔いのなんてこの世は素晴らしい

三原市 笹重 耕三

人生のお供に酒と飯と酒

堺市 矢倉 五月

おつき合い程度ですのと大ジョッキ

堺市 内藤 憲彦

どっこいしよ自分をほめて缶ビール

大阪市 若本 安代

ひとりより二人が酒を旨くする

男鹿市 伊藤のぶよし

鈍行のリズムで揺れるワンカップ

倉吉市 山中 康子

咳止めにちよ一杯の赤ワイン

藤井寺市 鈴木いさお

お酒なら決して誤嚥などしない

八王子市 川名 洋子

一合の酒で加齢を手なずける

三田市 村田 博

ステテコでお湯割り呑んでリラックス

姫路市 古川 奮水

杉玉に素通り出来ず敷またぐ

枚方市 丹後屋 肇

七回忌親戚縁者宴会日

鳥取市 福西 茶子

一滴も飲めぬが酒の席は好き

羽曳野市 宇都宮ちづる

嗜んでいます下戸の夫の就寝後

羽曳野市 中川ひろ介

眠り込み車庫まで行った酔っ払い

八幡市 今井万紗子

ばあちゃんの生前葬はワイン付き

尼崎市 山田 耕治

菌車に夜毎油をさして寝る

加西市 金川 宣子

逝くときは大吟醸の一滴を

河内長野市 村上 直樹

四角から三角老いてみんな丸

熊本市 岩切 康子

ご多忙を察しお礼のハガキ出す

三田市 多田 雅尚

夢の中まで麻雀誘う亡き上司

交野市 田岡 九好

小人閑居不善のほかは何もせず

大洲市 花岡 順子

風も空気も夏の用意は待ったなし

箕面市 広島 巴子

太陽光浴びて私も稼働する

神戸市 松井 文香

老人の歩きスマホもカタツムリ

東かがわ市 川崎ひかり

昭和には無かったスマホ消費税

川西市 山口 不動

自治会の役が終わって傘寿なり

池田市 太田 省三

同僚の辞めた事務室風が抜け

大阪市 津村志華子

憎まれるうちは長生きするらしい

神戸市 山口 光久

インスリンお伴に楽しグルメ旅

鳥取市 倉益 一瑤

自慢話小さく包んでおきましょう

奈良市 宇賀 史郎

久し振り子からのメール矢張り金

東大阪市 佐々木満作

衣食住足りて五欲が断ち切れぬ

倉吉市 田中けいこ

うちの垣根お隣さんが物を干す

宝塚市 太田としお

ミサイルより気になさってる甲子園

米子市 中原 章子

魂をふるわす暮らししていない

鳥取市 谷口回春子

横断歩道犬も知ってる赤と青

三田市 尾崎 一子

防災にひとつ加えた紙パンツ

英語 de Senryu⑥

麻生路郎句集 『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

定食へ かひこが桑を食ふ如く

set lunch---

like silkworms eating

mulberry leaves

いつからか死後の準備もしてるなり

she has already begun

preparing

for my death

set lunch 定食 *like* ~のように *silkworm* 蚕 *mulberry* 桑 *leave* 葉 (*leaf* の複数)
already すでに *begun(begin* 始めるの過去分詞) *prepare* 準備する *death* 死

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑦

Dejan Pavlinović(1968-)(クロアチア)

今回紹介するのはクロアチアの若い世代を代表するハイク作家、*Dejan Pavlinović* です。彼は英語、ドイツ語教師の傍らクロアチアの名勝地、地中海に面した *Pula* で観光ガイドもしています。日本からの観光ツアーに時折ガイドをすることがあるそうです。彼は2007年以来ハイク創作に打ち込み、国内外で作品を発表し、さらに「草枕」、「伊藤園」をはじめ数々の賞を得ています。4月の初め、妻と二人の息子を伴って来日しました。東京、鎌倉、金沢、広島、京都を旅し、私は京都で彼らと会いました。念願の日本旅行はフェイスブックを通して、連日世界に発信されました。初めての句集 *DOWN THE MILKY WAY*(『天の川を下りて』)(2016)から作品を紹介しましょう。暮らしの隅々に目を向け、人と自然との穏やかな交流から生まれた作品です。この句集はクロアチア語と英語で書かれています。

vanished/ in their own greyness/ autumn clouds

(煙色に消されゆくなり秋の雲)

from the orchard---/ sweet fragrance still/ in her hair

(髪毛に果樹園の香を残す女人)

back and forth/ four eyes alike---/ puppy and child

(行ったり来たり四つの同じ眼 仔犬と子供)

hopping/ from palm to palm/ a hot chestnut

(手から手に飛び跳ねる熱々の栗)

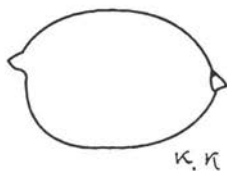
共選欄

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 374名)



「あつさり」 北野 哲男 選

百人が百人ばくを跳び越える
流行つて居酒屋お世辞など言わぬ
付度はしないあつさりノーと言う
付度があつさり縦に振らす首
付度で条件あつさり好転し
今年のトラあつさりなんぞしてまへん
あつさりと負けなくなつたタイガース
九条にあつさりノーを突きつける
難題の是非をあつさり多数決
あつさりと同意はしない共謀罪
嫌いですそうあつさりと合わないで
お別れは判子一つという寒さ
あつさりと逝けますようにナンマイダ
惜しむほど花はあつさり散ってゆく
あつさりと終つた様だ粹な仲

弘前市 高瀬 霜石
堺市 矢倉 五月
富田林市 山野 寿之
尼崎市 藤井 宏造
枚方市 藤村 亜成
茨木市 島田 誠一
箕面市 大浦 初音
鳥取市 前田 楓花
明石市 梶谷 和郎
さいたま市 星野 育子
豊橋市 小松くみ子
藤井寺市 太田扶美代
大阪市 江島谷勝弘
吹田市 須磨 活恵
四条畷市 吉岡 修

「あつさり」 安土 理恵 選

ネクタイを外しあつさりクールビズ
あつさりと負けなくなつたタイガース
ハンカチーフやけにあつさりした別れ
あつさりと子は合格の志望校
紫蘇茗荷刻んで初夏の冷奴
不気味です妻があつさりハイと言う
五十年二人の仲も茶漬並み
あつさりと負けぬ阪神神つてる
グルメ旅終えさらさらと鮭茶漬け
別れ話あつさりといかぬのが男
あつさりと孫にふられた五連休
店屋物であつさり済ます妻の留守
凄いなああつさり記録塗り替える
あつさりと意外に早く脱ぐ兜
同居中娘にはあつさり負けておく

西宮市 福田 正彦
箕面市 大浦 初音
沖繩県 森山 文切
大阪市 奥村 五月
大阪市 栃尾 奏子
大阪市 升成 好
大阪市 磯島福貴子
大阪市 内田志津子
堺市 坂上 淳司
寝屋川市 岡本 勲
米子市 伊塚美枝子
和歌山市 玉置 当代
大洲市 花岡 順子
和歌山市 磯部 義雄
寝屋川市 富山ルイ子

ああそうかそれだけ言った父の背
 ガンですねそのあつさりにうろたえる
 あつさりと逝く為体鍛えてる
 プロポーズあつさりOK貰った日
 竹割ったような男で小気味よい
 あつさりと諦めたのに忘れない
 見た目よりあつさりしてるワタシです
 あつさりと暮らしています好好爺
 薄味に慣れて心身バワー欠く
 薄味の母に合わせて慣れていく
 あつさりと孫にふられた五連休
 あつさりと脱帽したら寝付きよい
 薄味を枯淡の味と妻は言う
 あつさりと十四歳に負けた羽生
 負けました十四歳に頭下げ
 あつさりとつき合う仲のかくし味
 あつさりと辞めて明日からどうする気
 あつさりと見切りをつけた渡り鳥
 欠席へあるだけの返事来る
 こだわりを捨ててさつぱりみんなの輪
 あつさりと過去を忘れる日本人
 五十年二人の仲も茶漬け並み
 三寒四温あつさり行かぬ季の巡り

三田市	上田ひとみ
大阪市	川端 一步
貝塚市	石田ひろ子
加西市	金川 宣子
松山市	栗田 忠士
枚方市	寺川 弘一
松原市	森松まつお
芦屋市	黒田 能子
河内長野市	穂口 正子
八王子市	川名 洋子
米子市	伊塚美枝子
神戸市	山口 光久
堺市	澤井 敏治
大洲市	中居 善信
芦屋市	竹山千賀子
京都市	都倉 求芽
横浜市	川島 良子
神戸市	細川 花門
西宮市	福島 弘子
シドニー	坂上のり子
大阪市	平賀 国和
大阪市	磯島福貴子
札幌市	小沢 淳

あつさりと逝つてみんなに羨まれ
 あつさりと言い切る人の目の高さ
 あつさりの仲間あつさりのお付き合い
 あつさりと許した妻の腹の中
 饅頭を出すにあつさり口を割る
 あつさりと別れて枕濡らしてる
 性格だからとあつさり言う他人
 あつさりと兜脱ぎます妻の前
 自分史はあつさり書けばすぐ終わる
 ひと言の助言で雲が晴れました
 あつさりと忘れられない苦い過去
 辞表出す引き止めもなく受け取られ
 あつさりと別れたあとの過食症
 貸す金はないとあつさり言うておく
 素うどんの客すつと来てすつと去に
 あつさりと「はい」と「ごめん」で仲が良い
 五歳のクイズにあつさりと降参
 出世レースごぼう抜きした七光り
 将棋と碁負ければ清く頭下げ
 AIにあつさり負ける知恵努力
 ガンですねそのあつさりにうろたえる
 切りますか医者があつさり聞いてくる
 後は運あつさり匙を投じている

宇都市	平田 実男
藤山市	藤井美智子
西脇市	七反田順子
和泉市	横山 捷也
三原市	鴨田 昭紀
鳥取市	福西 茶子
和歌山市	楠見 章子
鳥取市	谷口回春子
奈良市	谷川 憲
大阪市	宇都満知子
奈良県	渡辺 富子
箕面市	出口セツ子
大阪市	平井美智子
橿原市	江島谷勝弘
河内長野市	居谷真理子
藤井寺市	穂口 正子
奈良市	鈴木いさお
橋本市	米田 恭昌
藤山市	石田 隆彦
大阪市	酒井 健二
芦屋市	川端 一步
大洲市	竹山千賀子
中居	善信

あつさりと死ぬぬあれこれ手を焼かす

鳥取市 加藤 茶人

守秘義務をあつさり脱がす縄のれん

奈良県 長谷川 崇明

あつさりと離婚再婚アーチスト

沖縄県 島尻 卓

引き際がきれいで止まぬアンコール

紀の川市 楠原 富香

椿一輪すくと落ちていく別れ

弘前市 斉藤 一 昂

あつさりと過去を燃やして灰にする

出雲市 小白 金房子

あつさりと土俵割らない宇良が好き

河内長野市 梶原 弘光

一秒で決まる相撲は見たくない

鳥取市 岸本 宏章

あつさりと断捨離したが惜しくなる

豊橋市 西郷 紀美代

了解とだけ奥行きのないメール

佐賀県 真島 久美子

しくじれば身を引く覚悟できてます

大阪市 坂 裕之

針穴をすんなり抜ける千里眼

青森県 松山 芳生

あつさりと決別つけて始発駅

和歌山市 福井 菜摘

副会長だけは揉めずにはぐ決まる

高槻市 原 洋志

紫蘇茗荷刻んで初夏の冷奴

大阪市 榎尾 奏子

あつさりと言い切る人の目の高さ

鎌山市 藤井 美智子

あつさりと別れて枕濡らしてる

鳥取市 福西 茶子

桜花爛漫あつさり散った花筏

弘前市 今 愁女

あつさりと話し進まぬ墓じまい

和歌山市 土屋 起世子

秀 句

素うどんの客すつと来てすつと去に

橿原市 居谷 真理子

あつさりと過去みな消して再生紙

枚方市 海老池 洋

お茶漬が無性に恋し機肉食

神戸市 近藤 勝正

遺伝だとあつさり言われ吹っ切れる

奈良県 安福 和夫

あつさりと世界平和を語れない

香芝市 大内 朝子

お別れは判子一つという寒さ

藤井寺市 太田 扶美代

あつさりと吊り橋なんか渡れない

熊本市 杉野 羅天

心配をするほどでない明日がある

和歌山市 古久保 和子

あつさりと頭下げられ出ぬ二の句

山口市 青木 隆子

後で知るあつさりと値を引いた訳

奈良市 宇賀 史郎

ここまでと散り際知った男の背

高槻市 杉本 義昭

あつさりと逝かれぐつたりを引きずる

大阪市 古今 堂蕉子

あつさりと家族葬でと書いておく

大阪市 津村 志華子

真実を言えはあつさり済む話

大阪市 大川 桃花

あつさりと非を認めたが裏に糸

唐津市 仁部 四郎

付度はしないあつさりノーと言う

富田林市 山野 寿之

ああそうかそれだけ言った父の背

三田市 上田 ひとみ

あつさりと生きて荷物は増やさない

神戸市 田本 古鈴

保証印あつさり押してから地獄

弘前市 福士 慕情

付度があつさり縦に振らず首

尼崎市 藤井 宏造

難題の是非をあつさり多数決

明石市 穂谷 和郎

戒名はいらんあつさりした男

三田市 堀 正和

秀 句

守秘義務をあつさり脱がす縄のれん

奈良県 長谷川 崇明

あつさりと逝くため金は遺さない

羽曳野市 吉村 久仁雄

あつさりとただあつさりと海になる

佐賀県 真島 久美子

「波」

(投句 237名)

山崎武彦選



6Bの太い波間へ立ち向かう
大波小波越えて夫婦の海が風ぐ
波かぶる度に大きくなる男
波の音父の声とも母だとも
波立たぬよう姑は聞こえぬふりをする
さざ波の暮らし感謝の日がつづく
波しぶき被らぬ位置で吠えている
さざ波で終わった妻の反抗期
波に乗る十四歳にシャッポ脱ぐ
少し美人でさざ波が少し立ち
波風に揉まれ身につく逞しさ
民宿で聴く風の音波の音
波立てた亡夫を許してお仏飯
ふる里はいいな変わらぬ波の音
君は海いつも優しい波だった
魚心見透かすように波騒ぐ
多数派の奢りの波がキナ臭い
人の世の波間を今日も立ち泳ぎ
一度きりの波と信じて君に乗る
年波にパントマイムの二人膳

弘前市	高森	一吞
奈良県	渡辺	富子
堺市	矢倉	五月
大阪市	田中ゆみ子	
西宮市	緒方美津子	
倉吉市	山中	康子
福井市	伊藤	良一
榎原市	居谷真理子	
大阪市	江島谷勝弘	
熊本市	杉野	羅夫
神戸市	山口	光久
藤井寺市	鈴木いさお	
八尾市	山根	妙子
大山市	関本かつ子	
富田林市	中井	アキ
和歌山市	武本	碧
下松市	有海	静枝
和歌山市	喜田	准一
明石市	梶谷	和郎
堺市	澤井	敏治

さざ波は立つが津波にせぬ夫婦
いつだって母はあなたの防波堤
ひと波乱欲しくて小石投げてみる
私が先に折れれば波静か

さざ波のうちに反対抑え込む

テトラポット波のわががま聞いてやる

足跡の影さえ見えず波の音

嫁姑波長合わせている仮面

適当にやらせておけば波が無い

横波も覚悟あなたの船に乗る

どんぐりの落ちたくらの波紋です

ほんとうは静かな海でいたい波

佳句

大波小波その先にある安楽死

来た波にまず乗ってから考える

キラキラと私を呼んでいる波間

幼児に母と言う名の防波堤

廊下のしじまで合わせる周波数

人

日本には稲穂の波がよく似合う

地

さざ波があの日を海を詫びている

天

本音言えば大きな波が来るだろう

軸

安全の神話どっと崩す波

香南市	桑名	孝雄
神戸市	富永	恭子
大阪市	高杉	力
大阪市	榎本日の出	
堺市	村上	玄也
鳥取市	岸本	宏章
唐津市	坂本	蜂朗
弘前市	稲見	則彦
姫路市	古川	奮水
貝塚市	石田ひろ子	
岡山市	丹下	凱夫
尼崎市	藤田	雪菜
弘前市	高瀬	霜石
東京都	川本真理子	
三田市	上田ひとみ	
三田市	谷口	修平
青森県	松山	芳生
大阪市	古今堂蕉子	
弘前市	福士	慕情
橋本市	石田	隆彦

「空 氣」

(投句 241名)

飛 永 ふりこ 選



わけ入って緑の味の空気吸う
古本屋昔時の重み醸し出す
存在が空気みたいと擲掄される
デュエットのムードを壊す貼り薬
場の空気読まずゴリ押し総スカン
酸欠にならないようによく遊ぶ
里じまん地産地消のいい空気
反対の意見が空気引き締める
しらーっとした空気漂う倦怠期
目に緑空気おいしい雨上がり
微笑んでいよう空気が和むまで
有酸素運動ブカブカと金魚
まだ夢がいつばいあって空気吸う
先生もいじめの空気読めぬまま
空気は吸うもの読むのは難しい
正論を吐いて空気が矢張り出し
瑠璃瓦ひんやり城下町しずか
散歩道澄んだ空気と立話
このチャンス扉を開けてみましょうか
酸欠の街に疑心が溜まりだす

大阪市 古今堂蕉子
八王子市 川名 洋子
弘前市 稲見 則彦
豊橋市 藤田 千休
河内長野市 藤塚 克三
倉吉市 牧野 芳光
堺市 澤井 敏治
鳥取市 岸本 宏章
鳥取市 山下 凱柳
三田市 石原 歳子
和歌山市 福井 菜摘
松江市 石橋 芳山
鳥取市 田中 天翔
三田市 堀 正和
大阪市 江島谷勝弘
伊丹市 延寿庵野鶴
大阪市 柴本ばつは
高槻市 安田 忠子
三田市 上田ひとみ
札幌市 小沢 淳

空気まで有料になる近未来
やる気ある方へ流れていく空気
加減する我が家の空気一番だ
険悪な空気読みとる孫二歳
数の驕り空気読まずに多数決
乗り心地悪さにパンク気がついた
穏やかな空気を変える隅の席
空気枕になってあなたに添い寝する
野良仕事ビタミ入りの空気吸う
入れ替えてみるか空気の通り道
ウィルスも黄砂も浮遊する空気
自販機でやがてボンベの空気買う
佳 句
空気です水です今日は金婚日
風神の袋にPM2.5
朝もやの冷氣さやかに吸う命
過労死に気付かぬふりのビル明かり
水空気少しよごれた住みやすさ
人
張りつめた空気に穴を開けてやる
地
空気まで味方になったいい笑顔
天
神さまがいちばん好きな白い息
軸
大ジョッキくぐもる空気御破算に

豊中市 水野 黒兎
芦屋市 竹山千賀子
倉吉市 山中 康子
大阪市 内田志津子
奈良県 長谷川崇明
姫路市 古川 奮水
大阪市 奥村 五月
大阪府 米澤 俣子
倉吉市 中村 毅
神戸市 富永 恭子
弘前市 福士 慕情
三田市 北野 哲男
唐津市 仁部 四郎
岡山市 永見 心咲
三田市 尾崎 一子
池田市 太田 省三
橿原市 居谷真理子
四条畷市 吉岡 修
今治市 渡邊伊津志
弘前市 高瀬 霜石

初歩教室

題 — スポーツ

居谷 真理子

「彼は毒舌だが人は良い」「彼は人は良いが毒舌だ」。どちらの彼と友人になりたいですか。言葉は後に置くほど印象に残ります。川柳も同じです。下五には特に心を配りましょう。下五で句の価値が決まることも多いです。

(原は原句 参は参考句)

原 核脅威と思えど夜は野球見る (生和之)
参 野球見る核の脅威はそれとして
原 朝御飯しつかり食べて散歩する (畑節子)
参 朝御飯しつかり食べたさあ歩こ
原 アイススケートスポーツオンチなれど好き 清司
スケート競技も色々ありますが、やっぱりこれでしょ。
参 フィギュアスケートスポーツオンチなれど好き
原 稀勢の里日本国技の見本です (田廣子)

もう一步踏み込んで

参 稀勢の里国技の重さ背負われ
原 始めよう靴に帽子は整った 雄大
何のスポーツか想像させる楽しさはありませんが、具体的な作者の姿もほしいです
参 ジョギングの靴と帽子は整った
原 ナイターをビール片手に至福時 勝正
参 ナイターを肴にビールああ旨い
原 一途に愛したテニスもグッドバイ 寧
参 ひとすじに愛したテニスとの別れ
原 スポーツヒーロー次の人生如何に生くのり子
参 スポーツのヒーローその後どう生きる
原 負けゴルフ汗をかいても清清し 無記名
参 負けゴルフだけど清清しい汗だ
原 形から入るスポーツすぐ挫折 くみ子
参 ウェアから入るスポーツすぐ挫折
原 負け試合スポーツ新聞くず籠に (高道子)
参 くず籠に新聞投げる負け試合
原 初心者スポーツウェア夢宿る 敬子
参 まつさらのスポーツウェア夢宿る
原 赤ヘルに今年も期待猛ダツシユ ひでお
参 赤ヘルよ今年も頼む猛ダツシユ

原 横綱の神殿奉納人の山

勝治

横綱の姿に焦点を絞りました
参 横綱が神に捧げる土俵入り
原 風船が舞いあがってる甲子園 昭枝
情景の描写にとどまりました。ファンの姿も視野に入れて
参 風船も舞いあがってる甲子園
原 やつと出来跳び箱五段小五年 (東美智子)
参 跳び箱の五段が跳べた五年生
原 ベンチでの経験どこかに生きるはず のぞみ
中八になりました
参 ベンチでの経験きつと生きるはず
原 スポーツの力敗者も美しい 知津子
素晴らしい発想です。私ならこう詠みたい。
参 スポーツの魅力敗者も美しい
原 選手より元気のあつて応援団 まさる
参 選手より応援団の意気盛ん
原 スポーツの汗も涙も爽やかな 澄空
参 スポーツの汗と涙の爽やかさ
原 足腰鍛えたが走るの遅い 風露
面白い句ですね。リズムを良くしました。
参 足腰を鍛えて走るの遅い

原バーゲンへスポーツらしく猛ダツシユ (大) 安 子

参バーゲンへこれもスポーツ猛ダツシユ

原野球バレーサッカー春は忙しい 明 子

参野球バレーサッカーテレビ忙しい

原阪神が勝ち買いに行くスポーツ紙 俊 雄

参阪神が勝てば買いますスポーツ紙

原喜寿迎え心身鍛え若返る 紀 雄

参心身を鍛え直して喜寿迎え

原ボウリング絶好調の三ゲーム ももと

参三ゲームまでは好調ボウリング

原あれもこれもとスポーツ馬鹿が借り出され 紀美恵

スポーツ馬鹿という言葉がきつく感じられ

素直に笑えませんでした

参メンバーが足りず球蹴るバット振る

原二点差で試合はたしか勝っていた 秀 光

参テレビ消す前の試合は勝っていた

原運動会駆けっこ早い蛙の子 律 子

参駆けっこは速い蛙の子は蛙

原テニスコートボツンと一人後始末 (富) 恵 子

「ボツンと一人」は静止のイメージです。

参テニスコート一人黙々後始末

原新聞のスポーツ欄はとばして 治 子

原出不精とスポーツ音痴二重奏 つばき

参出不精でスポーツ音痴です私

原観て吠える阪神ファンいつ王者 澄 子

参王になる日まで阪神ファン吠え

原目の前の巨体を躲す砂かぶり 一 彌

参降ってきた巨体を躲す砂かぶり

原われ亀とヨイドン歩き勝ちました (山) 久 子

参亀ですが歩き続けて勝ちました

原スポーツ紙デカイ活字でする誇張 真

参スポーツ紙デカイ活字で買わせる気

原スポーツで心モヤモヤすつきりと (高) 弥 生

参スポーツの汗でモヤモヤ追い払う

原阪神の試合ない日の茶の間の輪 旅 人

「の」の重なり方が面白くもあり、くどくもあり。

参阪神戦なくて茶の間のなごやかさ

原ウォーキング三日坊主ではないけれど 開 子

参ウォーキング三日はとりあえずクリア

原草野球出番なくてもライン引き 洋 一

参草野球はくの出番はライン引き

原スポーツウェア孫のお古に若くなる (見) 温 子

参スポーツウェア孫のお古がよく似合う

原スポーツは観るものと決め膝撫でる 孔 一

参スポーツは観るものと膝が言う

原完走し額と目から汗が出る (斎) 宏 子

参完走の汗額から両目から

原徘徊のあの人昔スポーツマン 美 穂

参徘徊の昔グラント駆けた足

原目標は五輪見るまでがなんばるワ 厚 子

参がなんばるワ東京五輪見るまでは

【佳句】

スポーツウェア着ているだけで若返る こずえ

テニス部の汗で育った粘り腰 (前) 洋 子

走っても飛んでも落ちぬ体脂肪 由 美

虎や鯉見出しが踊るスポーツ紙 なつみ

今や遥かバブル時代のゴルフ熱 (門) 幸 子

おしゃべりがしたくて通うフィットネス 里 子

野球よりスター選手を見に並ぶ 亜希子

パン食い競争に向いてはいないメロンパンこみつ 崇 明

稽古すみ関取帽子チョンと載せ 隆 子

ウェア買い三日走ったランニング 美枝子

気持ちではフルマラソンも走れます

【今月の推せん句】

スポーツも政治力には逆らえず 小野 雅美

白シャツが似合うスポーツマンの顔 西郷紀美代

初夏なのに六甲おろし吹く異変 永田 紀恵

川柳塔鑑賞

同人吟 倉 益 一 瑤

— 6月号から

バカだなあ正直ものだなと褒める

高瀬 霜石

バカと強く短く大きな声で言えば、怒った様になり感情を害する。バカだなあとゆつくりやさしく言えば愛おしく聞こえる不思議な言葉だ。子供の頭を抱きバカだなあと一緒に泣いた日も。最近、酒飲みで逝った仲良しに、線香を立てながらバカだなあ…… とつぶやいた。

噂では僕は奇人と紙一重

森 山 盛 桜

いいですねえ。川柳家はみんな個性的なんです。だから魅力的で楽しい方ばかり。それぞれに紙一重を持っている、何かを吸収して自分磨きをしたい。

老体の健忘症も愉快なり

福 西 茶 子

とうとう来たか？と思う事もあるけどアレソレコレで通用する。物忘れして、その行動に思わず一人で笑ってしまふ。

ゆとりなどないが時どき空を見る

岩 佐 ダン吉

毎日忙しくっていらいます。でもそんな時充電する術を心得ておられる、それが簡単なようでなかなか出来ない。今日も何かに追われるように過してても見習わなければと思いました。

隠しごとしない夫が物足りぬ

菊 地 政 勝

女性って私を含めて厄介で勝手なものです。隠しごとをしたら不愉快になるし全く無いのもこれまた不安、夫婦関係の、不思議さをよくご存知である。その心理私にもよくわかるのです。

ぼちぼちと免許も返す時が来た

奥 村 五 月

最近高齢者の事故の何と多い事。事故を起こしてからでは手遅れ、潮時は何時か悩んでいます。行動範囲が狭くなるし川柳会に出席するのも難しくなるので……

ふる里の山菜伸びるがままだらう

奥 時 雄

歳を重ねるごとに故郷が恋しくなる。楽しかった山菜取りも懐かしい・過疎化した山々は熊や猪が出て荒れ放題だらうか一度帰省してみようかな？故郷を思う気持ちが伝わって来るようである。

若さつていいな一夜で消す痛み

澤 井 敏 治

そうです。若いって一晩寝たらケロリとしていて羨ましい。今はそうはいかない。でもね、私達にもそんな年頃があったんです、厭な事は早く忘れましょう。

忙しい時忙しい事頼まれる

内 藤 憲 彦

妙に色々な事が重なってやって来る、予定を立てていても頼まれれば厭とは言えない。まだ人に頼りにされると言う事はよしとするか？と思いつながら駆けずり回れる事に充実感を感じています……

器ではないと解つてます

矢 倉 五 月

この開き直りがいい。私の言いたい事を代弁して下さっている感じ。かしこに心の総てが凝縮されている。

貧しかったが子の虐待の無い昭和

石田 ひろ子

虐待のニュースを見るたびに心がキユーと痛む、苦しくなつて悲しくなる。世の中豊かになり核家族の結果、心が成長しないまま大人になつたからだろうか？大家族で近所中が育ててくれた昭和には皆が温かい眼で見守つてくれた。老人の虐待も然りである。心寒くなる。

曲つていませんよわたくしのオヘソ

高田 美代子

そうですね本当は時どき曲げたりして？私よく曲つて困るんです。ケロリとすぐ戻るのが特長なんです。

毒舌をかわした友が迷子札

酒井 紀華

親しい友の哀しい現実にくぐ最近出会いました。他人事ではないと怖くなりました。神様は平等に歳を重ねることを認めて下さったはずだが、時には意地悪も。

身の丈を知りつつ背伸びもう一度

松井 文香

目標は手の届く少し上に置きたいと聞く、自分に無理だとおもつても諦めず頑張っている文香さんにエールを！

お節介の一つ手前で立ち止まる

武本 碧

一歩手前で立ち止まれないのが人の、性でしょうか、出過ぎた杭は打たれると思ひながらつい世話焼きをしてしまふ。世の中にはそんな方もいないとだめです。きつと感謝されてますよ！

ブランクは真つ赤な花で埋めましょう

古久保 和子

「ハイ」と思わず言つた。和子さんの余白はきつと華やかで楽しいものになるでしょうね。素敵な句にすごい説得力を感じ、そうしたいと思ひました。

骨壺に入らぬほどの嘘を言い

加藤 茶人

自信をもつてここまで自己申告出来たらお見事と言う他はない。閻魔サマにも匙を投げられるかも？心の内面を曝け出した川柳に拍手を送りたい。

無い袖は振れぬがサブリだけは飲み

中村 金祥

長寿の時代テレビからサブリが手まねきする。寝たきりになるまいと食事代を削つてあれもこれもとサブリを食べる、効果についてはどれが効いたか不明。

酔うほどに昭和の人になつてくる

竹村 紀の治

酒飲みに囲まれ育つた私にはよく解る飲むほどに酔うほどに昭和に生きた私達には話題は山ほどある、貧しくて苦しい時代だったが、振り返れば懐かしい事ばかり一晩かつても語りつくせない。

午前0時力ボチャの馬車とすれ違う

石橋 芳山

確かに酔眼に見えたのはカボチャの馬車、シンデレラが急いで帰つたに違いない。もう一軒なんて言わずに貴方達も早くお帰りなさい。楽しい句にはんわかと心が温かくなりました。

狂わない時計わたしを急かたてる

岸 桂子

楽しい時間は短く、苦しい時間は長い歳を重ねると刻の流れを早く感じる、やり残したことはありませんか？

廃材を集め自信の句を作る

藤井 智史

すごい発想力に脱帽です。どんどんいい句が生まれるでしょう。ガラクタの山の中にお宝があるかも、なかなかそこに気づいていない。マイリマシタ！

水煙抄鑑賞

— 6月号から

佐々木 満 作

透明のネイルで淑女演じ切る

小野 雅 美

女性はいくつになっても美しくありたいと願う。その為に流行に遅れまいと日々努力する。一方、それに目もくれず自然体で通す淑女もいる。

好奇心若さを保つサブリです

尾 畑 なを江

人間高齡になっても好奇心を失つてはいけません。物の見方や考え方は若い時と違って来ますが、脳を活性化する意味でも、とても意義のあることだと思ふ。

いただいた電話でごめん長話

中 山 春 代

帰宅すると妻は電話中。風呂から上がり食事を終えても長話は続く。合図を送るとやっと受話器を置いた。どちらが掛けたにしても料金は気にしていない。

ユーモアの医師は病を癒してる

藤 田 雪 菜

最近の医師は患者よりパソコンに向かつて診察する人が多い中、雪菜さんの医師はユーモアを交じえて親身に診てくれるので、痛みも和らぎ癒される。お大事に。

文明の利器使いこなせず飾り物

山 根 邦 代

いや確かにパソコン・スマホ・電子辞書・電化製品等々、物凄いスピードで様変わりする。うっかり買うと年輩者には使いこなせず無用の物となりかねない。

札束の増える手品を習いたい

高 山 清 子

アハハハハ思わず吹き出しました。清子さん、そんな手品があれば私も習いたい。しかし、汗水たらして得たお金に価値があり、年金で厳しく暮らしましょう。

花筏カルフモゆるりゆく水面

鍋 嶋 澄 子

私の近くの川にも先日カルフモ親子が散った桜の花びらの水面をゆつくりと泳いでいて、とても心が和みました。

蛇口ひねる今日のいのちが踊り出す

小 河 柳 女

早朝洗顔とラジオ体操を済ませ一日がスタートする。今日は句会の日、沢山の柳友と会える。命の洗濯になりそうだ。

残酷なニュースに慣れてゆく怖さ

松 田 聰

確かにそうですね。世界でも国内でも残酷な事件や事故が連日のように起きている。私達はあまたかと聞き流しているが、いつ自分の身に降りかかるかも知れぬと思うと、背筋が寒くなる。

アメリカの傘を信じている日本

木 藤 こみつ

敗戦国日本にとっては戦争放棄という大義名分が憲法にある以上、参戦する事はないと思うが、最近の国際情勢を見るとアメリカの傘の下、不安感は拭えない。

新聞も手紙も来ない無聊の日

小 出 修 三

新聞休刊日なのか便りも来ない。することがなくごろ寝、こんな日もあろう。

花も実も落としてからの人間味

日野岡 和 之

栄光も挫折も過去のものとなった今、定年を迎え余生をどう生きるのか。金はなくても心だけは豊かに保ち続けたい。



エコを考える

大氷河ゆるむわたしのうたた寝に

ゆつくりと地球蝕むフロンガス

温暖化ひたひた海が押し寄せ

海水が岬を食べる温暖化

温暖化地球だんだん呆けてくる

地球泣かせたシツペ返しかこの暑さ

杖ついで地球を救う講義聞く

地球温暖化に対して世界が本気になって取り組もうとしたのが、平成九年に採択された「京都議定書」です。それから20年も経ちますが、経済優先などそれぞれの国の思惑もあり、スムーズに進んでいないのはご承知の通り。

もたもたしている内に氷河が融け、水温上昇により海水が膨張し海面がじわりじわりと上昇。南太平洋のツバルやキリバス、インド洋のモルディブ等の国々は水没に備えて、国民の海外移住まで検討せざるを得ないということです。

クーラーがなかった頃を考える

風鈴も団扇も味方価値高

省エネに海の家ほど廉価高

二十キロは自転車で行く原油高

エコ生活洗車は雨に任しとく

ステテコもカラフルになるクールビズ

ばあちゃんは倭約孫はエコと言う

確かに、巨大な地球に対して、私たち一人一人の力はあま

島山 軍子

馬場 光次

菊本 誠忠

春田 節夫

川口 凡太

野口 節子

蘭田 獺沓

藤成 操江

小林 生子

加賀田志延

今井 奎子

上地登美代

村上 玄也

寺川 弘一

りにも小さすぎます。しかし、「個人で対処できることではない」とか、「私には実害がない」などと、みんなが無関心

でいますと、ますます事態は悪化するばかりです。

一人が出来ることは僅かですが、雨粒が集まって川になるように、みんなが少しずつエネルギーを削減することによって、温暖化にブレーキをかけることができるはずですよ。

エアコンが普及したのはごく最近のこと。父母の代では酷暑でも団扇やスタレで凌いでいました。その頃のことを考えると、すぐ近くの車に頼ってしまうことや、洗車で水を浪費するのも勿体ないことだと反省させれます。

節電は価値観変えてゆくチャンス

節電はケチで前からやっている

涼み台節電談に花が咲く

電球が節電ですと切れたまま

夏風邪をひいて節電しています

取り敢えず深夜のテレビやめにする

エコ生活のエコとはエコロジー（生態環境）のことですが、

エコノミー（経済）のエコと受け止めることもできます。ややこしいエコロジーの観点よりも、分かりやすいエコノミー

から考えると今日からでも「節電」に取り組めます。

暮らしのエネルギー源である「電気」を節約することによって

家計も助かり、地球の負担も減らしていることになります。

「ケチ」はマイナスイメージですが、良い方に取れば生まれつきの省エネ家。電球が切れたのも夏風邪を引いたのも天からの「節電せよ」という進言かもしれせん。深夜テレビを止めて早寝するのは節電と健康維持の一石二鳥です。

木見谷孝代

加島 由一

岡本 昇

村中 悦男

太田 昭

仁部 四郎

肉と葱

淡路放生

気難しい男である。

大正二年、川柳〔番傘〕の創刊号が、
たまたま東京にいた麻生路郎にとどいた。
そのときの彼の手紙がある。

〔番傘が何處からか舞いこむ。お前のや
うな人間には、到底解りもすまいが、一
寸見せびらかしてやるといった風に。詩
人の私には番傘より晩方の方がどれ位感
じがいいだろう。今に梅雨が来れば番傘
は破けてしまふ。さつと破けて了ふ。ド
ス黒い色になってサ。番傘の奴等俺を鳥
流しに合したな。覺えてゐろ、覺えて居
ろよ。今更あやまつたつて誰れがきくも
のか遅い遅い。〕

この悔しがりようはどうだ。二十五歳
の焦燥と怒りを、詩人が即興でぶつける

とこんな色になるのだろう。人によつて
はこの手紙を、川柳仲間に対するふざけ
と解する人もいる。がそれはともかく、
子供のような憤懣に、路郎の内面が透け
て見える。これも芸術家にありがちな、攻
撃性、易怒性、被害妄想の現れかも知
れない。

後年、川柳界の頂点のひとりに駆け上
がる彼は、明治二十一年尾道市に生まれ
ている。生後すぐ尾道市の対岸に見える、
向島の漁村へ里子に出された。母親は翌
年に死んでいる。七歳のとき、実家に引
き取られるべく、兄がむかえにきた。路
郎はそれを拒んだ。兄は弟を背中に負ぶつ
て、海岸通りを歩きながら説得するのだ
が、頑としてききいれなかつた。路郎が
里親と別れて、大阪に居を移している父
の元に帰つたのは、十一歳のときである。

七歳のときは拒み、そののち四年も里親
の家にいたのはなぜだろう。推察すると、
未熟な少年の屈折と抵抗が、見えてくる。
わたしもまた、十八歳の未婚の母に、生
後一週間ほどで、板前と芸者の家に養子
にだされた。その夫婦は、わたしが十歳
のとき離婚。児童相談所から、施設に
……。という体験を経ている。

幼年期に肉親と別れた少年の、過敏に
反応する、被害者意識や猜疑心を、路郎
も持てあましていた時期があつたのでは
なからうか？。ただ、海岸通りを歩く、
兄のことばと背中の中の温もりだけは、とき
に思い出して懐かしんだことだろう。

『麻生路郎読本』の中に、政田大介のエッ
セイ〔臨川亭秘話・川雜岡山最後の日〕
がある。（川雜岡山とは、川柳雜誌の岡山

支部という意)。

書き出しは、

「何というセンセイショナルな題であろう。だが〔川柳岡山〕ではなく〔川●●●山〕である。これは臨川亭雑話というような生やさしい話ではない。川柳岡山過去三十九年の歴史の上に一大転換をもたらしたドキュメンタリーな重大事件なのである。」

思い入れたつぷりに始まる。

「歴史家でも、ジャーナリストでもない私がこれを書くことの至難さは、勿論のことであるが、かつての不朽洞会員である路郎師の門下生でありながら、一旦筆を執ったならば、正確な事実にもとづき、私情を交えない公正無私な立場に立つて、記述せねばならない責任感の重圧があった。」

昭和三十六年、岡山駅近くの山陽旅館の二階において、〔川●●●山〕の六月例会があった。出席者三十八名の集まりだった。投句時間の締め切りが迫ったころ、
「大介が煙草を買う為に階下へ降りた。丁度その時玄関の戸が開いたままになっていて、麻生路郎を中心に、中島生々庵の

後任として新しく不朽洞会理事長になった北川春巢と、武部香林が突然入ってきた。

路郎はにこりともしずいきなり

「風来子はどこや？」と大介にいった。

川●●●規定の説明に、春巢と香林両氏が来ることはきいていたが、路郎御大直々のしかも突然の来岡に、大介はただならぬ気配を感じた。

「会場は二階です。ご案内致します。」

と答えて、三人を二階の会場へ案内した。

この日、麻生路郎は、川●●●規定に引っ掛かっている、岡山支部の方針を正しに來たのであった。その規定とは、

一、川●●●つりを毎年七月十日（路郎誕生日）に、全支部一せいに開催する。

二、支部句報はガリ刷で八頁以内とすることとし句評、柳論等載せてはならない。句報は他支部に売ってはならない。第三種郵便認可は不要である。

三、支部会員即川●●●誌会員とす。

こんなものだが、岡山支部はこの領域を大きくはみだしていた。

（会員数四五〇〇五〇〇名近くあり、句報も昭和二十七年五月より活版印刷にな

り、同年十月第三種郵便の認可も受けていた。句評欄も随筆欄もあり、紙数も十二頁建であった。）

（さて句会場は香林のくどくどしい支部規定のあと、路郎は風来子に向い

「この規定が守れるかどうか？」と詰問した。風来子は「それは無理であります。」と答えた。路郎の表情が急に険悪になった。）

「十九平はどうか？」と尋ねた。十九平は「出来る限り支部規定に沿うよう努力します。」と答えた。（略）師と仰ぐ路郎の命令に叛くことは出来ない。進退極まつての歯切れの悪い返事である。

「大介はどう思うか？」と路郎

「現状維持でゆきます。」と大介

「現状維持ということとは、十九平の意見と同じということか？」路郎は畳みかける。

「いや、このままの状態を続けるということですよ。」

川●●●不朽洞会員であり、川●●●赤坂支部の代表者であり、かつ川●●●岡山の同人でもある大介は、温厚であるが、正義感の強い男である。

大介の肝はすでに決まっていた。風来子と行動を共にしようというのである。

大介の色よい返事を期待していた路郎は「ブルータス汝もか!!」と心中にがらきった。

「恵二朗はどう思うか?」

「十九平さんと同じ意見です。」

温厚な彼のことであり、路郎に心酔している彼としては当然の答えであつた。

ここに名前があがつた人たちは、「川雑岡山」の代表諸氏であらう。

風来子の『それは無理であります』の無理はいい反応である。四十名近い会員を前にして、うかつなものいいは避けなければいけない。大介も、

「川雑岡山が、風来子の真摯な努力と、卓越した経営手腕により、地方柳社としては組織が強大になり過ぎた。」

と書いている。彼としても、県下の川柳界のために働いてきたという、自負と責任をすてきれものではない。

十九平の『出来る限り支部規定に沿うよう努力します』これもこれでよい。どだい何年も好きにさせてきた支部規定を、いまさら急に、という問題である。返答

に窮するのは想像でしよう。

さて、政田大介の場合は、このエッセイの書き手である。事実にもとづき、私情を交えない公正無私な立場に立つて、書いたに於ては、主観が勝ち過ぎるようだ。師と仰いだ人との決別を述べるのに、このはしやぎようはいただけでない。尤も、利己主義者は組織に不用な男であるが、路郎は次のように進める。

「他に意見のあるものは言いなさい」というと、日比製練川柳会の代表者迫田美婦適が、

「川柳雑誌以外の柳誌を読むとか、他の柳派の句会に出るなどということは、余りにも文芸の世界に枠をはめ、自由を束縛するものではありませんか?」と迫った。

これに対して、路郎は持論を繰返し強調し、信念を曲げなかった。

持論とは、彼はしばしばこういった。

「川柳を上手になろうと思えば、俺に体当りでぶつかって来い。それは川柳雑誌へ投句することだ。投句することによって選句指導を受け、自己の句の歩み方がおのずと判る。決して他の系統の柳誌を

読んだり、他の吟社の句会等へ出てはならぬ。それは句が乱れるからだ。」

これは麻生路郎の親切である。「川柳を上手になろうと思えば、俺に体当りでぶつかって来い」これだけでいい。その他のことは老婆心である。理屈っぽくて、物のわかりのよくない教え子には、ここまでいっても理解できない。

才能のある人は、感性、思い、時間、の濾過をえて、自分の世界が見えてくるのである。時が止まったようなひろびろとした、空間にでるのである。ここまでは、師の仕分（選）に全身を委ねて指導を受ける。この方法しかないし、この歩みが一番早い。路郎の「句が乱れる」とはそのへんが含まれているのである。

さて、迫田美婦適のあと、

「突然大介より右手三、四人目の席へ坐つていた北山槽声が大きな声で

「路郎先生! あなたは川柳を通じて商売をなさるおつもりですか?」と鋭く切り込んだ。(略) 天下の路郎に対し誠に無礼とも思える質問をつきつけ、路郎の激怒は頂点に達した。」

槽声は、昭和十一年八月に、路郎が、「川

柳職業人宣言」を発表して世上を賑わした事実をご存じないようだ。商売にもなにも、この時代から川柳だけで飯を食ってた人が、何人いただろう。北山槽声笑止である。先を急ぐ。路郎は、

〔風来子に向つて〕

「岡山支部を直ちに返上せよ。君は只今限り不朽洞会員を除名する。」と顔を引きつけてテーブルを叩いた。この時大介の差向いに坐っていた恵二郎が涙声で

「路郎先生！もう何も言わないで下さい！！」と叫んだ。（略）

除名を申渡されても風来子も負けてはいなかった。

「お言葉を返すようですが、岡山支部は本日限り返上致します。不朽洞会は先生に除名される前に、私の方から脱退させて戴きます。」凜然と言いつつた。（略）

路郎は続けて「今日の句会は風来子に關係のない句会であること、支部のゴム印、看板、会員名簿、会費その他一切の財産は、本社へ持ち帰つて預る。」といった。

風来子はこれらのものは総べて会員のものであるからといって提出を拒んだ。

（略）争いは終つた。

不思議である。麻生路郎ほどの人が、このとき、なぜ、岡山に向向いてきたのか？。大森風来子に支部規定を突きつけ、除名するのが目的なら、大阪本部にきたところを、気の利いた者にやらせればよい。自分が動くことではない。組織とはそういうものであらう。しかし、それを選べないところに、路郎のもつ人間の魅力があるようである。全国の会員たちは、そこに心酔しているのかも知れない。

最後に、風来子は次のようにでる。

〔先生ともうお逢いする機会はないかも知れませんか、お別れに短冊を一枚書いて下さい。〕と冷静な口調で言つた。〜

いつまでも肉と葱との仲であれ 路郎

（とさらさらとしたためて席を立つた。鮮やかにして静かな退陣である。（略）誰

一人として見送りに立とうとする者はいなかったが、風来子は路郎のカバンを持つて階下に降りて行つた。春巢、香林も無言のまま続いた。

「先生長い間いろいろお世話になりました。どうかお元気で——」と風来子。

「君も元気で頑張り給え。」と路郎は言

うて山陽旅館を後にした。）

これを一場の俄と見る。麻生路郎、大森風来子、どちらも引かず、後は、礼を尽した漢の立ち姿が見える。ひとりが思いをおさえて、短冊を所望すれば、ひとりが黙つて筆をとる。

阿吽の呼吸である。

ここで、肉と葱の句をいぶかる人がいるかも知れない。しかし、この句を選んだことで、麻生路郎はいつもの自分をとりもどして、岡山を離れることができたのだと思う。一方、風来子はいまさらながら師の大きさを知ったことだろう。

——書き終つて、句集、「旅人」をバラバラとめくつて見た。

幻の中に時計が鳴つてゐる 路郎

この、虚空を夢みるような路郎の世界をいいなあと思つた。

参考資料（麻生路郎読本）

麻生路郎物語 東野大八

臨川亭秘話・川雑岡山最後の日 政田大介

時を越えた出遇い

現代川柳新思潮 岩崎 眞里子

その本が居間のテーブルに置かれて五ヶ月余り、もはやテーブルの一部と化している『麻生路郎読本』である。ソフトカバーなのに厚さが二十五ミリを越え、ずしりと重い。企画から始まり資料収集・執筆依頼・編集・校正等々：出版までの経緯を考えると、その厚さは熟さへと変わる。ダイナミックな風貌の表紙写真と哀愁漂う裏表紙写真、そして本文とが一体になって座っている。

川柳塔誌に「句会燦燦」を書かせていただいているが、生活感溢れる月例句会作品は実に活き活きして暮らしの息づかいが伝わって来る。句会大会吟によくある言葉の衝撃から生じるインパクトの強さを狙った作品や、技巧に技巧を重ねた実験的な作品、強烈に自己を主張する作品はあまり見られない。生活に根を張った創作を心がけていることにある種の感動を覚え、根幹を成している精神を尊いと思う。その源流を目指して『麻生路郎読本』という大河の中に踏み込んだ。

先ず開いたのは「麻生路郎のひとと作品」の章。川上三太郎・岸本水府・河野春三・白石朝太郎・橋高薫風……と

見知っている名前を探しながら読み進み、西村梨里さんの「父を想う」は幾度となく読み返した。

交流の広さは想像を越え、家族を巻き込んだ川柳生活の凄まじさに圧倒された。そして人として桁外れな巨きさに触れてみたくなくて迷わず、東野大八氏の書かれた「麻生路郎物語」の章へと向かった。

私の所属する川柳社の中に青森県川柳社があり、柳誌として月間川柳「ねぶた」を出している。戦後間もない昭和二十三年に県内各柳社吟社が集まって創設され、幾度の危機を乗り越えて昨年八〇〇号を迎えた。その編集に二十年程前から関わっている。小さな柳誌ではあるが、創刊の言葉「一列平等の心と心の繋がりをもって」という熱い想いの下に参集した創立同人達には、大きな夢があった。それは、中央で活躍している著名な先輩柳人達に、同人作品欄の中から推薦していただくことだった。

当時の柳誌には次のような選者の名前が載っている。
【前田雀郎・大谷五花村・村田周魚・古谷盈光・相元紋太・

『麻生路郎読本』を辿って

三浦太郎丸・川上三太郎・清水米花・岸本水府・竹田花川洞・西島○丸・越塚正光・麻生路郎・三條東洋樹・大島無冠王」今、目にするだけでもゾクゾクしてくる。

この欄は柳誌の中軸として今も続いており、橘高薫風・東野大八両氏を知ったのもこの欄であった。

昭和五十年から五十二年まで「川柳塔」に掲載された「麻生路郎物語」は大長編の読み物である。その長さから麻生路郎の人となり、全容を、丁寧に語り尽くさずにはられない気持ちも痛い程に伝わってくる。そんな中から忘れてはいけないものを此処に記そうと思う。

◆作句に情熱を失えば、その句作力が眼に見えて低下することは、大家であるからと云って例外ではない。

◆前衛派とか称する人たちの句に消化不良の句が多いのは狭い部屋の中で、ナギナタを振り廻している感が深い。自分にふさわしい武器を早く発見し、自分らしい句を創ることである。

◆川柳は人間をトウヤする手段だ。句の上に自分の悪い点を出してみせる。「君もそうか、おれもだ」と同じように人間同士が胸を打たれる。

昭和37年

麻生路郎の名言「川柳は人間陶冶の詩である」は幾度も目にしていたがいつも陶冶の前で立ち尽くしていた。

調べると【知的・道徳的・美的・技術的諸能力を發展させることによつて、よりよい人間を形成しようとすること】とあり、分かるようで分らない。私流に【優しさや謙虚さ努力を捏ねて一口団子に丸め、一日一個それをいただくながら今日を一生懸命生きること】と解した。もちろん繋ぎ合わせる団子の粉は川柳である。

陶冶の道を突き進む麻生路郎の後を喘ぎながら追いかける私の熱さを鎮めてくれたのは、蔑乃夫人の涼やかさだった。やっと読み終えた時は路郎その人に触れたいと思ひ、自然に「麻生路郎文集」の章へと誘われていた。

◆川柳に於ける作家とその環境との関係といふものは裏と表、鏡に映れる物体そのものと、実物その物との関係の如く密接であります。

◆我々は兎に角、あらゆる方面に対して大きな眼と耳と、鼻と、口と、心とを向けて最大最善の努力を拂つて川柳の爲の向上を期しなければならぬと思ひます。

◆私は川柳に對して多くの悩みがありました。苦しみ抜いた揚句の果てが實生活のうめき聲を川柳の上に盛らうとするところまで發達したのであります。

◆川柳に盛られた内容、川柳に流れてゐる思想は他の作家の頭の中にも流れてゐると思ひます。夏目漱石氏にも、高島米峰氏にも三宅恒方氏にも厨川白村氏にも、

荒畑寒村氏にも、白柳秀湖氏にも、正宗白鳥氏にも發見することは出来ず。
大正12年

生活と対峙し生活句を掘り下げるといふ創作に至った心情を丁寧述べ、著名作家の名前を書き連ねている。私は人間陶冶の道を歩む方々として受け止めた。そしてその中に荒畑寒村とあるのを見て心が震えた。

どんなに厳しい状況にあっても己の信じた道を歩んだ荒畑寒村。昭和四十八年、私は大学紛争の中で何が正しいのか……どう考えれば良いのか分からなくなり、無性に荒畑寒村に逢いたくて茅ヶ崎へ行つた。突然押し掛けた二十歳の娘を、極自然に受け入れてくれたバジャマ姿の寒村氏。お会いした瞬間、地続きの心が伝わってきた。

何を話したのか定かでは無いが、その後迷いや悩みを否定しなくなった。でもあの時、寒村氏は臥せていたのかも知れない……と思うと胸が痛くなる。そして会ったことのない麻生路郎にも同じような心の広さを感じた。

◆《川柳作家十五戒》

①多讀多作せよ、②選者を選べ、③右顧左眄すな、④技巧に駛るな、⑤自惚れは禁物、⑥器用で句作すな、⑦努力を忘れるな、⑧句を棄てよ、⑨句で争へ、⑩句なき作家となるな、⑪識者をおそれよ、⑫自己を掘り下

げよ、⑬生命ある句を創れ、⑭句の非凡を目指せ、⑮一句を遣せ
昭和9年

⑪の識者とは句に於ける先達ではなく「達眼の士は意外のところにある」と書き、⑬の生命ある句を創れには「川柳の芭蕉たれ、良寛たれ、自己の人間陶冶を思わずして何の句ぞ、何の川柳ぞ。句の派を争うはそもそも未である」とあった。良寛さんと宮澤賢治と児童文学の中で大人になった私には、川柳こそが世の中だった。折々にその先へと導いてくれた師は、後藤柳允・工藤寿久・杉野草兵・片柳哲郎であり、川上三太郎へと繋がっている。四十年前、川柳でならもつと良寛さんに近づけるかも知れないとこの道を選んだが、「それで良いんだよ」と言われたような気がした。

◆《葭乃句集「福寿草」序》

葭乃の性格は内剛外柔である。……社会に対する抗議とか公憤とか云つたものを持ち合わさない。……その点すべてに於いて私と対蹠的である。私が彼の女と、私の人生の大半を共に歩む事の出来る根がそこにあるのかも知れない。
昭和30年

◆《婚後五十年解消説》

……お互いに良かったか、どうかを妻の忌憚のない意見を訊くために一たん解消してみたらと考えている。

「麻生路郎読本」を辿って

昭和38年

序の中で「川柳は男性だけのものではない」と明言し、作風の違いをとても大切に思っている。そしてその結婚観は、今の私達よりも深く新鮮である。古びていないということは物事の根本を捉えているからであり、そこには決して揺らぐことのない人間観がある。

この章には新聞柳壇・時事吟・句作と評論：等もあり、熱血漢路郎の筆は社会の諸々に真っ直ぐにものを言い、ちつとも古びていない。

「麻生路郎語録」も味わい深く面白かった。

◆古い句には古いくさみがあり、所謂新しい句には新らしがつているくさみがある。鼻もちならぬ点は同じである。深思すべきである。 大正14年

◆巧い句を作らうとして腐心した結果、文字そのものの、言葉そのものに支配されてしまつて心の扱ひ方を忘れてゐたならば、決して、収穫があらう筈がない。

昭和4年

最後にお二人の作品を読み終え、上気した心地で本を開じた。そして確かめるつもりで「著作解題」と「年譜」を開くと、何とこもまた膨大な物語の章だった。

大正九年『川柳漫画・懷手』の出版から、軍靴の音がし始めた昭和十三年迄は毎年出版している。それも川

柳関連書だけではない。『式辞と演説』や『受験必携・メンタルテスト』、児童書にはイソップ物語・アラビアンナイト・ロビンソン漂流記・日本歴史の話・世界の昔話、更に『これは面白い・私のからだ』というのもあった。

与謝野晶子も野上弥生子も我が子にお話を書き、その他にも：そうそうボブ・デイルンも息子へ書いたものがある。そんな素敵なお父さん達の中に麻生路郎がいた。

また編集発行に関わった雑誌等を含めるとその数は膨大で、とても一人の人間が為し得たとは思えない。そう言えば本書の何処かに「大病さえも川柳に打ち込むことで克服した」とあったが、なる程と頷けた。まるで血と涙を熱く滾らせて走り続ける機関車のように思えた。

この本を辿り終えて強く感じたのは、路郎には少しの嘘も無いということだった。作品にも評論にも選句にも指導にも、それに伴う様々な行動にも、また父としても夫としても、全身全霊を傾けて突き進む熱さと多忙の日々に、とても嘘の入り込む余地などありはしない。

福寿草根に従いそろかしこ

霞乃

奇跡のような麻生路郎の活動と行動は、本人の強靱な精神力と体力は勿論だが福寿草の妻あればこそと思う。時代を越えた出遇いに感謝し、この本を『寒村茶話』と『橘高薫風川柳句集』の間に置こうと思った。



(投句207名)

季節は夏へ向かって
まつしぐら、また暑い
暑いと言いながら熱中
症の心配もしなければ
なりません。

そこで今年は例年に
も増して「梅」の力を借りてみようと思っ
ています。

お友達から頂いた梅干し、自分で作っ
梅ジュースや梅酒など、ずっと昔に祖母
が言っていた生活の知恵を思い出しながら、
夏を乗り切れたらと考えています。

三田市 村田 博
シューベルト聞いて発酵途上です

(評)美しい音楽を聞いて育ったフルー
ツや野菜はとても美味しくなるとか、人
間だってやさしくなれますもの。

羽曳野市 中川ひろ介
一日に何度も妻に叱られる

(評)これはまたお気の毒なこと。でも、

無視されるよりはいい、愛情がまだまだ
たっぷりということです。きつと。

八王子市 川名 洋子
どこみても狐と狸ばかりなり

(評)キツネとタヌキの化かし合い、と
か言いますが、何でも古くなつてくると
クセもきつくなつてくるようです。

大阪府 大川 桃花
三人寄れば共謀罪に問われそう

(評)一強、と言われた現在、数の力で
押し通されてしまいました。いつか来た
道にならぬよう願うばかりです。

芦屋市 黒田 能子
負けて勝つその手もあつたはずですね

(評)あつたはずですね、だから、後悔
を伴うような結果になつてしまったので
しょうか。感情のコントロールの難しさ。

和歌山市 磯部 義雄
旗振りの役目はしたくありません

(評)誰がネコの首に鈴をつけるか、そ
れと似たようなものです。強い目立つ
ようなこと、避けたいですね。

大阪市 寺井 弘子
終活はやがて一人の手まり唄

(評)終活という言葉にもすつかり馴ら
されてしまいました、どうしようもな
い寂しさを感じてしまうことも事実。

大洲市 花岡 順子
ストレスが真ん中辺に良く溜まる

(評)頭の真ん中か、それとも身体の真

ん中か、とにかくストレスというのは
deenと納まつてしまうようです。

大阪府 江島谷勝弘
ギブアップ十四歳にしてやられ

(評)将棋の世界だけでなく、スポー
ツにしても若い若い世代が大活躍です。頼
もしいいと言えそうですけど...

唐津市 坂本 蜂朗
呑兵衛の医師に尋ねる酒の量

(評)自分がお酒を飲むお医者さんは患
者に対して寛大なもの。だからこそ、敢
えて貴方に尋ねているのです。

奈良県 渡辺 富子
一本は有事に残すつもりです

鳥取県 斉尾くにこ
とととと止めて溢れてしまいます

弘前市 高瀬 霜石
わたくしは右寄り妻は左寄り

奈良市 大久保真澄
昭和生まれ質より量を選ぶクセ

紀の川市 楠原 富香
逆転の勝利で倍になる笑顔

明石市 桃谷 和郎
漂着のビンから洩れてくるアロハ

弘前市 稲見 則彦
調律に手間取っているみたいだね

豊中市 水野 黒兎
夏を飲む発泡酒でもビールでも

米子市 八木 千代
かも知れぬ かもねロシアンルーレット

枚方市 海老池 洋

水漏れの音が気になる預金帳

紀の川市 辻内 次根

飲む量によって異なる物分かり

高槻市 松岡 篤

ちよぼちよぼも五月頃から序列出来

島取市 池澤 大鯨

転職を考えているABC

貝塚市 石田ひろ子

行楽の車給油所ラッッシュです

札幌市 三浦 強一

幸せの尺度それぞれ持つて老い

神戸市 上田 和宏

ままごととも試飲サービスいたします

犬山市 金子美千代

大正昭和平成の脚線美

大阪市 石橋 直子

ラジオから「威風堂々」頑張るか

高槻市 富田 保子

逆上がりまだ五輪にはほど遠し

大阪市 栃尾 奏子

どの顔もワタシとおんな恐ろしい

防府市 坂本 加代

飲む量は違っても割り勘で

大阪市 高杉 力

腹八分争いごとは嫌いです

唐津市 仁部 四郎

乾盃の声が揃うとおそろしい

河内長野市 木見谷孝代

長生きを目指し青汁持ち歩く

富田林市 古田 千華

吾輩は北の坊っちゃん拍手好き

池田市 太田 省三

青空へ飛び立つハトに帰る場所

佐賀県 真島久美子

じゃんけんはしないぞ平等は嫌い

箕面市 出口セツ子

それぞれの個性と競いあっている

高槻市 初代 正彦

白旗を揚げぬ貴女に負けました

槻原市 居谷真理子

キッチンのお酒が蒸発して困る

鳥取市 山下 節子

表彰台真ん中の旗どこの国

大阪市 坂 裕之

あなたとは出来が違うと言いたそう

三原市 鴨田 昭紀

お年寄り意外にみんな貯めている

鳥取県 竹信 照彦

タバコ止め酒も止めたら俺も無い

枚方市 小林 わこ

両隣り羨ましいわ何もかも

和歌山市 楠見 章子

若返りの秘薬ただいま準備中

三田市 堀 正和

プリン体ゼロのビールに味がない

香芝市 大内 朝子

ルームシェアしるし付けとく冷蔵庫

弘前市 福士 慕情

二次会は白旗あげて遠慮する

大阪市 平井美智子

ここからは進入禁止です かしこ

高槻市 安田 忠子

悪友と愚痴を零して午前様

塩竈市 木田比呂朗

通学路いま母さんも夏休み

三田市 野口 晶子

余裕ですまだ空がある夢もある

和歌山市 上屋起世子

脳トレで忘れた過去が蘇る

河内長野市 中島 一彌

旗日でも国旗掲揚ぐんと減る

横浜市 菊地 正勝

料理酒がちよっぴり減った妻の留守

松江市 相見 柳歩

統合で運動会が消えた地区

唐津市 山口 高明

順番に嫁くと限らぬ三姉妹

八尾市 宮崎シマ子

正解がない三本の砂時計

鳥取市 前田 楓花

赤ワイン美味しい順に売れました

9月号発表 (7月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳箋に2句

本社 六月旬会

◇六月六日(火)午後一時
ア ウ イ ー ナ 大 阪

梅雨の気配が迫る六日、六月旬会は一三五名(投句一名)の参加で開催された。初出席は平賀国和さん(大阪市)、藤田雪菜さん(尼崎市)、木嶋盛隆さん(奈良県)。句会に先立ち、過日亡くなられた同人平嶋美智子さん(大阪府)、野田栄呼さん(大阪府)のお二人に黙祷を捧げた。

今月のお話は三宅保州さん。題は本社旬会第六話になる「川柳あらかると⑥」。いい川柳作りを心掛けるために、あえて没になる句や、下手になる条件を例示しながら、作句に励んで川柳という知的財産を蓄えようと、力強いお声をくださった。また、川柳塔のお母さんと慕われた小出智子さんの「川柳塔は貴方の力を必要としています」という温かい言葉も紹介された。最後は見事な「紀州黒潮音頭」と川柳塔代替え歌で締め括られた。

月間賞は 木本朱夏さん(和歌山市)
(司会)真理子・志津子(脇取)すみ子・隆彦
(受付)正彦・孝代(清記)憲彦

席題「舌」 坂

あちこちで愛を振りまく二枚舌
二枚舌使うてみたい頑固者
舌二枚持つて気楽に生きている
なめらかな舌をお持ちで良く喋べる
舌の上で転がしている誉め言葉
舌打ちひとつ場が白む罪な音
巻き舌が凄みを効かす河内弁
突然の饒俤に会い舌もつれ
五ツ星のシェフも舌巻く母の味
舌の根も乾かぬうちに駄洒落
饒舌に乗せられ買った紛い物
緊張で舌がもつれて意味不明
二枚舌くらい常識永田町
二枚舌印象操作冨渡る
二枚舌だねと主治医にからかわれ
うっかりと滑らす先是針の山
山の幸届く頃だと舌つづみ
バスツアー新酒の試飲舌鼓
毒舌の友のヘルプがさりげない
答弁のたらいまわしに舌を巻く
味も素気もない舌二枚を持ち歩く
誰とでも話を合わす舌の先
毒舌を笑顔で中和させておく
舌戦も数の力で歪んでる
水ごくり術後のこれが最高だ

裕之 選

両川 無限
酒井 紀華
西出 楓葉
久保田千代
松尾美智代
宇都満知子
島田 誠一
山口弘委智
米澤 俣子
佐々木満作
佐々木満作
山口 光久
澤井 敏治
前田 紀雄
三宅 保州
関 よしみ
大杉 敏夫
大内 朝子
藤田 雪菜
遠山 唯教
青木 公輔
太田扶美代
海老池 洋
宇都満知子
関 よしみ

柔らかい舌がいちばん長生きだ
傷ついた舌は本音を小出しする
失敗すると舌出すくせがある
丁寧語使うと舌を噛む私
妻の愚痴舌打ちなどはせずに聞く
舌よりも目で味わった京料理
閻魔の前で確かめている舌の数
何枚の舌を持つのか政治家よ
苦も楽ものり越えました舌下錠
舌嚙んでキラキラネーム点呼する
流暢な弁舌眠り誘ってる
舌鋒を軽く躲して自己主張

佳

十四歳将棋の世界舌を巻く
嘘ついたことはないのと二枚舌
舌戦に勝って虚しく独り酒
新人の予期せぬ指摘舌を巻く
ばあちゃんの舌が頼りの里の味
人
二枚舌その裏側にある本音
地
聞く耳を持てば毒舌いい薬
天
毒舌も家に帰れば好好爺
軸
あやす気のペロペロバーで孫泣かす

川端 一步
小野 雅美
安田 忠子
能勢 利子
森松まつお
藤井 文代
鈴木いさお
小山 紀乃
長浜 美籠
大久保眞澄
藤原 大子
石田ひろ子
今井万紗子
田中 章子
松岡 篤
安福 和夫
柿花 和夫
山崎 武彦
升成 好
川端 一步

兼題「乱」 古今堂蕉子 選

討ち入りの雲を呼び込む陣太鼓
寝られてエアコン探る寒暖差
子の名前ちよつと乱れていませんか
日本語の乱れというが世代の差
強風にあおられカツラ飛んでゆく
都議選へ小池の乱の二幕目
人身事故ダイヤ乱れてする遅刻
縄暖簾心鎮める夫の乱
肝臓の乱で夜中に救急車
雨の午後こころ乱しにきたメル
適当に乱れた部屋が心地よい
君に会い乱れた始めた脳回路
乱筆は知らぬメールの没個性
夏の恋キラキラ海の乱反射
乱雑な机だけれど俺の城
乱調を悟らせないのもプロの技
置き手紙捜さないでと妻の乱
乱獲が絶滅危機に進むエゴ
座が乱れぬうちに会費は集めとく
もう家事は辞退しますと妻の乱
イケメンにハグされ乗った乱気流
白寿の父再婚すると言ひ出した
乱丁と落丁支え合う夫婦
狂乱の極み日本海にどかん
乱戦になって私に来た出番

加川 靖鬼
丹後屋 肇
上山 堅坊
仁部 四郎
山本加お里
出口セツ子
木藤こみつ
藤原千恵子
山田 耕治
川端 六子
木本 朱夏
水野 黒兎
島田 誠一
油谷 克己
片山かずお
安福 和夫
松尾美智代
宇都満知子
村上 玄也
坂上 淳司
米田 恭昌
小川賀世子
吉村久仁雄
緒方美津子
岩佐ダン吉

スイーツと蕎麦でなだめる妻の乱
日本語の乱れに耳が追いつかぬ
時どきは列を乱してみたくなる
森友に加計乱れつづける内閣府
乱筆にて失礼と書く遺言書
たまゆらの命へ乱舞する蛭
ヘアサロン出たよそ行きへ風の乱
乱雑な胸に生ゴミ燃えへ風
保育園の無策にママの乱
乱れ打ち男が香るばちの牙え
哀しみを乱切りにする日記
糸偏の大事な絆連れかけ
一強の驕りで日本乱れ出す

清水久美子
木嶋 盛隆
久保田千代
小山 紀乃
大久保眞澄
渡辺 富子
川端 六子
新家 完司
内田志津子
村上 直樹
渡辺 富子
北野 哲男
平賀 国和

乱世は右へハンドル切りたがる
乱気流戦場に二人いる卑弥呼
友の字の乱れに心痛める日
終焉へ乱れる事のないうちに
ちらかった部屋に流れる僕の時

柿花 和夫
山岡富美子
藤井 則彦
太田扶美代
松浦 英夫

人
地
天
軸

乱暴な意見が議論深くする
おだやかな湖に小石を投げたひと
臍線りを印象操作するワイフ
乱獲の海で魚の労働歌

吉村久仁雄
山崎 武彦
前田 紀雄

兼題「インチキ」 両川 無限 選

いと怪しクレオパトラのような鼻
インチキで儲けた金はすぐ消える
おれおれ詐欺手口を変えてまたつづく
サイコロに少し仕掛けをしておいた
プレゼントずつとシヤネルと思つてた
格安の旅はブックキングで採める
インチキと付度重ねまだ夫婦
上げ底に騙されました土産物
インチキと誰も言わない美人の湯
欲の目が疑似餌の罠と気付かない
インチキを百回唱え哲学に
宝石が話題になつて指隠す
駅まで五分なんて分譲地のチラシ
インチキのバストと知らずプロポーズ
心地よいだまし芸術かも知れぬ
お金ふやしませんか夕方のベル
サイコロに化ける狸を飼っている
インチキを見破れませんか欲の皮
時蕎麦のインチキ程度なら許す
あの日あの時君は美人に見えました
口車つい乗せられて苦い酒
野心家の途中はどこかききな臭い
インチキがぶかぶか浮いているネット
バゲンの服だと妻はいつも言う
話すほどメッキが剥けていく自慢

清水 英旺
奥村 五月
荒川 鈍甲
森松まつお
今井万紗子
立蔵 信子
村上 直樹
松尾美智代
海老池 洋
升成 好
小野 雅美
柿花 和夫
米澤 俣子
安福 和夫
山田 葉子
山田 耕治
川端 六子
山口 光久
石田 隆彦
田中 章子
能勢 良子
小川賀世子
渡辺 富子
西出 楓楽
伊達 郁夫

バーを出す孫にはいつもグーを出す
欲のない目がいかさまを突き破る

兼題 「久しい」 岩佐タン吉 選

幸運な手相と言われ久しい
久しぶり逢えはあの日の顔になる

遠山 唯敦
大内 朝子
今井万紗子
米澤 俣子
松岡 篤
能勢 良子
山本 進
前 たもつ
坂 裕之
水野 黒兎
加川 靖鬼

ひさびさにポートワインを飲んでみる
二人とて出してはならぬ鶴彬
久し振り互いの老いを笑い合う
久しぶり一に帰ってから遣る気
久し振り治安維持法の足音
老けたなとお互に思う久し振り
久しぶりしゃべってるけど誰だっけ
光失つて久しい妻の顔
会いたくない人がお久しぶりと来た
恒久平和誓つた筈の第九条
会心の呼名ほんまに久しぶり
居酒屋で久々に聞く国訛
久しぶり妻が優しい何かある
ハリハリの鍋で鯨を泳がせる
久しぶりの彼女が矢張り老けはつた
矢車草久しく父母の夢を見ぬ
共謀罪影絵に映る昭和悲話
幾久しく戦争しない国守る
シベリアで果てた伯父さん夢まくら
子と同居久しく出ない筑前煮
いつ出会つてもお久しぶりと言う女将
毛むくじやら和製大関待つてたぞ
学び舎や丸ごと道の駅になる
ずっとずっと反戦叫び生きていく
定年後絶えて久しい朝のチュウウ

足立つな子
上垣キヨミ
若松 雅枝
山本 昌代
鈴木いさお
西出 楓葉
山田 葉子
山本 進
片山かずお
海老池 洋
川端 六次
山口 光久
田中 章子
加川 靖鬼
米田 恭昌
太田扶美代
長川 哲夫
石田 隆彦
安福 和夫
萩原 狸月
米澤 俣子
初代 正彦
清水久美子
渡辺 富子
森松まつお

能勢 利子
大内 朝子
今井万紗子
米澤 俣子
松岡 篤
能勢 良子
山本 進
前 たもつ
坂 裕之
水野 黒兎
加川 靖鬼

久し振り握手で消えるわだかまり
久し振り妻に甘える風邪を引き
久し振りお腹が笑う時価の寿司
幾久しく平和が続きますように
久しぶり硬骨漢の前次官
久久にかさぶた剥がれ空仰ぐ
久しぶり痛い握手で笑い合う
勅語と聞きとるどころを思い出す
久し振りやなあまだ生きとったんかと言われ
仮設から荒れたわが家へ五年振り

能勢 良子
藤田 雪葉
飛永ふりこ
太田扶美代
松尾美智代
大内 朝子
水野 黒兎
今井万紗子
川端 一步
吉岡 修
青木 公輔
柿花 和夫

証明書付けてくるとは要注意
マニフェストほとんどみんな未達成
騙すよりまだダマされる方が楽

佳
結婚指輪にせものそのまま五十年
輝いていたわあの頃のあなた
キリストの骨五万円いかがです
インチキの通じぬ土に鍬を打つ
始めから当たりは抜いておきました

佳
久しぶり同居の母に言われウツ
久しく会えぬ気骨ある男はん
久しぶり電車で本を読む少女
久し振りに聞いた勅語に寒気する
久しぶりの友は飲めなくなつていた

人
骨董屋曰く私も騙された

地
素つぴんになるとだあれも気付かない

地
お久し振り角とれ丸くなつてはる小川賀世子
拉致の子を返せ会いたい抱きしめたい

天
魯山人もピカソも売っている夜店

天
久しい平和と当り前ではないんだよ

天
山田 葉子

軸
インチキを隠す鳥獣戯画の中

軸
原理主義あなたは変らないです

軸
山田 葉子

三宅 保州

三宅 保州

山田 葉子

山岡富美子

山岡富美子

山岡富美子

北野 哲男

北野 哲男

北野 哲男

澤井 敏治
安土 理恵
新家 完司
石田ひろ子
中岡千代美

澤井 敏治
安土 理恵
新家 完司
石田ひろ子
中岡千代美

澤井 敏治
安土 理恵
新家 完司
石田ひろ子
中岡千代美

山岡富美子

山岡富美子

山岡富美子

北野 哲男

北野 哲男

北野 哲男

山岡富美子

山岡富美子

山岡富美子

北野 哲男

北野 哲男

北野 哲男

山岡富美子

山岡富美子

山岡富美子

兼題「ふくれる」 森松まつお 選

ふくらんだ国債孫の孫にしわ
凹め凹めとお腹叩けどなお膨れ
胎動に夢がふくらむマタニティ
念願へじわり膨らむ虎のV
十対零でも風船ふくらまず
ふくれても泣いても妻は愛らしい
喜びが日毎ふくれる岩田帯
どう見ても新婦のお腹ふくれてる
おばあさんと君に言われてふくれてる
サユリストだと言ったら妻はふくれ面
隣の奥さん褒めたぐらいでふくれるな
バラ色の夢がふくらむワンルーム
山膨らむ登山禁止の触れが出る
弾けると愛はもぬけの殻だった
里の香にふくれた荷物野菜便
父さんに似てると言われ横を向く
種蒔いて水遣り夢をふくらまず
皆ローン家も車も入れ歯まで
背中までふくれファスナー上がない
満腹にデザートの余地ありそうだ
期待だけ胸ふくらまず父の日に
発信者不明の噂ふくれてく
一千兆ふくらみ過ぎて割れないか
八十路まだゆめのふくらむカレンダー
一杯の茶潤し心ふくらまず

妻として此処はふれておくト・コロ
積乱雲ことしも夏を連れてくる
二週間目食事作ってくれませんか
朝の気を胸一杯に深呼吸
着ふくれるたちだと妻を慰める
ワンコイン腹がふくれりや文句ない
ふくれたりしないが腹は立つてます
将来に夢膨らます入社式
告白をするポケットがふくらんでいる
妻がふけるとナイター見放題
皮下脂肪内臓脂肪肥満体
ほんわかとふくらてきたな孫の胸

太田扶美代
立蔵 信子
江島谷勝弘
坂上 淳司
吉村久仁雄
中川ひろ介
矢倉 五月
坂 裕之
小島 蘭幸
小島 蘭幸
細川 花門
金川 宣子
新家 完司
山岡富美子
両川 無限
山崎 武彦
内田志津子
川端 一步
村上 直樹
渡辺 富子

兼題「無料」 小島 蘭幸 選

長生きの秘訣笑うのは無料
露天風呂猿からお金取れませんか
無料だと言われ不安になって来る
ポケットティッシュ欲しい時には出合わない
デバ地下で好き嫌いなく試食する
只で土地手に入る手法あったのだ
政治家はたで口利きなどしない
退職後妻から習うクツキンク
送料無料誰かが笑い泣いている
並んでみよう何かもらえるらしい
安心です試飲試食は百貨店
遠慮なくティッシュはいつも2コもらう
無料乗車ババもうれしい肩車
この地球空気無料はいつまでか
魂胆を見抜けず奢られた不覚
ふるりの澄んだ空気と湧き水と
ガリわさび醤油は買ったことがない
微笑んでいるのは擬似餌かも知れぬ
プランコは無料座って漕いでみる
世話人の無料奉仕で続く会
無料だと言うから誤解されている
お接待忘れられない四国旅
ハイキングうまい湧き水のこ褒美
褒められただけで綺麗に花は咲く
御招待手土産を買い服も買う

上垣キヨミ
田中 章子
石田ひろ子
原田すみ子
中川ひろ介
西川ひろし
加島 由一
柿花 和夫
島田 誠一
細川 花門
江島谷勝弘
石田 隆彦
前 たもつ
水野 黒兎
佐々木満作
松尾美智代
大久保真澄
山岡富美子
鴨谷瑠美子
坂 裕之
岩佐ダン吉
太田としお
宇都満知子
山岡富美子
大久保真澄

ドクダミで足るるトイレの臭い消し
 無料体験覗いてみるかケアハウス
 ネイルアートお試し無料だったから
 ただ酒にメルトダウンをした海馬
 寝転べば満点の星無料です
 通販のひとつオマケに負けました
 宍道湖の夕日特等席で見ると
 無料バス元気な時にほしかった
 見学終えれば大ジョッキでビール
 どこまでもヒッチハイクをするあいつ
 お日様にだれも払わぬ電気代
 無料という怪しげなピラ配る

佳

はい来たとはあばの無料保育園
 百歳を過ぎたら三途の川無料
 百号のホームラン飛ぶ無料席
 無料サンブルから始まった地獄行き
 無料バスで乗り優先席に坐わる

人

父母からは来たことのない請求書
 居谷真理子

地

おもしろいこの世観覧料無料
 新家 完司

天

ただ見した遠い記憶の紙芝居
 木本 朱夏

軸

拝観料無料賽銭箱一つ

句会 燦 燦

五月句会を読む 岩 崎 眞里子

珍しい言葉だラップしておこう
 ほほほほは羅漢の顔だ日本人

文 代
和 宏

川柳を志す者は様々なアンテナを駆使しキャッチしたものを
 ストックしている。鮮度を保つようにラップするとは流石！つ
 い最近「ほほほほ」を目にし、辞書を開いたが載っていない。
 PCで検索すると、もう日本人の貌をして根を張っていた。

いじわるな姑が初の当り役

まつお
美智代

明かりがもれる待つててくれる人がいる

何時の時代でも共感を得る嫉妬や意地悪。自分の内なる闇を
 諷め受け止めようとしているからではないだろうか。夜遅く迄
 案じて待つてている人の葛藤もまた、祈りへと繋がっている。

おばあさんはどこ吹く風で生きている

義 蘭 幸

つむじ風の中ときどき父がいる

細かなことは気にしないお婆さん。難事にあつても平静に見
 えるお爺さん。本当はクヨクヨハラハラ…オタオタドキドキ…
 していたのかも知れない。そう考えると、やっぱり凄いな。

合飲の木に生まれ変らん樹木葬

いさお
万紗子

天国に伸びる実のなる木を植える

齢とともに葬送のあり方等も考えてしまふ。私も樹木葬が良
 い。天国へ伸びる実のなる木なら、異界との饗宴も出来そう！
 誕生日90本も吹き消した

一列のスマホ車中に読書の娘

一 簡
寿 之

赤ちゃんのクシャミ牡丹の花揺れた

扶美代

年齢の異なるこの世の素敵な三人。満面の笑顔の翁媼。静け
 さと清々しい存在感の読書娘。そして奇跡の贈り物のような、
 丸ごと心の赤ちゃん。その一挙手一投足を、牡丹の薄い花びら
 の先まで祝福し見守っているように感じた。

わさね

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

きやらぼく川柳会(鳥取)前月号後藤 宏之報

何が好き日本人なら小豆でしょ
押して引く交渉腕の見せどころ
恥を知れ何のことかと聞く世相
青春と現在思えば八十路の差
子の暮らし支える親のこの暮らし
人生は思うがままにならないわ
往きつ戻りつしながら坂を下りていく
春一番勿体付けて二三番
春なのにカイロの温み離せない
初雪で親父作ったタルマ笑み
この豪雪人間力を試すのね
あこ運動しゃべっているか食べている
毎日を我が身励まし生きている
出来た句は自分の評価二割高
バレンタインあの人にチョコ上げそびれ
お日様をお待ちしました布団干す
カフエオレの渦も人待ち顔してる

汪 宏之
令位子
かね子
雨奇
美智子
千代
美穂
恵子
あやこ
美佐子
ひろこ
登美枝
瑞枝
美草
多美子
紀の治

窓越しに芽吹く蕾の花を待つ
ボーリング歳を忘れてつけが来る
川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

春先に毎年悩む猫盛ん
孫は今まっただ中の盛りどき
春色を絵皿に乗せて描く未来
手を擦り貴方美人と言う鏡
叶うなら削って欲しい下っ腹
ゴシゴシとオゾンホールを洗おうか
消しゴムに鉛筆の吐く言葉カス
ゴシゴシと磨いた腕はまだいける
こすつても取れぬ七十五年の垢
ゴシゴシと洗えば鶴になれますか
土壁の家は建たない近未来
土踏まず子孫曾孫に無い遺伝
土俵には神が宿ると信じてる
春陽気せつせと土と日暮れまで
戦争中土のおかげで生きてきた
花はたけ土竜が画く世界地図
お宝は知られぬように土の中
鉢の花ミミズ一緒に植え替える
この土地に馴染み秋刀魚を焼いている
偉そうにしているが何れ土になる
湧き水に梅花藻ゆれて砂おどる
妻の遺影みると涙が湧いてくる
疑惑涌く学園設置法と税
平凡な妻の笑顔で気力涌く
断捨離の最中に湧いてくる未練

恭子 久芽代
三津子
道子
節子
照彦
みち子
たけ代
完子
くにこ
妻子
紀美恵
貴恵
悦子
美美子
龍枝
滋
公恵
美ツ千
紀の治
岳人
重忠
義人
重利

そこだそこの泉湧くツボは
悪知恵が涌くうちはまだ大丈夫
つぶやきが本音となって湧いてくる
待ちかねたように山桜が湧いた
野蒜
石花菜
美知江
芳光

和歌山三幸川柳会 楠見 章子報

生き生きとハンデを一つ持つて生き
定年が無くて生き生き自営業
一歩出る勇気へ春が鼓打つ
オクターブ上げて生き生きした暮らし
スカートを短めにして春を往く
生き生きと生きている人は皆若い
生き生きと弾む歌声通学路
動き出しそう若冲の群鶏画
くちコミのパン屋はババに並ばせる
待つことを止めた女の第一歩
タイムリミットじゃがいの芽が伸びてくる
復興を待つ穏やかな海の色
何時となくとろろ火で煮てる母の味
火の鳥になつて尽きないワンチャンス
めらめらと燃えてくすぶる女偏
水の中火の中ぐくり来た絆
火のこころだけは譲れぬ赤椿
ブロメテウスとなつても守りたい平和
残り火をかき立て明日も生きてやる
極細の赤い糸でも未だ切れず
一本の指で動かす重い腰
方向音痴大病院で此処はどこ
花吹雪浴びる地蔵に笑顔見る

あき子
起世子
幹子
和子
倫子
よしこ
准一
敏照
章子
みつ江
明子
義雄
絹子
次根
知香
俣子
宏夫
保州
千鶴
昇
寛
みね
一雄

八重子 昭枝 美枝子 智三 菜摘 日出男 ひろ子 美羽 当代 富香 純子 碧

則彥報

初枝 則彦 のぶよし 黙人 花匠 柳子 京子 脇 きよし 重虎 小とみ 井蛙 洋子 一呑 つとむ

慕吞風
情舟來坊

芳美
生鈴

ひとし
吹喜

真由美 冬道

龍隆
馬樹

ふさぎ
花 峯

一花

和香子

お報

半舞
錢夢

いさお かりん

滿廣
作子

芳香
ふりこ

公平

選

三津子
純子

搔之助 知香

紗季

和子

ひろ介
よしみ

✓

(6月号から)

選

眞次
澄根

辰和
作夫

陽子

万紗子

奏子
さち子

雅美

冴えわたる月証人にプロポーズ
 鐘の音は朝の空気をふるわせて
 冴え渡る故里の空星が降る
 ユニクロもモデル着たら冴えて見え
 小兵でも幕がとまるワザの冴え
 生中を二杯飲んだら冴えてくる
 酒二合頭も冴えて歌も出る
 グラウンド彼を見つめるだけの恋
 純情と言われ顔を赤くする
 純情の槍で男の胸を刺す
 ハワイでの訳あい拳式いかがです
 純情な友おさきにと逝きはった
 色褪せた写真が語る純情さ
 二番目のボタン欲しいと云えぬまま
 純情を返して東京のネオン
 初キッス震えていたね二人とも
 突き進む発言だったブーイング
 女系の家やと誕生男の子
 画のような富士にとよめくバスツアー
 平和呆け北の兵器にとよめかず
 どよめきの輪の中覚めているひとり
 先導され歩く勇姿にあるオーラ
 花筏すいすい大川まで続く
 荒波もすいすい泳ぐ出世魚
 花筏避けてすいすいあめんぼう
 すいすいと出世頭のヒラメの目

(矢)五月
 直子
 克己
 雅美
 俊雄
 勝弘
 一步
 安代
 満寿恵
 重信
 ひろ介
 美世子
 日の出
 志津子
 ゆみ子
 萌
 ばっは
 福貴子
 妙子
 里子
 昌紀
 美籠
 シマ子
 宏造
 満知子
 隆昭

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

汎美

樹齡不詳平和な里を大桜
 桜咲くカープの勝を折つて
 君想う深さの中にいる桜
 感涙のおしん横綱さくら鯛
 部屋に鍵かけて思春期通過中
 棚五段柳誌が語る僕の部屋
 相撲部屋やぐら太鼓も大暴れ
 母と子の部屋へ童話が置いてある
 真夜中に風がブランコそつと押す
 鞆に父と二人で遊んだ日
 思い出はブランコゆらなす君が居た
 老う街へブランコ遊びの声光る
 母を待つ父を待つブランコが一つ
 ブランコにあらがれている車椅子
 ブランコから落ちて目が覚めました
 風に乗る蜘蛛のブランコ五メートル
 トランプの漕ぐブランコに乗せられる
 空中ブランコ危ういラブゲーム
 上下左右に揺れる人生のブランコ
 特売の残り一個が買った午後
 道草を楽しみながら卒寿坂
 生真面目の角度を少し変えてみる
 青空に背中押されたリスタート
 おはようとしさんはるにでてるよ

川柳塔なら
 大久保眞澄報
 (小)陽

淑子
 笹舟
 蘭幸
 敬子
 比呂子
 栄香
 節生
 鬼焼
 半徳
 一徳
 規代
 慶子
 笑子
 幸子
 千代美
 弘子
 輝恵
 寛
 明紀
 歩美
 栄恵
 厚子
 史子
 陽

ミサイルに逃げまどう夢みてしまふ
 峰打ちをされて夢から覚めている
 夢を追う時代もあった若き日よ
 日本海の隆起夢見る拉致の人
 趣味多彩八十路の妻も夢を抱く
 ポケットの夢に時々館をやる
 新緑に夢のプリズムあふれてる
 夢見れば人生なんてこわくない
 唇があと2センチで目が覚める
 かけ玉子男ひとりの雨つづき
 托卵の性持つ鳥の親心
 受精卵へいのちの祈り深くなる
 大空へ飛び立つ夢を抱く卵
 まだ卵ねと言われて以来まだ卵
 ばかばかの便座で秀句捻り出す
 春うらら猫の欠伸を見て欠伸
 サンルーム漕ぐ舟三途渡るかも
 希むならひ孫と庭で遊びたい
 開発の裏で地球は泣かされる
 逆らうた息子に腰を齧られる
 大人への羽繕いする反抗期
 逆らわず風は来るよと懐手
 逆風に抗う父の面構え
 情念に棹立ててから生きずらい
 逆波も男波も越えてきた阿吽
 逆らった親の言葉で子を叱る

川柳ふもん吟社(鳥取)夏目
 一粹報

勝弘
 完次
 美代子
 堅坊
 恭昌
 柁子
 ふりこ
 萌子
 盛隆
 弥生
 文聡
 富子
 恵美子
 眞澄
 紀雄
 薫
 和夫
 たか子
 よう子
 甚之市
 貫一
 崇明
 成子
 理恵
 良一
 史郎

断末魔言いたい事がある喘ぎ

攻撃の活字目にして胸痛む

シャッター街政治の付けが降りて来た

飢餓の子に分けてやりたい皮下脂肪

恋かしら悶えています春の蝶

シャッターを下げて昭和史また消える

はち切れるはずじゃなかった試着室

共謀罪個人の自由監視され

シャッターを開けて返せよ拉致の人

喘ぎつつ登った九十九折だった

銭をこす人は親しく見当らぬ

ぐすものは気持よく受け感謝する

八十路の春花を咲かせて夢無限

残業もその内死語になるのかな

シャッターに夜逃げしますと書いてない

シャッターは絶対開けぬ核の箱

細々とシャッター下ろす小商い

シャッターに落書き被災地の怒り

シャッターが栄枯盛衰物語

跡継ぎがなくてシャッター閉めたまま

スクープかシャッター音が鳴り止まぬ

油物お好きですかと主治医聞く

皮下脂肪たっぷりついて燃えぬまま

メス研いで脂肪を神の手がさばく

喘いだら首輪がギュッと締まるだけ

桜咲く喘ぐ暮らしも知らず咲く

日本食世界の舌がまた唸り

自信作落とす選者が恨めしい

貧しさが脂肪と小銭貯めていた

政治家は喘ぐことなく嘘を吐く

ふみか

礼子

拓庵

一瑤

とも湖

八千代

無限

美和子

美智子

三千代

清信

美恵子

千代

搔之助

秋月

金祥

賢悟

茶人

回春子

凱柳

真理子

天翔

幸子

蟹郎

加代子

妻女子

雅女

昌鼓

善平

茂登子

ヒヨ鳥と蝶に喘いでいる青菜

冬眠でためた脂肪が重過ぎる

腹つづみ打つには脂肪役に立つ

終章のノートに父の喘ぎ知る

方言「ぐす」は「呉れる」の意味

南大阪川柳会

津守

柳伸報

廻ってる頭の軸も油切れ

お局を軸に女子会みぎひだり

三代父軸にして和を保つ

不安な世座標軸には鶴彬

いただきますごちそうさまと感謝する

にこつとする目と目が合った今日は晴

頂きます箸取る前に手を合わし

お悔みの言葉は誰も口ごもる

挨拶をかわした方の笑顔見る

挨拶から徐徐に親しくなりました

挨拶は抜きにしましうますビール

挨拶をすると子供が避けていく

さわやかな挨拶人の輪にとける

あいさつして人間らしい顔になり

守るもの減ると老化が加速する

闘病の焦り見守る千羽鶴

自尊心札束積まれ守れない

守るって言うた夫を今看護

幸せを守る笑顔を絶やさない

サクラ咲きやつと我が家に灯が点る

換気扇我が家のくらし吐いている

家で飲む酒が旨いといよいよする

哲子

房江

振作

一粹

あさ子

篤

志華子

国和

ルイ子

修

シマ子

柳伸

柳右子

直子

一步

実

更紗

たもつ

栄子

弘子

弘子

弘委智

克己

楓楽

恭昌

あや子

俊雄

家訓その一まいにち酒を飲めとあり

ローン完済しかし転がるラムネ玉

指まるめオッケーなのか金なのか

労わりを詰めた滴は丸くなる

傘寿でも過ぎたら丸くなるつもり

何て日だ丸く膨れたフグばかり

塩少し舐めると酒がまるくなる

京都塔の会

山田

葉子報

月から見た地球歪んでいませんか

円卓でキャッチボールをする言葉

カメラ向けポーズ取ってる一歳児

幸せを少し残して老い支度

道端の一元玉はそのまんま

なんでってミスティアスの君が好き

鏡見てオバキユウしてる自分いる

神参り十円だけの願い掛け

地下街の入った場所に戻れない

外で飲むビールはなんで旨いんだろ

入学式おすましボーズ花の下

夢だけは捨てまい先細りだけれど

明日という夢大切に生き延びる

うなずいてささいれば円満居場所ある

円顔のいけずなんとも似合わない

いつの間に僕の保険が倍にされ

高額サギ被害者どんな人だろう

夢ばかり追った男について行く

生きている限りは夢の火種抱く

永久の平和は夢となる世界

敏治

昌紀

裕子

郁夫

勝弘

東風

いさお

牛延

哲子

弥生

昭

福子

ふりこ

弘子

元一

かずお

洋志

満子

求芽

紀乃

文代

見清

義昭

葉子

宏子

保子

泰夫

守長
啓一

桂子勝

美佐子
孚彦

信久
男子

純子
代子

柳童

雅美

まみ子

三樹夫
週行

美千代

四郎報

四高
郎明

節 蜂 子 朗

實

し
み
報
隆
充

—

— 109 —

まだ夢を足せるか月に問うてみる
この路地で肩触れたのはその角
踏まれても路傍の石は笑わねば
棚の隅ボトル煤けて独り言

亡母はもう路傍の花になりました
大阪ヘトネル過疎がつながった
人の輪の温さでわたしの樹が育ち
税金を吞んでおります酒タバコ

大胆と緻密の器で事を処理
器から溢れ出ているのは驕り
人格を備えあるくなる器

恋の鞘当て石器時代も現代も
奥深く両手広げる師の器
人間の器に愛のてんこ盛り

診察で医師がだまって目を見つめ
路線変更今日からワタシ網タイツ
半世紀歴史を刻む夫婦碗

錆おとすバズルはやつぱ難しい
あの親の子なら娘こんなもん
ぎりぎりの岐路に立つ日の白い線

ささやきの小径で春の恋成就
感性の起伏囁きは夜明け

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

神棚はあるが信用していない
継ぎはぎのアライイ実は全部嘘
仲良しに内緒の貸しが実はある
しずかにネ実は今耳そうじちゅう
実はこの話したくてお邪魔する

常男
伸雄

田鶴子
正治

慶子
澄子

清子
仁

壽峰
高鷲

武人
恵

一文
一子

奏子
寿之

アキ
蕉子

よしみ
欣之
森子

茶子報

ミスしても実はと理由捏ち上げ
惚けたふり実は本音を言わす為
ホップステップジャンプの先は混んでいた

立見席どころかガラン映画館
連休の混みあう場所に背を向ける
連休は車が混むと知っている

傷ついたジユゴンが国を訴える
泣きながら訴えながら食べている
赤い脣を消えぬる拉致家族

淋しさを訴えていた人の灯
首縦に振り訴えてから苦勞
訴える事ではないが農未来

戦争嫌いだ守るだけでは生きられん
自尊心差をつけないと気がすまん
恙無く流れる果樹園のラジオ

声に恋して憧れて聞くラジオ
ドライブで一人寂しくラジオ聞く
梨小屋に二十四時間鳴るラジオ

キノコ狩り携帯ラジオ歌いだし
真夜中に壊れたラジオ歌いだす
延延とラジオ体操操引き継がれ

ブラザ川柳(大阪)

梶原

見舞客勝手に埋めるスケジュール
腕を組む相合傘の肩濡れて
春雨に濡れて二次会千鳥足
相合傘優しい方を濡らす雨
ボン菓子に群がる仔らを親庇い

裕恒

美ツ千
照彦

和子
螢

小鹿
京

綾子
振作

みさ子
満

妻満
実満

蟹郎
盛桜

すみれ
草文

孔美子
重忠
茶子
ゆり子

弘光報

五月晴れトラがコイ喰う三連戦
山の神が隠し持つて不発弾
爆弾を弄り脅す北のドン

止め刺す妻の小言が導火線
お前もかとうとう癌にすり寄られ
御迎えは遠くにあるかすぐそこか

オレオレは取るもの取ってスタコラと
上上のできばえだよと桶穂手に

五月晴山は笑うし風遊ぶ
家の灯をめざして帰る伝書鳩
絵手紙から優しさもれる桃の花

都合よく全部使って逝かかった
汚れなき遊び疲れた児の寝顔
反抗期ばらばらひげが生えてきた

首位の座に尻がこそばいタイガース
飲み会はどうな都合もつけ参加
住み馴れた土地に今年も種を蒔く

七転八起受け身がうまくなりました
パラパラを踊って二キロダイエット
遊んでも遊ばなくても腹がへる

パラパラと外れ馬券の花吹雪

五月晴れトラがコイ喰う三連戦
山の神が隠し持つて不発弾
爆弾を弄り脅す北のドン

止め刺す妻の小言が導火線
お前もかとうとう癌にすり寄られ
御迎えは遠くにあるかすぐそこか
オレオレは取るもの取ってスタコラと
上上のできばえだよと桶穂手に

修司
克三

清乃
良雄

和代
弘光

五月
初音報

靖鬼
柳明

英坊
健二

富夫
修平

初音
晶子

紀華
こみつ

純
りこ
祐康
紀恵
雪菜
洋子
利子
花子
章子

家に来て生の夫を見て下さい
家内からゴミの分別まかされる
ためらつてうちに逃がした運いくつ
懐の都合と言えぬ見栄つ張り
呑み会へ誰も都合は聞きに来ぬ
風みどりまだまだ生きるにぎりめし
遊びたい気持に揺らぐ塾カバン
母ちゃんじゃないとまじらない家族
住んではるのかと覗かれるわが家
カーネーション持ち五月の墓参り
重なつた誘いは美味しい方にする
古民家にイノシシ親子居候
やわらかに私を変えるのはあなた

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

春競う路傍の花の底から
失言じゃない本心を言つたまで
還暦も古稀も実感無くて過ぎ
さばさばだ免許返納歩く日々
母からのちくりと痛い小言聞く
思い切り泣いて見上げた空の青
それからの痛み沁みてくるのです
そのうちにきつといい事ある予感
若虎が前泳ぐ鯉つかまえた
定年の実感電話鳴らぬ日日
美しい記憶もあつて生きている
世の中をうまく泳げず窓際に
巢立つ朝笑顔へ白がよく映える
結論はまだふわふわと雲流れ

菊江 ひろ介 葉子 歌留多 正和 ヨシエ 美籠 かずお 耕治 宏造 キヨミ 哲夫 ひとみ 伯備 健彦 一徳 みよし 敦子 千賀子 わこ 光久 邦男 浩司 千代 じろう 弘子 能子

くよくよしなで花はちゃんと咲く
役立たぬ語句が脳からあふれそう
藤の房揺れて確かに風五月
腐れ縁切つてさばさば死後離婚
最後には笑つてやると生きている
靴数えお八つの用意祖母がいて
急ぐ気と縫れる足が貶しい
実感と違う数値が出る景気
でこばこがあつてじゃがいもさつまいも
実感がわかないひよいと雲にのる
二番目に好きと言われて思い切る
ガンですと言われ余命を考える
政界を遊泳してる不埒者
生かされる限りはどこ迄も泳ぐ
黄砂にもめげずに泳ぐこいのほり
携帯の見えぬ手綱に縛られる
認知症の母に抱かせるカーネーション
肩の荷をおろしさばさばした両手
やるだけはやつた自信をまかす天

はびきの市民川柳会(大阪) 永田 章司報

傷ついた分だけ強くなつた芯
母という椅子に座つてウン十年
芯のない人と言わせてマイペース
障害のベビーの椅子に欲しい愛
失恋は芯を抜かれた様なもの
誘いには乗らうあなたに掛けてみる
乗客いない平成の縄電車
窓際のソファは猫の指定席

野鶴 正彦 哲子 盛夫 野薫 靖夫 昭九朗 敏夫 紀乃 富次 輝彦 秋果 迪 章子 キヨミ 美津子 天津子 嘉代子 章司報

塩漬桜芯まで開きいい香り
首相には一本芯が通らない
廃校の椅子は寂しく待っている
どん底の経験芯をぶれさせず
戦争の悲劇体の芯に生き
芯のある奴と見込まれ今左遷
仲人の口に乗つたが難破船
今年から花見に椅子を持参する
戦争はいや殺す相手を選ばない
インフルにかかる自由のある暮らし
聞き上手話し上手に乗せられて
やさしいが芯はとつてもきつい母
組体操大きい僕が芯になる
芯になる人で句会を支えてる
原発販売経営の芯狂わせる
介護する老母に優しい車椅子
荒波が男の芯を太くする
芯のない男に行く手阻まれる
昇進の椅子をねらつて新入社
体重計乗らぬ不安と乗る不安
芯棒が傾き出した日本国
向日葵の芯に聞きたい事がある
ロイカルの訛楽しいワンカップ
チクリツと尖つた芯が物申す
終着駅おりて優しい風に乗る
座敷より椅子席人気宴席も

みつこ フジ 大子 朋子 アヤ子 ダン吉 遠野 シルク 塩漬桜 首相 廃校 どん底 戦争 仲人 今年 戦争 インフル 聞き上手 やさしい 組体操 芯になる 原発販売 介護する 荒波が 芯のない 昇進の 体重計 芯棒が 向日葵 ロイカル チクリツ 終着駅 座敷より

川柳大阪

山崎

珠生報

ひろ介 真 雄太 ちづる 泰子 久仁子 安男 かつ美 美喜 冬のト 登志子 ヨシ枝 喜久子 さくら 洋一 壽峰 美籠 一徳 高鷲 いさお 美代子 欣之 光男 久仁雄 章司 人間が いちばん残酷です テロ 満知子

桜の木残る花びらがんばれよ
一粒の米も残さぬ戦中派

次世代に汚れた地球譲れない
無口でも酒癖だけは親譲り

遺言書全て譲る」と書いてある
譲り合うところで丸く輪を保つ

譲られた席で温もりまでもらう
とっておき皮下脂肪です譲ります

北の国断固譲らぬ核保有
食い違う歴史認識譲れない

こじ開けて落とすし所のない汚染
森友の秘密このまま隠すのか

コスプレにはまっています秘密です
あの人と秘密共有ウフフのフ

こんなことお前と俺の秘密やで
父親に秘密で進む娘の婚儀

準備万端秘密の鳩はポケットに
よくはやる屋台のおやじ聞き上手

負け犬の遠吠え聞いている屋台
おみごとな子供歌舞伎が客を呼ぶ

したたかに花を持たせて実を取り
大臣は後味悪い答弁を

長柳会(大阪)

辻村

ヒ口報

ハイツツチ恋らしきもの弾む音
実家なく偲ぶは天気予報だけ

先立たれ夜毎深まる孤独感
食べて寝てどうにもならぬ居候

母鴨に続けて五羽の初泳ぎ

ひろし

朝子

福貴子

武臣

温子

賢子

五月

芳香

紀雄

まつお

志津子

美世子

和弘

珠生

勝弘

ヒビ割れた指で活躍母の味
原因はほんの小さな段差から

来世まで供をするとは言わぬ妻
野心などさらさらないとジャンボくじ

ボンヤリと曇りガラスの内が好き
胸騒ぎ無言の妻の勘怖し

惚れっばい君の笑顔に勘違い
逆転の構想漏れて返り討ち

木漏れ日は愛の光の矢のようだ
内緒でも孫の口からすぐ漏れる

無理強いに怒り爆発人の常
沈黙に恋の終りを予感する

百均で孫に爆買いさせてやる
爆発のサインは妻の丁寧語

ボン菓子子の爆発うれし昭和の子
天国の名簿私を記載漏れ

人柄が仏の様に慕われる
百歳を越えてはあちゃん仏顔

鈴一つ叩き饅頭盗み食い
福福しい仏のような旦那様

仏壇に愚痴も感謝も供えてる
豊中もくせい川柳会(大阪)初代

走ったり躍いたりの風のみち
食後すぐケーキあんな妻の腹

喧嘩してやつと熟していく夫婦
やつと掴んだ平和と憲法だ

妻は謎やつと解けたら次の謎
娘たちオヤジギャグにはあきれ顔

ふみ

和子

和代

靖博

旅人

純風

光弘

明信

明一

マサ

辰男

福子

正博

孝代

正美

生きてみるあとは野となれ山となれ
野に下つても頭を下げぬ元官吏

やつときたメールの返事「元氣だよ」
もうゴールいやいやまだと株式欄

まだ生きる原稿紙買っ昼下がり
お出かけの多さあきれるカレンダー

営業のカバンに笑顔詰めて出る
娘と嫁の思いを詰めた花が来る

容姿から悪女の候補外される
カーネーション母は母の日と気付く

転た寝の姿ばやけるすり硝子
句読点たまに打たぬとだらけます

子の帰省野菜嫌いが振りまわす
肩叩きしてもらいつつ亡母のこと

デイサービス笑顔がよくて人気者
あきれるほど情報飛ぶこの地球

ウォーキングしても近道してしまう
声美人と電話のさ中つくしゃみ

思い出の野菊探しに里の旅
たんばは野に咲いてこそ生きてくる

任せると父が張り切る台所
水平線渾に燃える二人の掌

やつと手に入れた自由に叛かれる
空っぽの弁当箱で知る笑顔

川柳塔さかい(大阪)

冷水を浴びて男は立ちあがる
五感まだ喜怒哀楽の水を呑む

日本の水はおいしい胸を張り

健二

美津子

多美子

武彦

美佐子

歌留多

きらり

雅美

久子

千鶴子

満子

見清

宏子

正彦

耕治

敏治

美智代

美龍

葉子

肇

真理子

ゆみ子

若芽

さくら

儉約の母は決して水買わず

誘い水のらぬ男に意地がある

水こくり君が好きだとさあ言おう

頼むからするとい言葉丸くして

するどさは無縁のんびり八十路坂

鋭いと言われた人の春霞

ゲルニカに込めた鋭い反戦歌

カミソリの頭脳と呼ばれ恐れられ

ひと舐めて酒の良し悪しなら判る

虎フアンするといヤジに温か味

駒持で指す手するとい棋少年

何よりもするとい勘にかけてみる

母ちゃんの鋭い勘に勝目ない

決断の早さ男のするとい目

治安法下鋭く生きた鶴彬

薬では効かぬ痛みがひとつある

名医にも痛むハートは治せない

背の辺りをチクチクと刺す差別の目

待ち合いで痛みかかえてよく喋り

年上よあなたの痛み取りましょう

被災地の痛み解らぬ政治家よ

生気ある蛙だ妙なばり声

世界観変わる話に胃がいたむ

能天気するどく突くも知らん顔

一度でよいするとい勘と言われたい

尖ってすぐに目につく槍ヶ岳

たおやかに鋭いスピン真央の舞

家中の咳を知ってる母の耳

鋭さが心許せる友を得ず

雅美

唯教

富夫

清晋

誠一

みつ江

玄也

和夫

憲彦

妙子

佳子

清子

五月

敏治

好子

志津子

淳司

世紀子

ばっは

舞夢

健吾

ヨシ枝

素頓馬

大造

としお

憲子

俣子

時雄

野良猫のジロリ命の炎なり

あかつき川柳会(大阪) 山本

高齡化進む社会を支えあい

内閣の嘘を鵜呑みにするメディア

九条は宝石箱に入れたるある

国策が尽きないように目を凝らす

九条を守りへし折る安倍の鼻

彬の詩五臓六腑に響くもの

恋の夢見ぬまま散った兵の墓

反戦歌彬の命尽きるとも

拷問死多喜二よ恋をしましたか

まず北へ行つてくたさいアベ総理

労働歌の響き五月の空翔ける

共謀罪軌道はずして迷走中

共謀罪軌道はずして迷走中

北と米似た者同士せめぎあう

新緑が萌えて明日を響かせる

生きるとや浮世の命燃え尽きる

命カネ同時に尽きるのが理想

星の降る宇宙無限の宝箱

耳当てて樹木医の聴く水の音

晩鐘の響き心の棘を抜く

胸奥に響くひと言葉残し逝く

香港の夜慕情偲んでケープルに

失恋に追い風きつい坂の町

ほどのいい闇がくすぐる恋ごころ

いま一番恋しい人はやはり母

恋は曲者人生までも狂わせる

みつこ

昌代報

生枝

鈍甲

廣子

久美子

(松)英夫

ひろ子

和子

ふさゑ

みつ江

勝弘

いさお

義泰

郁子

一文

寿子

たもつ

篤

壽峰

穂夫

祥昭

紀乃

福貴子

ばっは

俊雄

喜代志

珠子

母さんの味に尽きます里帰り

宝石など無縁な母の背に育つ

方言の響きストレス消してくれ

二人の子育て宝石知らぬ妻

絹ごしを下さい奥歯膿んでます

あきれたる記憶の壺の水が尽き

冒険心尽きることなく若くいる

酒呻るなんとわびしい響きだろう

ルビー婚楽し恥ずかしリスペクト

川柳塔わかやま

川上

まっ新な心に届く旨い水

新しい記憶いつまで持つやろか

白地図にしたたるような夢を盛る

新しい一歩踏み出す今朝の顔

新しい風の出会いを見逃さぬ

改革のあとがみえない新予算

花いかだ流れに委ね万華鏡

浮き上がるまでは待っていてあげましょう

浮き草のようだが根つこもっている

出発に皆浮き浮きのバス旅行

浮いた噂大好きですと軽い口

指切りをしてから浮いている小指

毛筆で初めて書いたあのねのね

あのねのね僕は昔は知らなんだ

洗濯機過去をくるくるあのねのね

あのねの先言えずに胸に秘めた私語

どうしよう聞いてしまったあのねのね

大臣の陰で囁くマスキマン

満知子

恵美子

直子

堅坊

信二

和雄

朝子

哲男

鮎子

大輪報

小雪

知香

徑子

よしこ

富美子

准一

紀久子

夕胡

ほのか

秀子

京子

大輪

まさみ

克子

紀子

寿子

なる子

日出男

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

腰曲げて褒められたのは庭の松
へそ曲がり信念いつも真つすぐだ
母さんの意見素直にきけないよ
曲がり道昔の乙女目の前に
枝振りの曲がったとこに自負がある
曲がりたい訳を胡瓜に聞いてみる
ボンコツの目覚めで床が波をうつ
生卵飲んで反乱の企み
ラーメンがメタボバランスまた乱す
振り向いて振り向かないで乱れ髪
太陽が乱れだすまで生きていよう
鳥たちの空にひろげるスキャンダル
よく見りや怖い一糸乱れぬ軍の列
雷のせいで乱れる心拍数
大行進群れ群れの息北朝鮮
群れ果立ち独り青狼月に吠え
大臣の椅子に群がるアリの群れ
タンポポの綿毛群れから旅に出る
瀬戸際で尺取虫が首を振る
服装の変化で心読みとられ
変わらないそれが若さの秘訣かな
変化する誰にも言えぬ胸の内
変化には良いと思いのふたつだけ
幸せの色も変化をくり返す
また道をまちがえたかなきてますよ
間違いを正せば波が押し寄せる
間違ひも笑ってなんぼ生きるコツ
エンマ様の間違ひだった戻って来た

草庵 注湖 紗季 輝山 雪代 弘充 ゆき 芳山 青帆 ひふみ 涼子 孝子 みちを 哲子 幸子 瑞人 堂太 知恵子 たけし あきら 俊代 邦代 柳歩 美智子 朋子 久絵 とも子 文子

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

承らえて命の行方五里霧中
五合炊き今じゃ三合二日おき
天高く五月の空に呱呱の声
御婚約ニュース心は五月晴れ
スタミナはアフター五にとつておく
五線譜に止まる雀の春の詩
五月には虎の威勢が天を突く
ボタンひとつでうどんな核も出てきます
ごめんねと言えはするりと解けた糸
簡単な複雑にする人の口
岬の火叫ぶと孤独跳ね返す
春の鬱突如叫んでみたくなる
叫んだらほとりと落ちてきた鱗
遠吠えの犬の気持がよくわかる
腑甲斐無い自分に叫び喝入れる
やる気スイッチまだ入らない老いの昼
歯車が時には軋む女坂
その先は国破れ果て山河なし
しがらみに縛られ今日もがいてる
生きてきた歩幅信じて坂上がある
水溜まり素通り出来ぬ孫のくつ
夢ばかり追ってこらで一休み
三段腹邪魔で切れない足の爪
追い風を待って大きな夢を追う
びちびちの眞子さまと彼はほえまし

富子 敬子 満作 舞夢 恭昌 善昭 眞澄 眞楽 照子 弘子 良子 義 理恵 桃花 希久子 志華子 和夫 げんえい 集一 すみ子 日の出 蕉子 捷也 紀子

岩美川柳会(鳥取) 山下 節子報 完司

いい女房影まで俺について来た
児の使い半分きいて走りだす
その時は豆絞りにて踊ります
半馬身遅れてゴール散る馬券
子のために鬼子母神でもなります
手の豆の痛さふつとぶ傘おどり
キャベツ畑遊ぶ蝶追う農夫の目
いろいろの豆が年中膳飾る
豆粒の番付けさがす虫メガネ
道半ばこのまんまでは終れない
初夏の風遊び心を誘います
川柳の鬼が普通の顔してる
鬼の面たんにすにしまい介護した
今日は何の日小豆ご飯が炊いてある
崖つ縁まで遊ばせる勝負ごと
極楽で遊んでくると逝った友
酒二合ひとときの夢遊ばせる
手の豆が父の生き様物語り
辞書を引くよりも祖父父母の豆知識
豆菓子も豆腐も好きで日本人

清信 重忠 茶子 公子 天一 翔平 美恵子 蟹郎 たぬ 菖子 幸安 敏子 雅子 弘子 振作 彰夫 真理子 一粹 節子

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

トランプの口にガムテープを貼ろう
口車に乗せられて見た生き地獄
口から出てしまったの戻せない
ほら吹きが口は小さいおちよば口
儲け口なにかないかと考える
足痛く達者な口を持てあまし
回覧に噂も入れて良い仲間
ほかからかな母の回りよく笑う

萩江 雄大 智恵子 けいこ 日出子 瑞子 重忠 石花菜 萩江

突然の指名ろれつが回らない
お歳暮がのしを外して遠回り
一周忌くるくる回る走馬灯
見回せば老々介護花盛り

北鮮の風は涼しさ越えている
四季問わず国の金庫はクールビズ
おはようの音が涼しい散歩道
遅刻魔はつも涼しい顔で来る

涼しい眼その眼の中にいるわたし
失態を涼しい顔でする閣僚
子供の日大山雪が涼くれた
ゆつくりと話そうとくろを解いてから

ぐちぐちとくろのような愚痴を聞く
風の機嫌悪く時にはとくろ巻く
玄関でとくろ巻いてる午前様
一人ではさびしいのかなとくろ巻き

流れたりとくろ巻いたり花筏
川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

背くらべて婆に勝ったと孫背伸び
この山を越せば幸せ来そうです
峠越し食欲出たが呆けも出た
人生の九回裏が来てしまいい

買い物もゲーム感覚指先で
よかつたね山を越したと医者目の目が
資金繰り越して会社は生き残り
取り返しつかぬゲームをするボタン

越すまでは悪戦苦闘うそみたい
犯罪をゲーム感覚恐ろしい

由紀子

茂夫

妻子

節子

宣子

次男

紀美恵

美ツ千

美知江

祐子

恭子

鬼一

風露

龍枝

野蒜

玲子

照彦

薫報

昭好

泰子

風

敬子

正太郎

やすの

みちる

亜成

笑子

勇太郎

ゲームセンター脳活はげむシニア軍
嬉しくて今日は一日何もせず
女房と出かけると云うバツゲーム

川柳さんだ(兵庫)

田中

章子報

四人いる親の戒名皆忘れ
戒名はフルネームだと言うてある
御国から院号もらう戦没者

挑戦をしたトップになったトラ
チャレンジも老いの楽しみ若返る
騒ぐ血が趣味に挑戦続けさせ

逆上がりいつか出来るかとランドセル
何にでも挑戦したい向う見ず
安住の古巣に戻りたいツバメ

羽田から花嫁ひとり里帰り
命継ぐために落ち葉は土になる
ネクタイを外し自分を取り戻す

捨てゼリフ吐いて戻れぬ里の土
冬物をしまった途端寒戻る
赤ちゃんに戻った母の車椅子

いつ戻る首長くして還付金
歯が抜けて上手になったフランス語
地球儀ぐるりイブモンタンに逢いに行く

フランスなら案内すると友のホラ
旅先でみごと射とめたバリジエンヌ
ボンジュールだけで通したバスポート

フランスで生まれたわたし三田つ子
どんどん成績上げた褒め言葉
引き出しに診察券が増えていく

あや乃

克茂

薫

健二

順子

つな子

正和

一子

堅坊

利子

迪

恭子

徹

好文

雅尚

朝子

ひろ介

俊昭

隆

博

武彦

美智子

真由

宣子

花門

光久

祐康

どんどんと月日が暦駆け抜ける
どんどんと昼の花火は音ばかり
うれしいな夢で貴方に会いました

スマホ繰る人に挟まれ文庫本
古稀の坂越えた憲法錆びてきた
今日旗日散歩コースに旗はなし

左手を添えて伝える思いやり
さよならのむこうに虹も見えてきた
消化せぬ言葉が夜を睡らせぬ

傷ついても回り道する縄のれん
交差点明日に夢持つ人の群れ

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

日に当たり骨を丈夫に気がついた
桜見て湯たんぼ辞職願ひ出す
投票はしないが文句ばかり云う

幾重にも包んだ卵温かい
お花見もお重の出番無い時代
大志若早く結婚夢見せて

あんたとは口をきかない三十秒
お釈迦様無縁仏にも慈愛の眼
目をとじりや古里浮かび寝付かれぬ

二十年孫の記念樹八重桜
あちこちと残雪余所に福寿草
悪口は自分語りと教えない

春雨に濡れる気失せて酔うドラマ
バランスボール挑んでみたがアハハハ
春がすみ時には大山見せてくれ

やとと来た箱の出番だ異動時期

キヨミ

修平

ちあき

耕治

義徳

厚子

優子

ひとみ

美龍

ヨシエ

見

宏之報

登美枝

宏之

紀の治

恵子

汪

かね子

雨奇

美穂

ひろこ

治代

あやこ

令位子

美佐子

瑞枝

美草

ゆたか

花あらし帽子飛ばして駆けつくだ
多美子
千代

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

毒舌と言ってもほめる時はほめ
房子
哲夫
愛想もいいがお料理まだですか
愛想は悪いが旨いものがでる
智恵子
昌紀
前のめりの意欲に足がついてこず
久仁雄
終の章流れに乗って逆らわず
光久
本物の愛想下げて孫が来る
たもつ
悪魔の手愛想も小想も尽き果てた
加お里
愛想笑いははまってる自己嫌悪
美智代
千切ればかり尻尾を振つてくれるボチ
扶美代
横道に逸れた手毬がよく弾む
千代
心地よいもてなしさすが名旅館
蕉子
やるべきことは終了の日向ほこ
希久子
愛想よい言葉に人の輪がほぐれ
みつ子
久し振る老けてないねと言っておく
楓楽

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

こだわりを日記に書いてようねむれ
忠央
清濁の狭間で大人への脱皮
祥昭
全力を出しきりぬぐう汗きらり
武彦
こだわりを捨てたら見えて来る未来
壽峰
程の良い距離で育む愛の嵩
高鷺
横殴りの雨ビリオドを打たせない
仁
適当に飛んで雑草生え延びる
かすみ
口角を上げてでも五十の顔は顔
信子

十四歳若さに希望夢与え
義廣
適当に切つて悔いている裁ち鋏
寿子
適当な返事に子供助かない
博泉
抱きしめて欲しい日もある根無し草
朝子
かはいあう人とひととが美しい
修
適当なところで生きてる舌の先
高志
おつちよこちよい言うことだけは勇ましい
弘委智
魂胆が見えかくれるばら贈り
さち子
こだわりを持ってつらぬく強い人
西
怒らせた昨日あやまるソーダ水
郁夫
あの時の私を妻にしたあなた
銀杏
今に見ろまだまだ咲かずぞ老いの花
ルイ子
内の人勇ましいのは言葉だけ
鈍甲
こころよいうれしさ完治した病
尚世
右翼が担ぐドンキホーテが勇ましい
賢子
脳トレにラインで語る絵と言葉
秀雄
適当な男と続くやしろべえ
一
勇ましいこともあったと回顧録
亜成
付度をおもて久し家族愛
恵子
嬉しいといつも脱線する時計
怖いもの知らず一人で吠えている

岸和田川柳(大阪) 石田ひろ子報

デュエット曲素敵な彼について揺れる
和美
どちらにも傾くことはなく孤独
ふさあ
四感を磨き五感と向かい合う
喜八郎
五分ごと尻尾の有無を確かめる
隆昭
老う親に拉致解決は五里霧中
忠太
五人寄ればまとまるものもまとまらず

核ゼロを競う五輪もやりなさい
ダン吉
五感まで届かぬことが多く成り
洋一
私を陰干しにする風五月
あかね
ふわふわの卵とじする春野菜
カズ子
フワフワのオムレツ焼けるのは夫
みつ江
ふわふわとのんきな海月羨まし
喜代志
餅肌の女怪しい後妻業
大輔
囁きを断ち切るように陽が沈む
昭
誰が何故打つたのだらう糠に釘
益男
耳もとでフランス語など囁かれ
敏治
歳時記を繰れば囁く四季の風
一子
囁きは品良し声大は人良し
白水
囁きは怒鳴り声より聴きとれる
信二
福島のささやくように詫びて風ぎ
笑司
囁きが騒めきとなる長談義
義泰
教室の私語にいらだつ老教授
玲子
陽が落ちて人もネオンも厚化粧
珠子
ネオン街人を迷わす魔女がいる
ひろ子
五カ月の幸せ包む岩田帯

六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

妥協するつもりか妻のうまいお茶
武彦
才ないが明るくまじめ泣き上戸
弘
大物になれば子供の意地つ張り
和宏
子は顔を明るい方を向けている
洋次郎
明るいと言えぬ愚痴が言えません
利子
きのうからあんな出来ると来たメール
ひとみ
さつきまで新婚さんがいた余韻
千代
意地を捨て和む会話でまとめあげ
正彦

春眠とうっかり病でまた遅刻
 仏壇で亡父の時計が動いてる
 響き合う音に酔いしれ友しのぶ
 初夏の宵仕事帰りのうす明り
 見終つて暫くヒーローなりすまし
 意地を張り帰る夜道の孤独感
 この年も余裕で聴ける除夜の鐘
 老いてなお多少の意地はもつてます
 幸せの今日一日を句に綴る
 通園のバスが揺れてる笑い声
 遅刻してみんなの視線受けている
 意地になる何と寂しい孤独感
 清貧の意地が流れている背骨

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

ほろ酔いの仲間が集う温い酒
 想いの外に煙る情けは胸の内
 目の前に来た幸せを鷺掴み
 海鳴りが聞こえる愛が蘇る
 平穏な行く末願う子の寝顔
 メランコリー切り取るような春の風
 人間の殻を破って待つ発芽
 一日中煙る失語の小糠雨
 初夏の旅義理も上着も脱ぎ捨てて
 はらはらと落ちる命を拾う耳
 感動のドラマが残る胸の中
 飲み方で酒は毒にも薬にも
 耳掘りでいつも夢見る母の膝
 とほほほ詰めの甘さで墓石掘る

(大) 敏夫

道子

邦子

芳江

妙子

浩司

保雄

じろう

美恵子

(河) 敏夫

美穂

光久

無限

欣之報

寿子

森子

清子

かこ

高鷺

常男

壽峰

あかり

耀一

慶子

一文

千里

武人

両文

共謀罪壁の向こうに地獄耳
 くよくよは案外通過日日新た
 膝交え話せば分かる鬼である
 野火煙る私の業を焼くように
 信頼を台無しにした横車
 母の日の母はなくとも胸の棲む

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

懐は寒いがハート五月晴れ
 七人の敵と五月の空に舞う
 新緑の五月ざわめく生命の芽
 菖蒲湯で香るハチマキ孫とじい
 真夏日が続く列島まだ五月
 憲法が過去へひたひた五月闇
 想い出の五月雨の夜人恋し
 雨に打たれてみどりは緑らしくなり
 連休はゆつくり過ぎす一人酒
 五月場所美絵ばかり張る横綱だ
 減反に不平こぼはしている雀
 死に際の美学骸を見ぬ雀
 おしやべりな噂雀に泣かされる
 身の丈で雀も踊る恋ダンス
 母の愛知らず子雀独り立ち
 町内の雀はみんな噂好き
 メダリスト迎え空港大フィーバー
 空港に咲くファッションの世界地図
 故郷は僕の心のエアポート
 轟音の明日へ飛躍の滑走路
 空港に国籍不明のバラが咲く

紀雄

朋子

仁

恵

安男

欣之

紀雄

弥生

かこ

よしみ

まつお

信二

絹子

瑠美子

一文

真

一歩

欣之

喜代子

フジ子

高鷺

光男

雅枝

朋子

清

寿之

扶美代

翔ぶ夢がみたくて独り空港に
 空港の荷物どきどきする検査
 文明の関節となるエアポート
 照れながらハグで見送る国際線
 蟹食べて土産のカニを持つ千歳
 空港で兄おとうとに殺された

大山滝句座(鳥取)

新家

完司報

挨拶が面倒なので道変える
 銃口を突き付けられている余生
 短足が飛んで除けたが水たまり
 休暇願ひ顔色を見てからにする
 人の心に影響のない一人の死
 沖繩の心引き裂く権力者
 淀みから流れる間延びした時間
 ゆりかごの遙かに赤門を描く
 初恋は記憶の中の蛇毒
 持参金に仔牛を付けて婿入りす
 除け者にされて暴れている坊や
 「釣りバカ日誌」心が痛い日の漫画
 主婦業に閑という字は見つからぬ
 乗り心地如何でしょうが霊柩車
 焦らない暇になろうがなるまいが
 山はか俺を呼んでる俺の声
 過労死の続くわが国胸痛む
 スルメ噛み損ねて舌を噛んじゃった
 暇でない今は養生してる時
 暇を見て下手な川柳ひねろうか
 水平線海の向こうは危険国
 ハートの轍は焼酎で取り除く

恵

六点

みつこ

ちづる

美代子

いさお

大鯰

麦青

けいこ

雄大

楓花

照彦

芳山

芳光

美ッ千

蟹郎

石花菜

幸子

昭子

規雄

コスモス

道唱

正男

重忠

久子

清明

鈴野

完司

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 みちのく	15日(土) 17時締切 試す・ぐつぐつ・名所	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	16日(日) 12時開場 素人・調子・冷たい・自由吟	寝屋川市産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	16日(日) 14時締切 ひたすら・微妙・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	17日(月) 13時50分締切 泡・泳ぐ・遅い・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さ ん だ	18日(火) 13時30分締切 協力・浴びる・テクニク 鮮やか・自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川 柳 たちばな	19日(水) 14時締切 印象吟・線(互選)・出る 自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸 和 田 川 柳 会	22日(土) 12時30分開場 肌・救う・ぎりぎり・サービス	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	22日(土) 12時30分開場 海・穴・水	和歌山商工会議所 4階第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市 民 会 川 柳 会	23日(日) 14時締切 行列・やがて・ゴール	陵南の森公民館 近鉄「高鷺」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	23日(日) 13時30分開場 自由吟・アプローチ・旧姓 手向う	開発ビル 2F 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	24日(月) 18時開場 うらはら・扶む・ハーフ・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川 柳 塔 すみよし	30日(日) 13時開場 虹・泳ぐ・プラン	住吉区民ホール 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	30日(日) 10時30分開場 松江市川柳大会	松江テレサ 4F 詳細は川柳塔誌5月号参照(137ページ上段に記載)
京 都 塔 の 会	31日(月) 14時締切 ペア・つもり・必	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

7 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	1 日(土) 14時締切 支える・犠牲・気まぐれ・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	1 日(土) 14時締切 笛・ゆらゆら・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL・FAX 0721-25-0603
倉 吉 川 柳 会	1 日(土) 14時締切 屋台・いっぱし・けらけら	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 な ら	6 日(木) 14時締切 食べる・さらさら・デート	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄「奈良」駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
川柳大阪	8 日(土) 14時締切 蹴る・訛・教室	地下鉄・長堀鶴見緑地線「京橋」駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六 甲 川 柳 会	8 日(土) 14時締切 はらはら・野菜・坂・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11 山崎武彦
川 柳 塔 打 吹	8 日(土) 13時30分締切 海・ごつてり・うかうか	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	9 日(日) 14時締切 不滅・まっさら・休む・雑詠	八尾市洪川町・安中町集会所 1F JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	9 日(日) 14時10分締切 兼 題 = 決意・小さい・なぜ 課題吟 = 柱	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川 柳 会	10 日(月) 14時締切 楽観・閉ざす・時として・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「ブレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほ たる 川 柳 同 好 会	11 日(火) 13時30分締切 九州・乗る・偉い	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール「蛭池」 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 塔 さ か い	11 日(火) 13時開場 馴れる・役・折句: ゆうひ	東洋ビルディング 4F 南海「堺東」駅北西改札口から3分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川 柳 あまがさき	11 日(火) 14時締切 置く・火・どっさり・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
あかつき 川 柳 会	14 日(金) 14時締切 遠い・夜・人生・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄

番傘川柳本社 8 月句会 (53回水府忌)

日 時 8月6日(日)
午前18時(開場 17時30分)
場 所 ホテル大阪ベイタワー(JR弁天町駅
地下鉄中央線弁天町駅下車)
〒552-0007 大阪市港区弁天1-2-1
TEL 06-6577-1111

会 費 1000円
お 話 当日発表
宿 題 「エ コ」 北川ヤギエ 選
「熟 い」 大堀 正明 選
「記 憶」 田中 螢柳 選
「男 」 古今堂蕉子 選
「プライド」 森中恵美子 選
各題2句 出句締切 18時30分
〒530-0047 大阪市北区天満5-6-26
TEL 06-6361-2455

第69回 西日本川柳大会

と き 10月8日(日) 9時~16時
ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削
久米南町文化センター

第1部 兼題(投句) 7月15日(土) 必着
「宴」 大家 風太 選
「糸」 大森 昭恵 選
「黙る」 野島 全 選

投句料 1000円
投句先 〒709-3614 岡山県久米郡久米南町
下弓削446-2

弓削川柳社宛(電話 086-728-3540)

第2部(当日) 各題2句・特別席題1句

欠席投句拝辞

兼 題(大会当日 11時締切)

「飽きる」 岡田 篤 選
「たっぷり」 森山 盛桜 選
「情 け」 村上 氷筆 選
「怪しい」 新家 完司 選

特別席題(当日発表) 長谷川紫光 選

参加費 2000円

主 催 弓削川柳社

しまね文芸フェスタ2017 島根県川柳大会 しまね文芸フェスタ

日 時 9月10日(日) 受付 9時30分~
会 場 ビッグハート出雲 白のホール
出句締切 13時15分 開会 14時
参加費 1500円
欠席投句料 1000円(切手不可)

*昼食は各自でお済ませください

投句先 〒699-0013 出雲市荻野町363
柳楽たえこ 宛
TEL 0853-22-6023

投句締切 8月19日(土) 必着

兼題と選者(各題2句)

「日 本」 斉尾くにこ 選
「芸」 竹治かし 選
「食べる」 渋谷由紀子 選
「柱」 熱田熊四郎 選
「戦う」 渡辺 康乃 選
「原」 石橋 芳山 選
「見る」 藤井 寿代 選

NHK学園 第3回 誌上川柳大会

課 題「雑 詠」

(新家 完司・広瀬ちえみ 共選)

「列」

(西出 楓楽・渡辺 梢 共選)

「面白い」

(佐藤 清泉・笹重 耕三 共選)

各題2句

締 切 8月25日(金)

投句要領 指定の用紙(コピー可)

ひとり何組でも可

投句料 ①雑詠2句の場合 1200円

②雑詠2句と課題「列」「面白い」

各2句、計6句の場合 2400円

*それぞれ入選作品集代を含みます。

送金方法 郵便小為替・現金封筒・郵便払込

(切手不可)

お問合せ・投句用紙請求・投句先は

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2

NHK学園誌上川柳大会事務局

電 話 042-572-3151(代)

第23回 川柳塔まつり

と き 平成29年10月7日(土)

開場:午前11時 出句締切:正午 開会:午後1時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

平成28年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成29年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「おじいさん、おばあさん」 川柳塔社 西村 哲夫 氏

兼題 「もしも」 鳥取 斉尾 くにこ 選

「歌」 兵庫 庫久保田 千代 選

「追う」 愛知 早川 遡行 選

「プレーキ」 青森 福士 慕情 選

「時間」 番傘川柳本社 主幹 田中 新一 選

事前投句 「魚」(9月1日必着) 川柳塔社 主幹 小島 蘭 幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正午(午後5時頃終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会費 2,000円(当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎呈 記念品

《懇 親 宴》

と き 平成29年10月7日(土) 午後5時~7時

ところ ホテルアウィーナ大阪 3階 葛城の間

☆会費 7,000円 先着申込み 130名様

☆宿泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

*事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて
9月1日(金)までに本社事務所宛、お送りください。

*懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振替 00980-4-298479

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日 午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車 南出口徒歩3分)

プレラにしのみや6F

投句先 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫

○

寛川河亀片加奥大大長緒江梅延上上井市足上秋奥西
島 寿

人合岡山川澤矢坪川方谷澤庵田垣上坪立原元田口

靖良敏哲 靖洋 一哲美勝盛野ひキじ武つ てみい
次 津 とヨろ な つわ
夫種夫子忠鬼郎伸徳夫子弘夫靄みミう臣子翔る子ゑ

長難七長中富都寺寺近田竹佐酒酒小黑小藏久北北北
反 保

島波田浜西永倉柚井兼中山藤田井林田山田田野島川

敏伯順美豊恭求富秋敦章千健浩紀わ能紀光千哲邦美
賀

子備子籠子子芽次果子子子彦司華こ子乃子代男男香

両山山山山山丸松前牧堀古福藤藤藤藤福能野長長

川田田崎口内山井川渕 川田原本岡井島勢口縄野

無昭耕武光 一文千富正奮正み り宏弘利晶嘉峰
九 津喜 よ 代

限朗治彦久迪之香子子和水彦し直こ造子子子子明

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

浅井 公平	安土 理恵	安福 和夫	阿部 紀子	井上 照子	岩本 浩二	榎本 日の出	榎本 舞夢	大川 桃花	大久保 眞澄	太田 昭	奥田 みつ子	古今堂 蕉子	小谷 集一	佐々木 満作
高杉 千歩	高橋 敬子	谷口 義	辻内 げんえい	津村 志華子	寺井 弘子	西出 楓楽	能勢 良子	原田 すみ子	藤井 正雄	前川 善之	山本 希久子	横山 捷也	米田 恭昌	渡辺 富子

暑中お見舞い申し上げます

竹 原 川 柳 会

会 長

小 島 蘭 幸

会 計

岩 本 笑 子

石 原 淑 子

六 田 半 徳

土 井 輝 恵

若 年 幸 子

ほか会員一同

暑中お見舞い申し上げます

川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々

会員 一同

事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2丁目171-3

中村 金祥

TEL 0857-59-1056

月例会：毎月第4日曜日 13:00～

会 場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔さかい

山山村宮増伏原内遠谷高柴齋小源河奥太榎内石
根岡上本井見 藤山川木本藤森田内 田本田田
妙富玄かりヨ雅清憲唯 世ばさ大八月時とし日の志ひろ
子美子也ん枝明晋彦教憲子 はくら造代子雄お出子子

米山矢向升古日中徳津田島澤小小河柿太榎梅出
澤本倉井成川野野山田中田井山林内花田本木海
俣半五 光 健みシルゆ誠敏永若天和扶舞澄素
子錢月清好雄愿吾こク子一治久芽笑夫美代夢空馬

暑中お見舞い申し上げます

富 柳 会

森 下 よ り こ	林 澄 子	藤 田 武 人	栃 尾 奏 子	中 村 恵	関 よ し み	肥 山 一 文	山 野 寿 之	中 崎 深 雪	中 井 ア キ	池 森 子
他 一 同	都 筑 文 重	福 元 田 鶴 子	岸 本 慶 子	松 本 正 治	沢 田 和 子	田 嶋 伸 雄	井 澤 壽 峰	久 世 高 鷲	石 橋 未 知	河 野 彦 次

川柳の理論と実践

楽しく読み進むだけで実力がつく〔川柳の理論と実践〕。
このたび第3刷ができました。まだお持ちでない方は、
是非この機会にお求め下さい。

四六版ソフトカバー 326頁。送料+消費税=2,000円

〔ご注文は下記へ。ハガキかFAXにて。お支払いは到着後で結構です〕

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司
FAX専用 0858-52-2449

暑中お見舞い申し上げます

河内長野川柳協会

顧問 板尾 岳人

長柳会・プラザ川柳

藤	大	辻	谷	梶	石	木	山	黒	坂	村	山	会 員 有 志
塚	島	村		原	田	見 谷	室	岩	上	上	岡	
克	と	ヒ	久	弘	隆	孝	光	靖	淳	直	富	
三	も	こ	美 子	光	彦	代	弘	博	司	樹	美 子	

川 柳 葦 群

■主な内容

同人作品「葦群抄」

近詠作品「葦の原」

作品鑑賞 新家完司・大西泰世

柳論 エッセイ 句会報 ほか

■A5版 45頁 季刊(年4回)

年間 4000円(〒込)

発行人・編集人 梅崎流青

〒832-0087 福岡県柳川市七ツ家426 TEL.0944-72-6046

振替口座 01760-2-120254

E-mail house7@cello.ocn.ne.jp

暑中お見舞い申し上げます

川柳あまがさき

会長 長浜美籠

例 会 毎月第二火曜日
場 所 尼崎女性センター・テレビエ

石川きよみ	上垣キヨミ	江見清	大岸和子	岡部美浪	片山かずお	北川純	九鬼洋子	坂本晴美	谷祐康	田中章子	都倉求芽	永田紀恵	藤井宏造	古川奮水	前川千津子	宮崎咲貴	山口ヨシエ	渡辺柳明
足立つな子	入江修平	上田ひとみ	大浦初音	奥村五月	川端蕙子	北野哲男	木藤こみつ	小山紀乃	酒井紀華	鶴田遠野	藤田雪菜	堀正和	松村里江	溝端利夫	新井つね湖	市坪武臣	内田美也子	長川哲夫
加川靖鬼	河津正治	木山歌留多	酒井健二	竹林千代子	玉村幸子	中井楓花	中川ひろ介	野口晶子	平井富夫	藤岡りこ	三好京江	山田耕治	森松まつお	森松芳香	細川花門	小山聖也		

季刊

「川柳展望」

A5版 一五二頁
誌代 四、九六〇円（年間）

☆見本誌進呈いたします。

〒567・0009
茨木市山手台4-6-3-101

TEL 072・649・5226
FAX 072・649・2334

川柳展望社

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

藤	網	永	小	江	近	伊
原	島	井	林	島	藤	達
千	榮	縣	杵	勝		郁
恵	子	笹	香	弘	正	夫
子						

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会 員 一 同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋6丁目駅③出口）
原則として第4月曜日・6時から（8時終了）

場 所	勉 強 会	句 会	斎 藤	永	貝	荒	多	寺	藤	宮	小	水	ほ た る 川 柳 同 好 会	暑 中 お 見 舞 い 申 し 上 げ ま す
				森	塚	木	田	井	原	田	野	野		
				美	正	郁	契	柳	桂	信	黒	黒		
				佐	子	子	子	童	子	男	兔	兔		
場 所	勉 強 会	句 会	斎 藤	上	上	樋	池	中	栗	田	高	藤		
				山	田	口	田	山	田	中	嶋	沢		
				堅	陽	順	純	春	久	螢	長	一		
				坊	子	子	子	代	子	柳	勝			

暑中お見舞申し上げます

岩 美 川 柳 会

会 員 一 同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-155

TEL 0857-72-0762

山 下 蟹 郎

暑中お見舞い
申し上げます

川柳茶ばしら

早川 遯 行
板山 まみ子
山本 三樹夫
脇田 雅 美
金子 美千代
関本 かつ子

暑中お見舞申しあげます

和歌山三幸川柳会

主 幹 三宅 保 州
理 事 長 古久保 和 子
副 理 事 長 喜田 准 一
副 主 幹 磯部 義 雄
理 事 川上 智 三
田中 み ね
玉置 当 代
楠見 章 子
武本 碧
森口 美 羽
宇野 幹 子
石田 ひろ 子
山 東 日 出 男

事務局

〒640・8111

和歌山市新通七―一七

古久保 和 子 方

TEL 073・423・8930

例会 毎月第四土曜日 12時30分

和歌山商工会議所

「バス停 和歌山市役所前」

和歌山県川柳協会

和歌山県川柳協会25周年記念全国誌上川柳大会
ご参加をお待ちします。

会 長 三宅 保州

副会長 川上 大輪

[お問い合わせ先] 事務局長 古久保 和子

〒640-8111 和歌山市新通7丁目17

TEL 073-423-8930

暑中お見舞申し上げます

川柳塔きやらぼく

会 員 一 同

事務局 〒683-0804 米子市米原5-1-3-304

TEL 0859-21-7656

竹村 紀の治

暑中お見舞い申し上げます

浅田河南子 磯島福貴子 今井万紗子 上山 堅坊 宇都満知子 江島谷勝弘 大内 朝子 大野 照月 奥村 五月 河田富美子 川端 一步 北村 賢子 古今堂蕉子 小林 わこ 阪井美世子 鈴木いさお 高木 信醉 滝沢 美濃 手崎 川童

中園 功 長浜 美籠 中原比呂志 中村 喜楽 長谷川 司 東川世志子 坊農 柳弘 堀田 温子 前田 紀雄 宮西 弥生 森松まつお 森松 芳香 門野 隆司 矢倉 五月 山田かよこ 山本 昌代 芳 鉄心 和田 和

川柳大阪
会長 山崎 珠生

あかつき川柳会

(鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かす) (会則)

◆「あかつき」(月刊300円)

〈会報〉

◆(助大阪保育運動センター)

◆毎月②金 13時開場

〈句会〉

宮崎	塩満	松本	前田	西川	中里	鈴木	塩田	阪井	加山	荒川	岩佐	近藤	川端
シマ子	敏	千鶴子	紀雄	ひろし	はこべ	いさお	一行	美世子	勝久	鈍甲	ダン吉	一正	歩

暑中御見舞い申します

川 柳 藤 井 寺
川 柳 み さ さ ぎ
会 員 一 同

代表 高田美代子

暑中お見舞申し上げます

い ず も 川 柳 会

会 長 竹 治 ちかし
会 員 一 同

事務局 〒693-0026 出雲市塩冶原町3-1-5 竹治ちかし 方
TEL 0853-22-4309

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 さ ん だ

会 員 一 同

例会：毎月第3火曜日 13時・JR三田駅前 キッピーモール6F

暑中お見舞申し上げます

京 都 塔 の 会

会 員 一 同

暑中御見舞

申し上げます

川柳塔唐津

岩 崎 實

坂 本 蜂 朗

仁 部 四 郎

山 口 高 明

吉 富 節 子

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔まつえ吟社

主幹 石橋芳山

同人一同

連絡先 〒690-0001 松江市東朝日町206-7

石橋芳山方

TEL. 090-2003-5846

暑中お見舞申し上げます

豊中もくせい川柳会

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

はびきの市民川柳会

会長 徳山みつこ

会員一同

暑中お見舞申し上げます

鳥取県川柳作家協会

会 員 一 同

会 長 森 山 盛 桜

〒689-0423 鳥取市鹿野町中園180

TEL. 0857 - 82 - 1491

暑中お見舞申し上げます

川柳塔鹿野みか月

会 員 一 同

会 長 森 山 盛 桜

暑中お見舞申し上げます

サークル 檸檬 様

吉村	山本	山本	山口	松尾	前	西村	西出	西口	長浜	古今堂	久保田	片岡	奥田	太田	井丸	浅野
久仁雄	希久子	加お里	光久	美智代	たもつ	哲夫	楓楽	いわゑ	美籠	蕉子	千代	智恵子	みつ子	扶美代	昌紀	房子

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同人一同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14

川上大輪方

電話・FAX 073-462-7229

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔なら

顧問	会計監査	〃	〃	〃	〃	〃	〃	世話人	会計	副会長	副会長	会長
中原比呂志	江島谷勝弘	渡辺富子	長谷川崇明	仲堀優	仲西賛郎	高畑おたか	加門萌子	大久保真澄	飛永ふりこ	宇賀史郎	安福和夫	安土理恵

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔みちのく

主幹 福士慕情

同人一同

事務局 〒036-8275 弘前市城西1-3-10

稲見則彦 (☎0172-36-8605)

暑中お見舞申し上げます

川 柳 塔 社

名誉主幹
主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 理 事 長
副 理 事 長
常 任 理 事

吉村久仁雄	松原寿子	内藤憲彦	島田誠一	坂裕之	久保田千代	大久保眞澄	居谷真理子	足立茂野	鶴田遠野	木本朱夏	川上大輪	新家完司	小島蘭幸	河内天笑
-------	------	------	------	-----	-------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------

森松まつお	藤井宏造	鈴木いさお	佐々木満作	古今堂蕉子	片山かずお	江島谷勝弘	石田隆彦
-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	------

川柳塔社常任理事会

編集後記

★路郎の忌 睡蓮水の旅
つづけ 薫風

★「麻生路郎読本」を
辿って」と題して淡路放
生さん、岩崎眞里子さん
に玉稿を戴いた。「肉と
葱」私の最も好きなエビ
ソードである。ともすれ
ばマイナスに見られがち
な出来事であったが、放
生さんのペンは路郎の本
質、人間性を見事に描出
している。眞里子さんの
「奇跡のような麻生路郎
の活動と行動は、本人の
強靱な精神力と体力は勿
論だが福寿草の妻あれば
こそ」と霞乃夫人に思い
を馳せる眼差しは深さ、
やさしさを導くと思う。
★すべての職をなげうつ
て川柳職業人を宣言した
路郎の「他の系統の柳誌
を読んだり、他の吟社の
句会等へ出てはならぬ。

句が乱れるからだ」との
排他的な発言には背けな
い。しかし、「川柳を上
手になろうと思えば、俺
に体当たりでぶつかって
来い。それは川柳雑誌へ
投稿することだ。投句す
ることによって選句指導
を受け、自己の句の歩み
方のおのずと判る」。こ
の熱い情熱に満ちた言葉
には説得力がある。

★毎月の川柳塔への投句
8句。蘭幸主幹がどの句
を抜いて下さるのか、ド
キドキわくわくした。そ
れが勉強だったが6月号
から自選集組になった。
毎月の呻吟から解放され
たが、路郎のいう「体当
りでぶつかる」機会を
失くして、私は寂しい。

★5月号編集後記の「英
語で川柳の翻訳にチャレ
ンジしてみても・・・」
を読まれた同人・水野黒
兎さんが「何方かが挑戦
しないと塔の名折れ」と

ひとこと

「大阪弁」

昔、NHKに声の出演で「大阪
人二人寄れば漫才である」と読み
あげたのは、当時南海ホークスの
監督だった山本（鶴岡）一人氏。
私は大阪弁が好き、東京弁はなん
となく冷たい感じ。当時の新聞に
掲載された一挿話を紹介したい。
小学校高学年の生徒が新任の先生
に「先生、手はどんな匂いですか」
と質問したところ、先生は思わず
自分の手を嗅いだのです。すると

子供たちが「あほくさ」と言っ
て逃げだしたそうです。大阪弁の真
髓を突いた話のように思います。
妹も関西地区が好きで主人が全
国組織の会社を定年退職したと
き、関西が住み易いからと、奈良
市に住んでいます。関西はおもし
ろく、賑やかな女同士の話が自分
に合っているという。私は出雲で
生まれ、出雲で育ち、全くの井の
中の蛙である。しかし空の青さは
判ります。
(松本 昌)

ばかりに翻訳してくだ
さった。なかなか味のあ
る作品に仕上がってい
る。さっそく吉村先生に
お送りしたところ、「直
訳から575に直すのは
川柳子の刺激を喚起す
るです。なかなかよく
出来た訳」とお褒め頂い
た。
(朱夏)

○四月、フライ級世界王
者井岡一翔の防衛戦。今
回勝てば、具志堅用高の
持つ世界戦14連勝に並
ぶ。挑戦者は同級2位の

シトルラサート、現在（3冠）に勝利。6勝1
61連勝中という猛者。試
合はKOこそ無かったが、
大差の判定で下し14連勝
お送りしたところ、「直
訳から575に直すのは
川柳子の刺激を喚起す
るです。なかなかよく
出来た訳」とお褒め頂い
た。
(朱夏)

○最年少プロ棋士藤井聡
太4段、デビュー戦で
加藤一二三9段に勝って
以来公式戦で27連勝（6
月17日）、非公式である
が「炎の7番勝負」（イ
ンターネット配信番組）
の最終戦で羽生善治棋聖
（まつお）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(9月号)

地名

市都
道府
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

檸檬抄投句用紙

「あっぱれ」(7月15日締切)

9月号発表

齊尾くにこ 選 — 共選 — 山口 光久 選

B

A

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

B

A

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

9月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 川上大輪選
愛染帖 (2句) 新家完司選
檸檬抄「あっぱれ」 (2句) 山口光久共選
インスレーション・ナヒ (2句) 斉尾くにこ選
一路集 (2句) 「試す」 大西泰世選
「センス」 松山芳生選
「充電」 (3句) 居谷真理子選
初歩教室

10月号
檸檬抄「図星」
一路集「城」「好き」
初歩教室「返す」

路郎忌本社7月句会

とき 7月7日(金) 13時開場・13時40分締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06・6772・1441
おはなし 「艶笑古川柳鑑賞」
席題 「
兼題 「粉」
「日本」
「ブラス」
「粘る」
「多分」
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)
小島蘭幸選 岩田明子選 川上大輪選 鴨谷瑞美子選 居谷真理子選 山本希久子選 西出楓楽氏選

本社8月句会
7日(月) 午後1時から
兼題 「犬」「スープ」「つくづく」
「背く」「丁寧」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「見る」 間瀬田紋章 共選
古今堂蕉子
締切 7月20日 発表 7月25日頃
投句料 無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料83円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇一七年(平成二十九年)七月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 (06) 6779-1349
0番
振替 〇〇九八〇一四二九八七九番

川柳塔のホームページアドレス senryutou.net/html/index02.html

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

目次

麻生路郎アルバム

麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」

麻生路郎文集・麻生路郎語録

麻生路郎物語（東野大八）

麻生路郎の人と作品

麻生路郎作品「福寿草」

麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜

麻生路郎・葭乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

電話 06-6779-3490

花野ビル201号

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四一二九八四七九番

平成二十九年 七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇八二号

川柳塔

七月号

定価 八百円（送料 八十三円）